特 71
877

301777000-3
特71-877

鬼桂清兵衛
藤谷　暢吾／編

M28
DBQ- 75

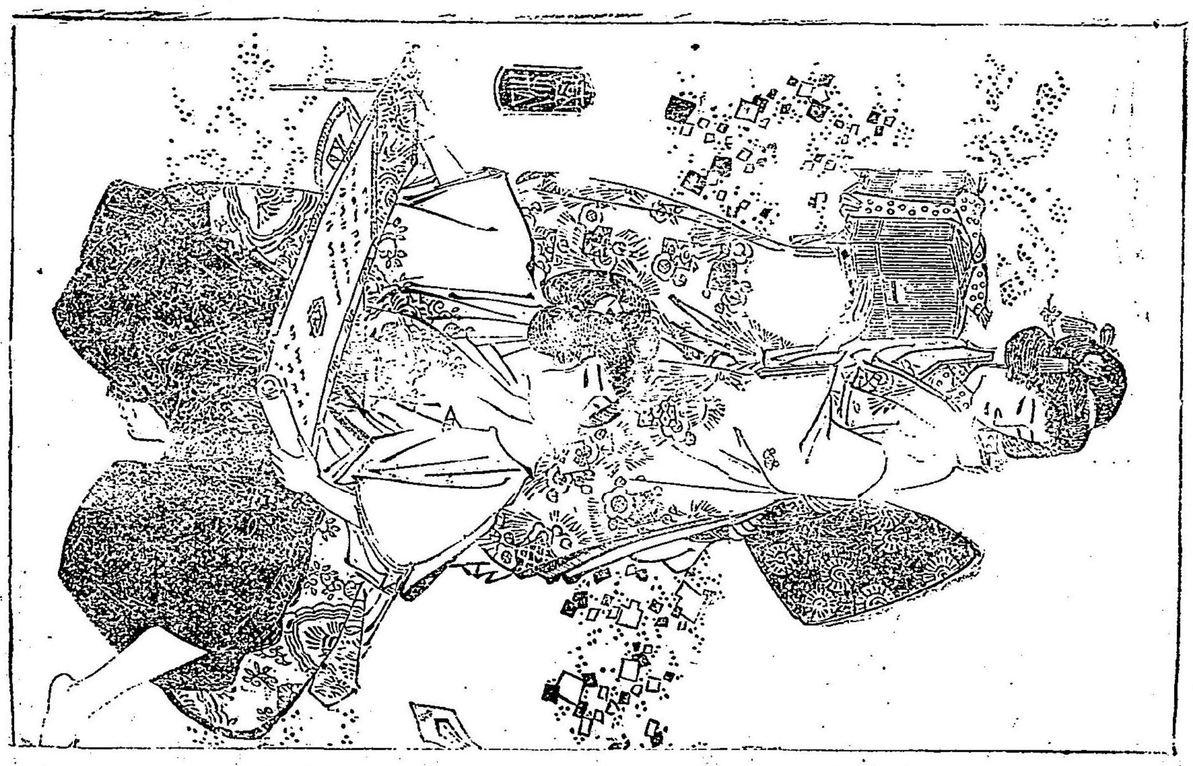
特 71
877

قواعد الإملاء

特71
ふ77

序

蓼喰ふ虫もすきぐ。小説の種類數多けれど。何やうな種類お看客にとりて面白いやら定つたものではなし。金襖の時代物に限ると云ふもあれば。當世向の人情物がよしと云ふもあり西鶴其碩の筆に限ると嬉れしがる人もあれば。京傳馬琴に及ものなしと賞翫する人もあり。サテハ鷗外がよし紅葉が好しと思軒が翻譯物に咽鳴らす好者もあれば。露伴がよしと。元祿流の文學に涎を垂らす好者もあるべし。現にや世はさまぐ。新文學者全盛の時代に。天保作者の壽命長きも道理。何やうな種類の小説なりとも。一概に捨つべきにはあらぜ。此書題して千代廼松風と云ふ。標題何とや



らむ天保臭さし。中の正身は果して如何。吾れ素金襖流の筆法。大嫌ひの一人なれど。フトした好奇の心より。今までかいたことなき。所謂金襖流の筆法もて一篇の物語書いて見たいやうな念ムン〳〵を胸に湧き。此一篇をものすることゝなれり。左れば此書に限りては。正身も金襖の臭味タップリとの評を得んには。眞個作者が一期の面目なれど。腕に覃へのない身の悲しさ。然くうまくは參らざるべし。唯蓼喰ふ虫もすき〳〵な御方をたよりに。やみくもひつかきちらすを云爾

菊月の下旬三樹の里の僑居に

松華庵主人識

鬼桂清兵衛

第一回

出るも枯るゝもおなじ野邊のくさ、いづれか秋にあはで果つべき、

今はむかし、京都嵯峨野の奥なる山里に、柴の庵をひき結び、浮世の榮花よそにして、念佛三昧に日を送る、貞心と呼ぶ尼ありける、年齢三十七八、天質美はしければにや、見るかげもなき今のさまにも、過ぎし昔しの色香は床しげに殘りぬ、庵には、尼の外に十三四の愛らしき男の兒ゐり、世を捨てし身にも、是れのみは斷るに斷られぬ恩愛のきづな、菊若菊若と呼びて愛しめば、母さま母さまと此方も慕ふ、親一個子一個、覓の水音、松吹く風の外には音訪ふものなき山里の草の庵、さびしき秋のものがなしさも忘られやせむ、世に嬉しきは親子の情なり。

念佛看經のひまく〳〵に、貞心書讀む道、物書くわざ、已が力の及ばむ限り菊若に敎へけるに、菊若亦た其心の及ばむ限り、倦まず怠らず學びければ、間もなう母なる尼も舌を捲くばかり上達せしが、如何なる譯にやありけむ、斯くおとなしうさかしう成育ちし菊若、此頃より其性俄かにあら〳〵しくなり或は袂を引裂き、或は裾を汚がし、母が束ねしつやゝかなる髮も、一時と立たぬ間に、おどろに撒き亂して山中を馳せ廻るなど、萬づ今までの菊若にはあらず、果てはいつとなく、書讀むことさへ怠り勝となりければ、貞心尼大概ならず心をいため、甚く戒め懲らせども、馬耳東風、聞入れむ景色もな

〻、日數重ねる中に、其傾行は愈つのりて、夜更まで遊び廻はり、曉天近くなる頃歸へり來ることすらあり。

左れば貞心尼は、愈々心をいため、まだ十三の少年、よもや色戀の爲めにさまよひ歩くものにはあらじ、左ればとて外に友として交はる者もないやうなれば、よしなき遊びに遊び明すにもあるまじ、如何なる所に何せむとて、斯くは庵に尻落つかぬぞ、つや〳〵合點行かぬことなりと、思ひわづらひながら、歸へるを待ちて責め問ふことも屢々なれど、菊若只好い加減に答へて、冷かに打笑むのみ、果ては堪へかねず折檻の鞭をあげて責め問へば、眼を閉おたるまゝ、如何に責むればとて、如何に頼てばとて、一言の答へもせず、あのやうにおとなしかりし子の、如何してマア是れほどまでには變はり果てしかと、唯呆れに呆れて貞心尼、涙ぐむ目に我子の貞を見つむるも憐れなり。

御免下されと膝かけながら、或る日貞心尼が草の庵に音づれしは、此の麓の村で、正直と云ふ假名で通つた彦七と云ふ五十男、豆絞りの手拭ひに水鼻拭ひ、竹椽に腰打ちかけ、久しぶりで好いお天氣になりました、貴女さまにもいつも御機嫌さまでと挨拶すれば、折しも經机に坐りて、看經に餘念なかりし貞心尼は、俄かに此方に振向きて、莞爾に打笑み、誰れかと思へば彦七どの、何時も機嫌で結構と、腰掛に答へて經机傍に推しやり、爐の傍にいざり寄り、麁朶折りくべて湯釜を掛くれば、彦七打見て、「アヽ、モー何卒お構ひ下されますな、實は餘り御無沙汰にもなり、夫れに此頃は少しも暇に、

りがないもの、若しや御病氣ともではないかと、婆々ともく〻御案じ申しと、云ひかけて後に置きし宿呂敷包み取出し、お口には合ひますまいが、婆々が手造りの小麥餅、お笑ひ草と云ひながら、結目解きて煤けし重箱、貞心が前にさしいだせば、貞心「何時もながら和郎達の心切、貞心身に取り難れしう思ひます、お蔭で身體は達者なれど、寒むさに向ふ今日此頃、世を捨てた身も何やら彼やら忙はしなうて、思ひながら麓に下る暇もなく、ツイ無沙汰になりました 彦七「イヱ如何いたしまして、貴は貴女さま、此頃此山の北手の岡の八幡の森に、毎夜不思議なことがでざりますので、若しや貴女さまや若さまの御身の上に、ヒヨンなことでもありはせぬかと、餘り久しうお下りがないもの、老婆とも〻御案じ申して、御無沙汰のお詫かた〻、御機嫌伺ひに參つた譯と、語るを聞きて貞心尼は眉打顰め、「八幡の森と云へば、茲よりは程遠からぬ北手の岡、谷川の流れ一ッを隔るまでの近い所、世の中の不思議も、念佛の功德には勝れぬものと悟つて見れば、何のやうな不思議に逢ふても、恐ひことはないやうなものなれど、聞ひて見れば流石に快くもないもの、シテ其不思議と云ふのは何のやうなことかと、彼の重箱推戴いて傍に置きかへ、塵堆き茶釜の蓋を拂ひて、表へ立てる湯を茶瓶に汲取り、茶碗に汲みて彦七が前に差出せば、彦七幾度か手を以て推戴き、「ドウかお構ひ下されますな、サテ其不思議と云ふのは、斯でござります、マアお聞き下されませと云ひかけて、先づ碗茶に咽を潤したり。

第二回

彦七澁茶に咽を潤し、貞心尼に打向ひ「ソモ其不思議と出ふは、今より十日ばかり前のこと、誰れ云ふとなく、毎夜八幡の森に、天狗様が現はるゝと云ひ云でしより、豫て村にて力自慢腕自慢の壯丁ども、吾れこそ天狗の正体見届け呉れむと、夜更け人しづまりて後ち、彼の八幡森に忍び行き、今か今かと待つ中に、丑満頃とも覺ぼしき頃、一陣の山風サット吹きおろすよと思ふ間もなく、身の丈七尺餘りの大天狗、白髪おそろしにふりみだし、丈餘の矛を右手に携へ、もら〳〵ともらめき出でしと思ふ刹那、力自慢も腕自慢も何の甲斐なく、五六人の壯丁ども、皆な彼の谷川に投げ込まれて、川下まで推流され、溺鼠となりて個ひわがり、命からく〳〵漸くにして村まで逃げ歸へりしかば、此事忽ち世間の評判となりて、今は誰れ一個彼の森近く行く者もない位ひ、鞍馬の僧正坊か、愛宕の太郎坊の惡戯か、夕烏栖に歸へる頃より、村中戸を鎖ざして、外出する者もないやうな始末、若しやと思ふて貴女様がたのことを御案じ申したも、此のやうな不思議があるからのことゝ、水鼻すゝりながら物語れば、貞心腦を冷しながら「扨は耳新らしき不思議な珍事、眞實ならば世に恐ろしきことなりと云ひかけて、傍に餘念なく聞き居たる菊若を見返へりて、「和郎のやうに云ふこと聞かぬ子は、今に其恐ろしき天狗どのにさらはるべしとたしなむれば、菊若ビクともせず、後を向きて冷かに笑ひぬ

彦七が物語りは這上なき良藥、菊若如何に腦太き性なればとて、まだ十三の小兒、さる恐ろしき大天

狗のさる、恐ろしき惡戯なすよし聞かば、何ぼう恐ろしう思はむ、左れば今宵より夜遊びして、吾身に氣苦勞かけるやうなこともあるまじと、貞心嘲かに心中に喜び、彦七が歸へるを待ちて、菊若を膝近かく呼び寄せ、今貰へる粟餅二ツ三ツ與へて、言葉靜かに「今和郎もお聞きやる通り、八幡森の妖怪、天狗か何かは知らねど、何さま恐ひ話、今宵よりは屹度夜遊びを止めよ　我言葉用ひずば、必らず其恐ろしき妖怪の餌とならむ、かまへて我言葉に背き玉ふなと、七ツ八ツの小兒に云ひ聞くるやうに、おどしつすかしつ說き聞かすれば、菊若冷笑ひて「這は母様のお言葉とも覺へず、平生吾等に何とか敎へ玉ひし、世に男と生れたらむもの、何一つ恐ろしと思ふ可らず、恐いしと思ふ者ある中は、男の中の好き男とはなられぬものぞとは、吾身がまだ五ツ六ツの頃より、且暮敎へ玉ひし御言葉ならずや、然るに今は八幡森の妖怪恐ろし、夜遊びするなと戒め玉ふは、如何なることぞ、前のが虛言か、今のが虛言か、吾れは其の大天狗とか云ふ奴の、肉くらはむとこそ思ふなれと、白〳〵やさしき左の腕、右の拳を以て丁と叩ひて見すれば、流石に貞心、返へさむ言葉なく、默然として暫しは我子の良を見つめ居りしが、漸くにして、「其れは只男と云ふものは、心に其やうな勇氣がなければ、眞實の男にはなられぬと云ふことを戒めたまでのこと、夜遊びして母の心を苦しめよとて戒しめたるにはあらず、とやり返へしてハッタと睨らむ。

是れも恩愛の眞實より湧く言の葉と聞きてや、菊若いつもに無う、久振りにて文机取出し、物の本繙

きて讀みぬ、日かげ山の端に落ちて、鐘の音々暮告ぐれども、庵の外に出でむともせず、貞心此のさまを見て、云ひ聞げたることの甲斐ありしを喜ぶにつけ、何となく憐れに思ひければ、今朝拾ひたる丹波栗、米もろともに炊ぎて、栗飯の温かなるを夕餉とし、樊應貌にすゝむれば、菊若うれしげに幾椀となく喰ひぬ。

食事果てゝも、菊若衷の方に立出でむけしさもなければ、貞心愈心を安めて、初夜過ぐる頃もろともに閨に入り、心に慰へたる軍談、面白げに物語りなどする中、疲の勞れか吾れまづ夢に入りぬ。

衛々ありて夜寒の風の簾を鎖ふに、貞心目を覺ませば、いぶかしや傍に臥したる菊若が姿は影もなく、堅く鎖せし入口の戸はいつしか開かれ、虫の音照らす月影明かに拜れたり。

第三回

菊若が姿見へぬに、貞心ハット胸騒かし、手をさしのべて蒲團を探れば、立出でしより間もなきことと覺しく、尚ほ温氣殘れり、我寢息まで嬉び忍び出づること、容易ならぬことなり、まだ遠くへは得行くまじ、跡追ひかけて容子を見むと、氣丈の貞心帶淸めなをし、庵を脚に立ち出づれば、十六夜の月明かに壁を欺くばかり、見渡せば庵の前より、北手の山に登る木樵道を走せのぼる人影、貞心心を沈めて透かし見るに、正さしく菊若が後姿なれば、今は兎角思案の暇もなく、急足に跡を追ふ。

子を思ふ一心に、貞心踏慣れぬ山路物ともせず、あるぎ〳〵攀ぢのぼるに、忽ち繁れる森蔭に、菊若が

姿見失ひぬ、這は何とせぬ口惜しやと、心中に悶ねながら、尚ほ其道をたどるはずに、忽ち嘆々たる流れの響、夜半のさびしさ谷川の畔に出でたり、見かろせば千尋の絶壁削れる如く、彼の八幡の森は、谷川を隔てゝ近く向ふに見へたり、此に到りて流石氣丈の貞心も、不圖今日彦七が物語れる妖怪のこと思ひ出し、吾知らず身震ひせしが、漸くにして心を沈め、霜深き小草を踏分け、流れに沿ふて絶頂の方に登り行く中に、あやしや人の語らふ聲近う聞こゆ。

貞心思はず一歩三歩退さて、身を木蔭に忍ばし、確く胸を強て沈め、容子如何にと窺ふに、間遠からぬ斷崖の邊、繁れる松の枝漏る月に、二個の人影あり〳〵と見へたり、貞心愈々氣を沈めて、再び眼を見はり透し見るに、彼方岩角の上に腰打かけしは、彼の彦七が物語れる天狗と覺ぼしく、白銀を欺むく尺餘の髯を右の手に捻り、左の手には羽扇とか云ふを携へ、身には麻の道服を着けたる鼻高の老人、又其足下にひざまづくは、遥ふ方なき我子の菊若、餘りのことに貞心尼は、只呆れに呆れて心も空、息を呑みつゝ茫然として、両人がさまを見詰め居りぬ。

其時彼の怪しき老翁は、他聞を憚るにや、太き聲を殊更に沈めて、「軍學兵法、僅かの間ながら、早くも其奥義を極め、孫子伍子が秘法は更なり、孔明、楠が兵略に至るまで、其神機を看破り、天晴百万の軍に勝とずるとも恥しからぬ不思議の上達、固より天然の才智衆に擢んでたる爲めとは云へ、吾學の程

思ひやられて、吾れ一層満足に思ふぞや、左れど今の世に事をなさむもの、軍學兵法のみを頼みとすべからず、五條の橋に荒法師を弄びし牛若、川中島に敵將の贈を奪ひし謙信がためしを幸くも、劍法弓術亦用あり、是れより後は吾れ專ら武藝を敎へむに、更に骨身を惜まず、修業の功を積むべきなりと、嚴かに誡き聞かすれば、菊若うやうしく一禮して、愚しき身を捨て玉はず、軍學兵法其奥義を傳へ玉ふのみかは、今亦た武藝を傳へ玉はむとの御意、菊若身に取り、此上なき幸福、高恩死ぬとも忘れ申さず、此上ともによろしくと、大人びて答ふ、老翁は莞爾に打笑み、「去らば先づ今宵より敎へむに、我跡に從ひ來よと身を起せば、菊若も靜かに立ちて後に從ふ、夜は益々更け行きて、谷川の物凄き響の外には、木も草も眠りやしけむ、そよとの風の聲だになし。

あまりの不思議に貞心尼は、愈々驚き愈々呆れて、空しく両個が立去る跡を見送り居りしが、固より紙丈の女なれば、忽ちにして吾れに返へり、兎も角も其所爲を見届け呉れむと、再び見へがくれに跡をつけもくはぎに、行くこと僅かばかりにして、彼の大天狗は、悠々として菊若を見返へり、此方に來よと云ひながら、川に臨みて聳立てる、大岩の上に登るよと思ふ間もなく、菊若を小脇にかいこみ、エイヤット聲かけながら、見る目もくらむ斷崖を、溪間深く躍り下るに、貞心アナヤと胸騒がし、吾れを忘れて彼の大岩に攀ぢ登り、遥かに下を見おろせば、神か鬼か、世にも不思議の妙術、渦まき流るゝ谷川の彼方の磧に、両個ながら、事もなげに立ち居たり。

第四回

大天狗は云ふも更なり、菊若が無事なるさまに、貞心滂く胸撫でおろし、巖の陰に身をひそめし、下なる二人がせんやうを、眼を凝らして窺ひ居るに、下には見る人ありとも知らず、傍に繁れる木の枝折りて木劍に代へ、右と左に立分れて戰ふさま、云はずと知れし劍法の指南、月の光りにあり〳〵と見られば、貞心今まで怪しう想ひし心の中の疑ひも何時しか消えて、嬉しさ云はむ方なく、寒さも忘れて跳め居る中、山寺の鐘雲に渡りて、月影山の端に傾き初めたり。

牛若の昔語りも虚言にはあらざりしか、我子菊若が行末、武運のはど思ひやられてめでたし、斯るこのわれはこそ、此母が涙と共に祝むる言の葉も用ひず、夜叉庵におちつき居ることあらざりしなれ、彦七爺が恐ろしげに物語れる折も、事もなげに聞流したるなれ、八幡宮の怪異聞きしより、今が今まで思はしきもの、怪しきものと忌み怖れたる此母こそ、苟にも武士の家に生れし身に似合はしからぬ白痴者、思へば我子に恩深き、尊師の手前もつたいなし、世に大勝なる我子の手前面目なし、斯くと知らむには、終日庵にあらずとも、夜毎に庵立ち出づるとも、勸めこそすれ何ぞてか止めむ、況て何しに貴折樞の軀を揚げむ、思へば思へば我身ながら淺墓なりける、許して呉れよと眼前、我子の勇しき樣見るにつけ、貞心尼は過ぎつることを悔みながら、伺一心に下なる両個が戯ひを見つめ居る中、やがて戰ひは止みぬ、彼の大天狗は菊若をさし招きて、何やらむ物語るさまなれども、流れの響に折れて

問へす、兎角する間に両個は打伴れて、彼の八幡祢の方をさして行くさまなりしが、間も無う山峽の紛につゝまれて、其姿は見へすなりぬ。

其姿見へすなるまで、見送り居たる貞心尼は、此時漸く立上がれば、東雲の空いつしか紅く、吹く風霜に冷かなり、我子の庵に歸へらぬ中にと、祝の塵を拂ひもあへず、元來し道を庵の方に下る程に、心に再びわれはにや、茨繁き岩山道も足の運び輕やかに 間もなう茲は庵の柴の門。

開かれたる入口の戸の其儘なるに 貞心尼はまだ菊若の歸へり居らぬを知りければ、靜かに汚れし足を拭ふて、其儘我閨に入り、夜具引かぶりて眠れるさまを裝ひながら、菊若の歸へりを待つほどに、稍々ありて忍びやかに柴門を鎖さす音聞へ、間もなく入口の戸を鎖す音聞へしが、亦た間もなく菊若が舞の聲聞へぬ。

吾身に隱し立てするも、つまり吾身に苦勞をかけまじとの孝心より出づること、幵を强ひて尋ぬるもよしなきわざ、況して思ふにまさりし我子のけなげさ、問ふまでもなきことなりと、貞心尼は心の中に思ひ定めて、是れより後は再び問はず、終日庵にわらぬも、夜更けて歸へることあるも、素知らぬ良に過しけるに、菊若は道を好きことに思ひてにや、家にあること愈稀れなり、斯くて日を送ること三月餘り、如何なる譯にやありけむ、菊若俄かに外出を止め、一間の裡に閉ぢ籠りて、讀書三昧に日を送ること人なりしかば、尼は心にいたく怪しみながら、其れとなく、何ぞて家にのみ引籠り居るぞと問ひ尋ぬれば、菊若は何氣なく打笑みて、最早山遊びに厭きたりと答へぬ。

又た問ひ尋ぬる折あるべしと思ひければ、尼は何事も問はず、菊若が庵にありて留守するを幸ひ、日毎に麓の村は更なり、近きあたりの村々托鉢して廻はり居けるが、或る日の夕暮、尼は庵に歸へるが否や、驚ろき訝る我子の菊若を、强ひて一室の上座に居らしめ、遙か末座に身を退きて、うや〳〵しく額つきしが、稍々ありて面を上げ、涙含む目に菊若を見つめて、暫しは默然として居たりける。

第五回

物に動せぬ菊若も、平生に愛はる母の容子に、「這は母さま何と遊ばしますと、戦慄はして尋ぬれば、貞心尼はハラリ落つる涙拂ひも敢へず、「其御氣いは御尤なれど、是れには深い子細のある譯、語れば長いことなれど、マア一と通りお聞き遊ばせ、素あなたさまは、我子にして我子に在はさず、其源を訪れば誰れあらふ松平大和守さまとて、世に時めき玉ひし國守の御遺子、斯く云ふ妾は其御家臣、桂清兵衛が妹にして、殿の御側室に上りし者、左れば腹こそ貸し參らせたれ、妾が爲めには正さしくわなた樣は御主君、時世時節と云ひながら、菊若菊若と呼び捨てにして、親身する心苦るしさ、御推察下されませ、幵も御父上大和守さまと申上ぐるはと、涙ながらに貞心が、物語れる子細と云ふは外ならず。

菊若の父なる松平大和守さのと聞へしは、大和國某々郡の大守にして、世に時めきし人なりしに御異腹の弟に、松平隱岐と呼ぶ腹黑ろき人あり、窃かに兄の家國を押領せんとたくみ、時の家老戸

日大膳等と謀りて、淺ましくも終に血を分けし兄を毒害したりき、左れど固より深くたくめることとて、自らなる病ひの爲めに逝去り玉へるやうにつくろいたることなれば、誰一個知る者なく、只御殿醫宗玄と呼ぶ忠義一途の翁のみ、大和守死後の容体、世のつねならぬに不審を懷き、此のよし窃かに奥方に申上げたり。

貞心其頃はお妙と呼びて、大和守の側室なりしが、奥方との關係極めて睦じかりければ、窃かに此のよし奥方より御傳へありて、お妙が腹に生れ玉へる世纐の君、菊若の身の上に就て、心せよ御意ありければ、お妙も此上なう驚きて、其兄に當る、奥家老の清兵衛に、此のこと告げ聞へしに、清兵衛も亦た一方ならず驚きて、三個三鼎になりて談合し、菊若の御身を守護することに力を戮ぶ居けるに、如何に謀計をめぐらしけむ、松平隱岐は、菊若をさし置いて、自ら亡兄の家國を押領し、大和二郷の太守となり家中の面々の氣を安むる爲めに、假りに菊若を順嫡子として、其跡目を讓らむもの、亡兄の遺子なる、此子の外になしなどゝ云ひふらしける、左れど固より其心中には、菊若に世を讓らむと思ふ心露ばかりだもなければ、或る時はあやしき菓子を贈り、或る時はあやしき忍者を入るゝなど、只管菊若を亡者にせんとて、手を盡しけれども、奥方は更なり、お妙清兵衛心を盡して守護なしければ、其甲斐更になかりけり。

されど兎も角も、隱岐は菊若の爲めには養父なり、親と云ふ名を枷にして、何時如何なる無理難題を申掛くるやも計られねば、奥方始めお妙清兵衛、就れも針の莚に居る心地して、氣を安むる間もなく、嬉しからぬ月日を送り居けるが、斯くて育て參らせむには、萬づ思ふやうにならぬのみかは、故大和守どのゝ、あやしき逝去についての吟味も出來ず、又た菊若の行末も覺束なければとて、奥方の御意に依り、お妙清兵衛両人にて孰れにか菊若の影を隱くさせ參らすることに決し、或る夜闇を幸ひ、窃かに奥方に御暇乞ひし、當年二才にならせ玉ふ菊若は、お妙が懷にかき抱き、亦た松平家傳國の重寶たる系圖の一卷と、天國の名刀とは、其頃幸ひまだ奥方の御手許にありしをもて、窃かに取出し清兵衛が手に堅く預り、兄弟手に手を取りて城中を忍び出でしに、此事早くも隱岐殿の耳に入り、清兵衛お妙の両人が、まだ一里とも行かぬ間に、八方に追手をかけられたり。

彼方は騎馬の荒武者たり、此方は足弱連れの踏み慣れぬ道なれば、何かはたまらむ、忽ち間近から追ひつかれぬ、其時兄なる清兵衛は、お妙を見返へり吾れは暫らく茲に在りて、追手の奴輩防ぎ止むむに、和女は其間に身を逃れよ、和子の御命さへ慈あらせられずば、假令ひ茲にて袂を分つも、機會ありて亦た邂逅ふこともあらむ、イヤ〳〵見事茲にて追手の奴輩防ぎ止めんには、吾れも跡より續かむはぞに、兎も角も本路を行かず、岐路を北へ北へと逃るべしと、言葉せはしく說き示めすに、お妙は流石に固じながらも、　　に追ひ迫るに、兎や角云はむ暇もなければ、諾と答へて帶緒直し、啼く菊若をすかしつゝ、深入して身を危うし玉ふな、大事の前の小事ぞと、涙ながらに兄を勸

め、欲へられたる岐道を、見返へり見返へり北へ走りぬ。

第六回

貞心尼が物語りのついき、

兄が教へし岐路を、お妙は北へ走るはずに、女の足のはかどらず、殊更若君菊若を、懐に抱きまつれば、足の運び一層重く東雲近き頃、漸く玉水の里近う着きたり、幾度となく振返へりて、後の方を眺れども、頼みに思ふ兄清兵衛は影だも見へぬに、心細さ云はんかたなく、武器取つては向に前なき玉煙の勇者なれども、多勢に無勢、若しや彼の場で、變なことにならせ玉ひしにはあらぬかと思ふて見れば何となう胸さわぎして堪へやらず、吾知らず涙流き出で、暫し途方に暮れ居りしが、偖かに思ひ返へし、追手の人々に出逢はぬをまだしもの倖幸として、進まぬ足を引摺りながら、氣を勵まして再び北へ進むに、其日の夕暮都に着きたり。

大和守亡せ玉ひし後は、孫て髪を剃し、亡君の跡を吊ひ、念佛に往生遂げむ覺悟なりしに、其の機會なくて思ひを果さいりしが、今はとて思ひを決し、一ッには亡君の跡吊はむ爲め、亦た一ッには人目を忍ばむ爲め、お妙は都に着くと其まゝ或る尼寺に入りて尼となり、其名も貞心尼と改め、やがて嵯峨野の奥の山里に庵を結びぬ、固より貯金勘からねば、人の助けを乞ふ用なけれど、兄の行衛も問ひ定めたく、故郷の音信も聞さたさに、折々菊若を懐にして、其處彼處托鉢しけるに、子持の尼

とて評判高く、あられぬ噂立つる若さへあるに、腹立しく、間もなく托鉢を止めて 折々麓の村に下るのみ、只菊若が生育を樂みに、さびしき月日を送れるなり。

過去のこと詳に語りて、貞心尼は涙ぐむ目に菊若の面を見上ぐれば、菊若も愁然として、「思ひもかけぬ我身の素性、耻かしや此年頃、さる名家の系統とも知らず、空に年月を送れること吾れながら殘念なりと、思はず嘆息したりしが、俄かに立ちて貞心尼が傍に進み寄り、「お話承はれば、主從とも云はゞ云はれもせむ、左れど和女は正さしく血を分けし我母さま、況して此年來の艱難辛苦、菊若が命は皆な是れ和女が艱難辛苦の賜物、假令ば素は君臣にもあれ、母さまは母さまなり、今更何しに母子と云はずして、主從と云はむ、何卒是れまでのやうに、菊若菊若と云ひ、母さま母さまと云はして下されと、貞心が膝もりうとがして、無心に云へば、貞心は嬉れしさ堪らず、思はずワット泣き伏せしが、漸くにして頭を上げ、菊若が背撫でさすりて、「其お言葉、貞心が身に取りては、冥加に餘り、嬉れしとも喜ばしとも、申上げやうもなさばかりなれど、能う聞せ玉へ、物心覚へ玉はぬ中は兎もあれ、現在御主君の御種たる貴郎さま、假し血を分けし中なればとて、何時までか親貌が出來ましやう、況して貴郎さまには、故大和守さまの奥方に、松の前さまとて、世に御情深き、レッキとしたる御母さまを在するものを、何卒是れよりは、其のやうなこと仰せられず、貞心貞心と仰られ、松の前さまを眞實の母さまと思召し、機會を以て御對面遊ばされ、御孝養肝要なりと云ひ聞へしが、再び言葉をつぎて、「所も今日

に限りて、此のやうなこと申上ぐるは、深い子細のある譯、まだ確には云ひがたけれど、如何やら悲圍の風聞にては、大和なる隱岐さまには、十年の今日が日まで、一日も貴郎さまと妻が所在を、捜し出さんとの御念絶にず、諸國に探索を出して、詮索怠りないとやら、今日も今日とて、麓の村にて聞き出したる一大事と、云ひつゝ立ちて家の內外を見廻はりしが、再び案の座に歸へりて、貞心一段聲を潛め、何事か語り出でたり。

第七回

その時貞心尼は涙を拂ひ、一層聲をひそめて菊若に向ひ、「今日に限りてことゞくしう、御身の上を告げまつるは、餘の義にも候はず、今日しも麓の村を托鉢せし序、無沙汰に過ぎし彦七が、家を音づれ四方八方の、物語りに時を移す折しも、向へる家に聞慣れぬ人聲、合點行かずと破戸の隙より、窃かに彼方を窺へば、京都近き邊の者と覺はしく、三十四五なる商人風の男、何やらんクド〳〵と、家主人に問ふさまなるに、吾れ知らず耳傾むくれば、思ひさや吾身の上を問ふやうなり、尼と云ふは何才位ゐの者ぞ、息子と云ふは何才位ゐの者ぞ、亦た其姿容は何やうな人ぞ、何時頃より彼方の山に庵を結びしなど、何やら彼やら根堀り葉堀り問ふやうす、此山に庵を結びしより以降、最早十年餘りになれど、子持の尼、貞心尼と云ふこと人は知りつらめ、吾濟の素性は、平生親しう出入りする、彦七さへ知らぬことなれば、況して親しからぬ向ひの主人の知るよしなく、唯問はるゝまゝに、庵主は貞心とか淸心と

か申し候へども、息子をのゝ名は何と云ふやら知らず、十年餘り前より、彼處に庵を結ばれたれど、庵主さま、庵主さま、息子どの、息子どのと呼びて、其名は知らぬが多し、左までに聞きたう思召さば、彼の巷までは茲より僅か二三丁の登り、ツイ一走り尼さまに逢ふて、お尋ねなされた方が早分りと、無雜作に答ふる言葉の終はるも待たず彼の男は、當人に逢ふて聞く位ゐのこと、お前のかさしづに及ばぬと、いゝ、にくさげに云ふて此方を振向く容姿、如何やら見たやうな臭と思ひながら、妻再び彼の破窓の蔭より見つむれば、見たとは愚か是れど是れ、隱岐樣の家臣に、勇者の譽れ高き、山井策馬と呼ぶ男、サテは我身の上なりけりと、さりとて見れば、しかすがに、胸躍さて息はづみ、思はず知らず倒れむとせしが、漸くにして氣を沈め、再び彼方を見つむるに、山井は素より妻が此方に、忍び居るとは覺らぬやうす、詳に敎へぬ人の臭、恨めしげに打見やりて、物をも云はず立ち上り、何處ともなく立ち去りたり、其時妻窃かに思ふに假し彼れ好き手づるを得ぬにもせよ、兎も角茲まで手が入るからは、油斷ならずと思ふにつけ、巷に殘し袴らせたる、貴郎さまのこと心もとなく、折しも何の氣もつかず、彼方の窟に茶を沸し居る、彦七が妻を見返りて、强ひて止むるを程よく欺き、暇乞ひして彼の家を立出で、足もそゞろ、氣もそゞろ、急ぎ巷に立ち歸へれば、平生に變はらぬ內外の容子、御無事な貴郎の御姿に、始めて胸は撫でおろしたれど、飽くまで執念き隱岐樣のこと、況して茲まで手が入るからは、何やらなことにならふも知れずと、將來のと案せらるゝにつけ、何時までか御身の素性を隱しまつらんと、

サテこと始終を御話し申したるなれと、語るを聞きて菊若は、慨然として天を仰き、「如何なれば隠岐様には、現在血を分けし叔姪の間にてありながら、斯くまでには吾れを憎しみ玉ふぞ、其れにつけても賢母の苦節、菊若身にしみ骨に徹へて、嬉れしう思ひまする〳〵心掛りは叔父御の清兵衛、其後例等の元よりも分りませぬか、家の寶の系圖の一卷、天國の寶刀も、いと〳〵心もとなしと 問ひ尋ぬれば貞心尼も、幾度となく嘆息して「兄清兵衛の行衛さへ知れたらんには 貴郎さまの御爲めに取りても、貞心が身に取りても 此上もなき幸福に侍れど、尋ぬるかひなく露はぞの、手掛り今にこざりませぬ御家の重寶系圖の一卷、天國の名刀、兄が生死ともろともに、あるや無しや、仰せの通り心掛りと、語らふ折しも庭に對へる、座敷の障子を蹴開さて、躍り入たる七八人の大の男、手に手に十手振りひらめかし、松平菊若、桂妙子の貞心尼、御用御用といさまきて、捕め取らむと進み寄る。

第八回

驚きをすれば影とやら、思ふに違はぬ捕手の面々、御用御用と呼ばゝりながら、障子蹴開き進み寄り、両人を中に取圍めば 菊若も貞心尼も、驚きながら少しも騒がず 菊若「這は狼藉なり人々、何罪あつて吾々を、捕め取らんとせらるゝぞ、貞心「佛に仕ふる身なれども、譯も語らず子細も云はず、無體なことを働かば、其儘に許しは置かぬ、女なりとて侮りやるな、菊若「先づ譯語れ、貞心「子細を云やと、母子互みに聲を勵まし、罵り責むれば捕手の面々「何猪口才な青二才、何を小賢な賣尊の尼「罪あれば こそ捕めも取れ小言云はずと御縄を受けよと、云ひも終はらず左右より、菊若が細腕捻ぢ揚げむと、込み寄るをば寄せもつけず、菊若「無體なり狼藉なり人々、苟にも武士に向ひて、譯も語らず捕縛の恥辱を蒙むらす作法やある 汝等は何れの家中にして、何等の罪科ありて、吾等母子を捕め取らむとはなすぞ、事と品に依りては、深く繰綱も受けむ、無法の振舞に及ばむには、痩腕なれども松平菊若、容赦はせぬぞと聲鋭く云ひ放てば、此時庭前より、竹縁踏み鳴らして上り來れる捕手の頭領、菊若母子をハッタと睨み「推參なり小童奴、大和両郡の大守、松平隠岐守が家中に、去る者ありと知られたる、山非策馬、君の御命を蒙むりて、御家の重寶盗み出でたる、松平菊若、桂妙子、召捕の爲めに向ひしと知らずや、刀無なるぞ、尋常に縄目を受けよと、威たけだかに罵るを、菊若冷眼に打見やりて、菊若「左らば思ふに違はぬ隠岐殿の家中よな、隠岐どのを以て主君と云はゝ、吾れも亦た汝等が主人ならずや主人に向ひて無體の働らき、其上ならず盗人呼ばゝり、假令ひ主君の命なりとて、忠義の武士のなすことかは、義理ある父の仰せにせよ、吾れも亦た大和守が遺子、人非人なる汝等が、無法の縄目にかゝらんやと、大音聲に叱りつけ、ハタッと睨めば山非策馬、流石に答ふる言葉なく、茫然として居たりしがやがて再び聲はりあげ「此期に及びて問答無益、其れ者どもと云ふ聲の下、捕手の面々色を直して一度に、ドット組みつくを、菊若貞心もろともに、身をひらめかして寄せ付けず。

隠なくして身に寸鐵こそ帶びざれ、豫て鍛へし菊若が、奥義を極めし柔術の、世のつねならぬ腕前に、

かて〻加へて貞心尼、女ながらも鬼桂と、人に呼ばれし清兵衛が、妹だけに鋭き伎倆、吾れ召捕りて功名せんと、先を競ふて組みつく組子を、投げのけ蹴のけ、色めき立つを好き機會と、貞心急はしく此方なる、袋戸棚の戸を押し開き、二尺五寸の久國の、一刀手早く菊若に、渡しも敢へず自らも、懷劍同時にスラリと引き拔き、鞘を小栢に身構へする、思ふにましたる両人の早業、組子の面々氣を呑まれ、吾れを忘れてクヂ〻と、尻込みすれば短慮の山井、腰なる一刀引拔いて、高の知れたる女に小童。捕め取らむに何のてまひま、愚圖々々時をつぶさんには、吾先づ汝等を斬殺さん、命惜くば疾く進めと、聲剛して罵る言葉に、組子の面々止む無くも、ドットおめいて進み寄る。

左れど菊若貞心は、事とも思はず各一刀振り閃めかし、聲を合せて喝ふに、鋭き太刀風合せかねてや後に吼る山井が、聲も甲斐なくジタ〻と、斬り立てられて組子の面々、今は孰れも手を負はぬはなく、果ては一度に逃出すに、山井さへも誘はれて、同じく刀を肩にしつ、後をも見ずに逃げ出せば、血氣の菊若嬉れしさ堪らず、諫め止むる母親の、言葉も聞かず跡を追ふ。

秋の日足の早くして、日はいつしかに暮れ果てたり、貞心尼は、逃げ行く敵を追ひながら、何時しか籠むる夕霧に、影を隠くせる菊若の、身上いと心もとなく、聲ある限り呼び止むれど、立ち返へり來るさまなきに、今は堪へかねし懷劍口に、跡追ひ止めんと帶締直す、油斷を見すまし裏口より、忍び入りたる一人の曲者、腰なる一刀拔手も見せず、後の方より貞心が、肩先目がけて斬りつけたり。

思ひもかけぬ曲者が、油斷見すまし斬下す、刀の下に貞心は、肩先深く斬りさげられ、思はず知らずよろ〻と、よろめきながら氣丈の女、足蹈み止めて眩度見返へり、貞心「臭佞なり何奴なるぞと、叫びも敢へず懷劍片手に身構へすれば、曲者は冷笑ひて、誰でもない隱岐樣の家老、戸田大膳が弟に、家中切ての滿事師と、評判高き戸田大九郎、思ひ出せば一昔し、なぜ和女が大和樣の、お目に止まらぬ娘の頃、口說き寄たる甲斐もなく、振つけられた腹立ちまぎれに、斬殺さんと引拔いた、刀は名に合ふ相州もの、腕は自慢の大九郎、只眞一つと思ひの外、如何した拙子か和女の爲め、見事刀は叩き落され、其上ならず組み敷れて、赤班かいた揚句の果て、頑固な父の耳に入り、門前拂ひの身上となり、他郷に苦勞を重ぬる中、兄の世となり歸參を許され、舞ひもどつたる今の身は、和女の兄鬼清兵衛が、後役引呼け奥家老、其名も改め戸田兵部、左れど昔しの恨み忘られねば、如何にかして搜し出し、目にもの見せんと思ふ折から、殿さまより四方へ出されし、探偵の知らせにて、和女母子が此の山里に、忍び居る由聞へしかば、殿の仰せを幸ひに、鬼清兵衛にも敗れを取らぬ、山井策馬を始めとして、組子の奴輩五十人後に從へ忍び込み、在家を見定め謀計を廻らし、逃ぐると見せて小童を引出し、山井が手に捕めさせ、吾れは裏より後の藪に身を、ひそまして容子を窺ひ、機會よくば躍り出で、一つには御家の重寶系圖の一卷と、天國の名刀を奪ひ取り、亦一つには恨み重る和女を殺ろして、鬱忿の晴さんものと、思ふ

折から其れとも悟らぬ和女の油斷、サテこそ茲に至りしなり、何と膽がつぶれたかと、云ひつゝ小暗き一室より、血刀引下げもらゝ〳〵と、もらめき出でし大の男、貞心見るより切齒して、貞心「サテは汝は大九郎よな、荷にも帶刀する武士の身を以て、かよわき女一人を討つに、欺討とは何事ぞ、其れのみならず若君を、死地に陷して功名良、見るも汚らはしき犬武士、假令ひ重傷は負ひたりとも、汝等如きに晴々と、討るゝ者と思ふかヤイと、重傷に屈せぬ烈女の魂、陸子を楯に身搏へすれば、大九郎は呵々と打笑ひ、大九「犬にもあれ馬にもあれ。此期に及びて及ばぬことだは、兎角云はずと天國の所在、系圖の所在、逐一申して往生しろいと、云ひも終はらず立寄れば、貞心は次第に弱る心中にも、系圖と云ひ天國と云ふ、大九郎が言の葉に、偖は兄上清兵衛どのには、彼の夜首尾よく追手の人々斬りまくりて、無事に其身を逃れられしと覺へたり、左らずば此奴が今更に吾に向ひて系圖のこと、天國のこと、問ふ筈なしと思ひにければ、自づと勇氣も加はりて、懷劍逆手に斬りかゝる、大九郎は事ともせず、あぶないわぶないと嘲りながら、右左に身を交はして、隙を窺ひ貞心が、右の手首を確と握り、大九「是れヤイお妙、昔しの大九郎なら兎も角も、武藝百般の奥義を極めて、今では家中に較ぶ者なき戸田刑部、和女等が補に及ぶことかは、シタバタせずと系圖の所在、天國の所在白狀ろい、シテ又た兎清兵衛と云ふ奴は、何處に姿を隱せしか、妹の其方、ヨモヤ知らぬ譯はあるまい、迚も助からぬ其深傷、此世の名殘りに云ふてしまへと、云ひつゝ鄙かに振動かせば、貞心ハッタと睨へながら、貞心「汚はしき言葉、聞く耳持たぬ」と云ひも敢へず、振放さんと身をもがけども、傷負の痛みに思ふに任せず、無念無念と齒を〳〵ひしばりて、恨みに泣くも道理なり。

折しも外面に聞ゆる足音、固より臆病未練の刑部、若しや清兵衛が立返へりしにはあらぬかと、思へば、俄かに怯れを生じ、矢庭に貞心突倒して、竹藪より飛び下り、庭の木蔭に身を隱くせしが、其儘茲も走り出で、道なき山を麓の方に、汗を流して逃げ下りぬ。

第十回

柴若は山井等が、跡追ひ行きさしが、夕霧深く立籠めたれば、忽ち其影を見失ひぬ、塚寇は逐ふ可らず、況して彼奴等もさる者、此儘に大和まで逃げ戻ることヨモあるまい、左らば花の住居も今日まで、無益の長追ひせんよりも、立返へりて母上と、善後のこと談合するに如すと、茲より再び取て返へし、息急き切て花に歸へれば、柴の枝折戸開かれたる儘、はのぐらき花の内、燈火の影さへなく、唯閑然たるばかりなり、合點行かずと菊若は、母上母上と呼ばゝりながら、竹藪より躍り上り、奥なる方へ行かんとする途端にものに躓きて、倒れんとせしが足踏み止め、透して見れば思ひきや、無殘な母の死屍なるに、吾れを忘れて流石の菊若、思はず知らず尻餅つき、暫し茫然として居たりしが、漸くにして、づき、強く胸を推し沈め、ツト立上りて急はしく、筧の水を枇杷に汲み取り、やがて倒れし貞心尼を、抱き起して水含ませ、落ち來る涙拂ひも敢へず、心の限り醉眼り、母さま母さまと呼び生くる。

孝子の眞心神佛も、感應やし玉ひけむ、貞心忽ち目を見開らけば、菊若思はず勇み立ち、菊若「母さまお氣がつきましたか、嬉れしやお氣がつきましたか、貞心「オ、菊若様、嬉れしや御無事で在はせしか、其れと知らねば奸惡無道の、大九郎奴が策計に乘せられ、危き御難に逢ひ玉ひしにはあらぬかと、思へば心も心ならず、幾度となく走せ出でゝ、呼び返へし參らせんと思へども、身には重傷を負へるが上に、前には無法な大九郎、少しの隙間もあらざればと、云ひかけて息をつき「シテ彼の身性未練な大九郎奴は　菊若「其大九郎と仰せあるは、貞心「サテは最早逃げ失せおつたかと、切齒しながら略度なり苦痛を、忍びて裂よりの始末漏れなく物語れば、菊若は憤然たる勢ひ銳く、菊若「シテ其時刻は、貞心「突倒されて人心地失なひしと、思ふ間もなきことなれば、菊若「去らばまだ遠くは得行くまじ、跡追つかけてと立ちれば、貞心「其御怒りは御尤なれど、マア〳〵御心を況め、妾が云ふこと一通り、お聞き遊ばせと、强ひて我傍に坐らせ、苦しげなる息つき敢へず、涙ぐむ目に菊若を打見やり、貞心「千金の御身を輕んじて、母とは名のみの尼の爲めに、危き所に臨み玉ふこと、貞心つゝ〳〵其意を得ず、若し万一のことあらむには、何を以て亡父君の、仇を酬はんと思ひ玉ふや、菊若「亡父君の仇とは、貞心「貞心サレバイナア是れぞと云ふ確なる証據あるにはあらねど、大和守様御逝去の原因は、爰にもお話し申せし如く、如何やら隱岐様の御所爲とより思はれず、若し左あらむには、叔父上なれども隱岐様は、正しく御父君の仇敵、証據を揚げて仇に酬ひ、父君の修羅の妄執晴らし參らせ玉

ふまでは、世に掛け甲斐なき大事の御身體、此尼如きが仇の爲めに、御身を輕んじ玉ふ場合に侍らず何卒確かなる証據を擧げ、仇に酬ひ御家を起し玉ふまでは、深く慎み堅く戒しめ、御身を輕んじ玉ふなかれ、是れ尼が爲めには目前の、仇を酬ひ玉ふよりも遙かに優る功德に侍べると、絶なんとする息の下より、涙と共に訓むれば、菊若は無念骨に徹して、やるかたなけど、事をわけたる母の言葉に、今更立つにも立ちかねて、愁然として目を睫き、菊若「仰せ確に胸に刻みて忘れ侍べらず、左れど此の儘、茲にあらむには、再び彼奴等討伐に向ひ、如何なる珍事を引出すやも計られねば、御負傷の御惱みもあらむかなれど、是れより直ぐに御供して、一先づ茲を立ちのかんと、云ふ言の葉の了るを俟たず、貞心頭を左右に振り、貞心「其の仰せは嬉れしけれど、迎も助からぬ此の負傷、なまなか御供致さんには、却て君の足手まとひ、妾は茲に自害して、身を果てんとこそ思ひ侍べれ、疾々庵に火をかけて、何處へなりとも身を遁れ玉へ、踏み慣れ玉はぬ旅路の空、御心細さは推しまつれど、今は君にも素の菊若さなにはあらで、世に神通不可思議なる、大天狗より傳授の兵法深く奥義を極め玉へば假令ひ百万の敵に圍れ玉ふとも、逃れ玉はんな必定なり、今別れまつる尼が身にも、是れのみは心安う思ひ侍べると云へば、菊若愕然として、菊若「サテは母上には、一切のこと御存じなりしか、貞心「世に大切なる愛兒の御身の上、知らいで何とせうぞと、何時ぞや菊若と大天狗の問答、立聞したること詳に語りて、再び言葉を次ぎ、貞心「世に優れたる御手なみのほど、爰に山井夢を追退け玉へる折、計らず見さはめ感心の

餘り、思はず嬉れし涙を溢しました、菊若「隠しおうらんとは思はざりしも、秘密にせよと云ふ尊師の御命に、背き難くて今が今まで、包み隠せしこと、面目も無うござりまする、貞心「何しに面目ないことがござりましやうや、左ありてこそ尊師も奥義を許し玉ひけめと、云ひかけしが言葉を改め、貞心「兎角云ふ間に時刻移りぬ、疾く此庵に火をかけて、就れへか身を逃れ玉へ、敵は名もなき蠅虫なれど、兎も角総勢五十人、再撃さんにはあなどりがたし、菊若「シヤト申してみす〳〵貴女をと、母子互みに、爭ふ折しも桂清兵衛宗信、攻めて若君菊若公に見参せんと、壁高からかに呼ばゝりて、庭の此方の立木の蔭より、現はれ出でたる大の男、思ひがけねば菊若貞心、共に其方に眼を凝らしぬ。

第十一回

桂清兵衛宗信、攻めて我君菊若公に拜謁せんと、壁高らかに呼ばゝりて、庭に繁げれる森蔭より、現はれ出でたる大の男、菊若貞心両人は、思ひ設けぬ人の姿に、夢かとはかり打驚き、思はず知らず立上りて、竹樣近く走せ出る菊若、負傷を忘れて佇い出る貞心、折しも遽く東の空に、雲を破りて現はるゝ、月の光りに是れ彼れ均しく、眼を凝らして窺ふに、眼光爛々として鼻最と隆き大天狗、身には麻の道服を着け、足には一齒の下駄を穿ち、右手には鉾、左手には羽扇とか云ふを携へたる、菊若見るより壁高らかに、菊若「尊師は正しく我師の君には在さずや、貞心「左云ふ尊師が我兄の、桂清兵衛宗信とは と、右方より尋ぬる言葉を、聞きも了はらず大天狗は、大地にハッと平伏せしが、面に被れる面頭を除、

頭を上げて眩度見上げ、衛「いつもに変はらぬ若君の、御健勝なる御姿を拜し参らせ、恐悦至極に存上げ奉ります、汗も臭しき臣家の身を以て、妄りに師匠と仰がれまつり、禮なきことに長の月日を送れること、素より臣が本意にあらず、深き子細の候事、事長く共一通り申上げむ、貞心和女もお聞やれと、云ふ貞見れば天狗にあらず、年齢四十一二、髭毛薄うなりたれども、顔色潤澤に、然かも眉秀で眼鋭き一個の偉丈夫、菊若見るより思はず知らず膝乗出し、菊若「サテは和郎が音に聞く、我家の仕石桂清兵衛宗信にてありしよな、貞心「思ひもかけぬお前は兄さん、菊若「不思議と云ふも餘りある、今日改めての此對面、貞心「早う子細を語て下され、衛「其「左れはなり、指折り數ふればハヤ十年あまり、和女と共に若君の、御共なして城中を、忍び出でたる甲斐も無う、追手の爲めに追ひ迫られ、止む無く吾れは踏み止まりて、若君さまを安穏に、落さんものと和女に別れ、傍の藪を小盾にして、待つ間程なく走せ來る追手、無殘なことゝは思ひながら、若君樣の御身の上と、近よる奴等誰彼なく、斬て棄つるに闇夜のことゝて、吾れ一人の敵と思はず、加勢が出たぞと口々に喧さながら、忙へ噪ぐ折もよしと、三尺五寸の大太刀を、大上段に振ざし、菊若君に加勢の面々、此處に扣へありと、云ひも了はらずドッとおめいて追手の中に切り入るに、怯氣づきたる腰抜ども、何かは以て堪へ得ん、其らこそ加勢が現はれたと、吾れ先にと逃げ出だすに、シテヤッタリと後より、呼ばゝり呼ばゝり追ひかくる、逃足早き追手の面々、何時しか姿を見失へば、吾れ好々と獨語ち、やがて和女の跡を慕ふて、

彼の岐路を北へ走しるに、岐路多き廣野の中、孰れの道を行きしやら、絶て行衛の知やらねば、氣を揉み心をあせりながら、足の及ん限り走しるに、夜明けぬ中に伏見近う着きたり、左れど和女の影だになければ、再び跡へ取て戻し、尋ね探せど甲斐もなし、女ながらも日頃より、心雄々しき我妹、若君傑を守護なすからは、假令ひ姿は見へねにせよ、ヨモ過失はあらざるべしと、張ひて心を慰めても、落ちつきかぬる胸の中、殊更身には大切なる、御家の重寶預りまつれば、此儘にべん〳〵と日を送るべきにあらず、假令ひ水火の中にもあり、御跡を捜がし出だし、一ッには預りまつれる重寶を返へしまいらせ、二ッには御傍にありて、生育ち玉ふを見まゐらせ、三つには亡君の爲めに、奸惡無道の仇に酬はせ玉はむ折、御馬前に死せむものと思ひを定め心を決し、其れより姿を變へて修驗者となり、或る時は高山大岳に攀ぢ登ぼりて、道なき道に君の御跡を尋ね、或る時は人を集め法を說き、以て君の御行衛を尋ぬる便を得んと計り、日本國中至らぬ隈なし、左れど御行衛絶へて知れねば、流石に吾れも力拔け、途法に暮るゝこと屢々なり、弱る心を我から勵まし、再び攝津より播磨に出で、播磨路より但馬丹後丹波の國々を尋ね廻り、丹波より山越しに、此の山城に越す途中、此の庵より程近き、彼方の森にて計らずも、折れたる竹を劍に擬して、戯れ居玉ふ若君の、御姿を見まいらせ、天晴好き子と我知ず、御傍ねに近より、つく〳〵而を見まゐらするに、威ありて猛からぬ御顏、亡君の御面影に其儘なるに、若しやと思ふ疑念も起り、問ひまいらせんとなしれど、左もなき時は一大事と、態と其場は行き過ぎて、緬かに道に待ちまいらせ、遊びに倦みて歸らせ玉ふ折、見へ隱れに御跡に附き隨ふに、やがて此庵に入らせ玉ひぬ、用こそあれと彼の柴垣の際間より、中の容子を窺ふに、姿こそ變はれ、見擬ふべくもあらぬ妹和女の姿、十年辛苦の甲斐ありて、茲に訪ちず若君の御在家を見定めたる、吾身の喜び何にか譬へむ、直ぐ名のらむと立上がりしが、不圖心づくことありて、急る心を漸く歎へ、庵を跡に京都に立ち出で、さま〳〵のもの買ひ整へ、再び茲に取つて返へし、山奥深く身を忍び、異相の体に裝はひて、緬かに若君を招きまゐらせ、軍學兵法夜毎に御教授申したり、這は是れ惡戯に似て、最恐れ多きことなれど、信仰に依りて、一念御修業に專らなるに至らむことを、望める吾等が微衷に出でたりと、始終を語る清兵衛が、世にも稀なる忠義の言葉、菊若も貞心も、聞く事ごとに感嘆の聲を絶さざりけり。

第十二回

清兵衛は再び言葉をつぎて、「未熟な身をも顧みず、天狗と化けて若君に、御指南申すこと茲に半年、半若のむかしも斯くや、世にも稀れなる御才智、軍學兵法は云ふも更なり、弓箭の道さへ驚く間に御上達、流石に名家の御血統だけありて、清兵衛なんどが及ぶ所にあらずと、緬かに舌をまきて感嘆せしも幾度か、斯くては最早我名を名のりて、日頃師範と仰がれまつり、禮なき事に日を送れる罪を謝し、改めて妹和女にも逢はんものと、思ふ折しも麓の村にて、天狗の噂喧すしく、果ては公けの詮索もあらんばかりの取沙汰あるよし、吾身は兎もあれ、若君の御身に拘はることあらば、其れぞ此上なき

一大事、暫し身を避け醉さの根を斷ち、折を見て再び見參せんと、三月の後を約して若君に別れまつり、其れより久しぶりにて故郷に忍び歸へり、彼處此處に身を隱して、城中の容子を窺ふに、隱岐樣今に御志を改め玉はず、若君は更なり、我等兄妹の行衛を探り玉ふこと、露ばかりの扱りなく、其上ならず若君を守護して、吾僻兄妹が出奔せしも、畢竟故殿の奥方、乃ち今は剃髪ましまして、貞松院尼公と呼ばせ玉ふ、元の松の前樣の御差圖に出でたるものとし、御痛はしや貞松院樣には、人里遠き山奥の、別御殿に押込められ玉ひ、憂き年月を送らせ玉ふとの御事、其れのみならず隱岐樣は、豫て若君に婚はさんと、云ひふらし玉ひし其愛孃の千代姫に、當時大下の執權、飛ぶ鳥落す山名殿の末子を、婿がねとして貰ひ受けんと、おさ〳〵密謀ありとやら、聞くことゞに腹立たしきことならぬはなく、無念に日數の過ぐるも忘れ、三月餘りも過ぐれども、計らず聞きたる一大事、若君樣の御隱家知れて、戸田大九郎の刑部、山の井策馬の兩人大將として、五十人餘りの組子を引率れ、山城さして打立ちたりとの事、其日はと問へば、今より二日前と云ふに、氣も心も半狂亂、其儘大和を出立ちて、夜晝分ず道を急ぎ、只今參着したる次第と、詳に語る始終の話、菊若幾度か嘆息し「不肖なる身を捨てずして、盡くす誠實の忠魂義膽、菊若死すとも汝が高恩、忘れは置かぬ忝けなし」清兵衛「這は勿体なき其仰せ、恐入り奉りまする」と、云ひながら身を起して、竹樣近かく身を寄せ、貞心が傷所を改め、清兵衛「ヤ、思ふにましたる此深傷、貞心「臭佞未練な大九郎奴が、過ぎしむかしの遺恨を種に、油斷を見すまし、奴制、清兵衛「ヤ、何

とお云やる、貞心「散り行く命は惜しからねど、心かゝりは若君の御行末、此上ともに力と頼むはお前さま、何卒妻になりかはりて……殊に今始めて聞た松の前樣の御身の上と、云ひかけて苦げなる息をつき、傍に控す菊若に向ひ、貞心「爰にも申せし如く、和君さまの真實の御母樣と申すは、唯今兄の話にて、お聞き遊ばすやうな不幸の淵に沈ませ玉ふ貞松院樣の御事、申すまでもなけれど、如何なる苦難に逢はせ玉ふとも、挫けず、折ず、心を剛みて仇に酬ひ、家を起し、御母樣に御孝養肝要でござりまするとと、云ひも了はらず、ハット叫びて合掌せしが、憐れや其まゝ息絶ねたり。

斯くならむとは知りながら、又た今更のやうに思はれて、貞心が死骸に取りすがり、泣き伏し玉ふ菊若の、衛心根を察しまつりては、鬼と呼ばれし清兵衛も、流石に悲しさ堪へやらず、暫しは茫然として言葉なし。

折しも聞ゆる陣鉦大鼓、清兵衛屹度立上り、小手さしかざし見廻はせば、ヱイ〳〵醉して遠捲きに、此草庵を取圍みたる組子の面々、三柏の定紋打たる高張打灯、幾張となくさしかざせるさま、違ひもならぬ隱岐殿の一手。

清兵衛見るより言葉せはしく、菊若を餞め厠まし、豫て其身が預れる系圖の一卷と、天國の一刀、手早く菊若に渡し、折しも吹き來る愛宕颪しの山風、是れ幸ひと家の内外に火をかけて、南無阿彌陀佛と稱名し、貞心が遺骸、其儘火中に投じ、火焔渦まく裏手の方より、菊若もろとも躍り出で、意外の事に

驚き蹶く組子の奴雛蹴散して、案内知つたる山路を、何處ともなく立ち去りたり。

第十三回

花は吉野と云ひけむ、其吉野にも程遠からぬ松平隠岐守が城下の町端れに、高岡山と云ふ山あり、山とは名のみの岡にして、百年餘り昔、時の國守某公好奇の心より、吉野の櫻を植へ移して、春の眺めを飾り、やがて小吉野と呼び變へしかば、是れより小吉野の名のみ高うなりて、高岡山の名は消え、今は小吉野小吉野と呼び傳へて、高岡山と云ふ名あるを知らぬが多し、現に春の盛りとなりては、花の爲めに此岡時ならぬ雪に埋まり、小吉野の名も空しからず、左れば三月一月は、此岡士民群集の勝區となりて、此上も無う賑はひける。

頃しも彌生の中旬過ぐる程のことなりけり、棚引く春の花霞、うらゝかなる日の光り、心地よく吹く風に誘はれ、群れ來る人の多きが中に、一層目立つ一群の花見客あり、男女打交せ十個餘り、岡の中程なる櫻の大木の下に、幔幕曳き廻らして酒吸みかはす、試みに幕の外より垣間見れば、席の上座に坐れる五十計りの人品よき男、是れぞ此船の主人なるべし、其傍には四十餘りの美はしき大年増あり、風采態度上品なる、主人の妻にやあらむ、其次なるは娘なるべし、年齢十七八、天然の麗質一点雕ずべき所なきが上に、今日を晴れと着飾りたれば、其美しさ譬へむかたなく、咲き匂ふ花も色を失ふばかり、其外には、色白く眼涼しき美男の壮年、是れは主人の親族にあらで、重き手代か何かなるべし、遊

か下座にありて、小厮侍女等に萬づ差圖して居れり、今日のみ許す無礼講、上戸は飲め、下戸は吹へ、舞ひたきものは舞ふも好し、踊りたきものは踊るもよし、唱ひたきものは唱うもよしと、主人が許す言の葉に、始めの程こそ慎み居たれ、醉の發るに伴ふて、踊るもわれば舞ふもあり、下婢が得意の茶摘歌、荷持の爺が尻振り踊りのかくし藝、就れも感心々々と、腹を抱へて笑ひけり、主從ともに面白さに、長き春の日の傾むくも忘れて、打興ずる打しもあれ、引廻らしたる幔幕を、高く揭げてドヤ〳〵と、入り込み來る五人の武士、

先に立たる二十二三の若侍、何處で飲みしか大醉に、醉ひたる眼ジット据ゑ、主人の面を打見やりしが、又たグラ〳〵と打笑ひ、「誰れかと思へば和郎は莊兵衛、サテ好い所で出逢ふた哩、杯奥れよ一盞酌まんと、云ひも終はらずドッカト坐れば、後につゞける四人の武士、同じく坐につき四邊見廻はし、「サテは是れが音に聞く、備前屋の莊兵衛どのか、「流石城下切ての豪商、ドエライ趣向の花見の酒盛、吾儕感心致いてござるは」、憚りながら茲にござる、御家老戸田殿の御子息牛之助どの、四天王の一人と頼まるゝ松永兵助、初對面の挨拶に、一杯貰ふて牛之助殿の呼さには、備前屋には、小野の小町も衣通姫も、及ばぬ程の美人娘がござるとのことであつたが、此中にもお居やるかと、何やらむ互みがはりに分らぬこと幷べ立てゝ、沈める眼キロロ付す、幾に坐れる若侍士、四人の者を見返へりて、「サテ無粋な方々や、此牛之助が日本一と、呪んだ美人

の蹄子をの、此宴席に居るか居らぬか、和郎達には未だ分らぬか、サテも笑止や氣の毒や、莊兵衛をの〻、次の次にお居やるのが、小町娘の、衣通娘の、露子をのでござるは、身不肖なれども斯く云ふ牛之助が爲めに、四天王とも呼ばる〻方々、左樣な不粋なことでは埒あき申さぬ、能う眼おつ開ひて、吾儕が指の向ひた方をお見やれ、何と美ひ者ではござらぬか、「現に現に是れは一生の誤ち、此やうな美人がお居やるとは、一醉ふた目の馬鹿者が疎忽、イヤハヤ何とも恐れ入つたる次第」「眞個に生きた辨財天、「牛殿の御鑑定、エライものでござるは」「是りや露子をのとやら、三國一の婿さま、牛之助殿が目前にお居やるからと云ふて、其のやうに面色を紅うしたり、青うしたりするものではござらぬ、戀婿をの〻、四天王、万皿緣がないでもない」「茲へ出張て酌なとさつせェ、思ひも設けぬ此狼藉に、主人を始め一座の男女、顏見合せて茫然たり。

第十四回

悪い奴等に飛込れたと思ひながらも、物慣れし莊兵衛チットも驚かず、禿げし頭を撫で廻はして、にこやかに打笑み、莊「誰樣かと思へば、御家老戸田大膳さまの御子息牛之助さまを始め、孰れもさま、何處へ御遊山の御歸りか、喰ひ荒らしたる此の酒席、此儘にては恐れ多し、何處へなりと席を變へて、一杯獻じたうでございます、牛「イヤ其〻心配には及ばぬ、吾儕此儘が望みでござるは、方々にも左樣でござらふがな、四人「如何さま左樣でござる、席變へるなど〻は、面倒至極、入らぬ心配と申すもの、莊「左

樣でございますれば、恐れ多い義ではございますれど、お言葉にあまへて、此儘に差上げまするでムりませう、其れ女ども、其樣にとぼけ居らずと、早う杯を參せよ、お酌をせよ、お肴を差上げよ、牛「ア〻イヤ莊兵衛をの、吾儕不粋な者どもなれど、彼のやうな女どもの酌にて、酒飲もふとは思ひ申さぬ、莊「是れは、眞個に吾身の疎忽、清潔白、武藝の外に御心なき魯郎がたに向ひて、汚らはしき女を御傍に寄せんとせしこと、莊兵衛一生の不覺、貴郎がたの御酌には、男に限る、イヤ何菊次、お酌をせよと、彼の年少なる番頭さし招けば、牛之助目を怒らし、牛「莊兵衛、吾儕算盤より外に持つこと知らぬ其方に、武士道尋ねに來はせぬ唖、番頭か小厮か知らねど、生いやらしき男の酌で、酒が飲めると思ふかやい、フノ茲な無體者奴が、莊「是れは〻、又しても疎忽なこと、今更お詫のしやうもございませぬ、シテ誰をお酌に差出しまするか、牛「否々最早汝が如き老骨と、同じ席に酒酌んも面白からず、此場は一先づ退散するは、ジャが莊兵衛、汝が娘の露子は、暫しの間酌人として、吾に於て借用するぞ、莊「這は何と仰せられまする、牛「何とするとは果て知れた事、汝が代りに召しつれるのだは、其れ各々皆圖々々する中時刻が移る、疾く彼の露子を召しつれ玉へと、頤もて示めす言葉の下より、かしこまつたと四人の武士、ハヤ立ちかゝりて容赦もなく、打擲きて泣き叫ぶ、露子の兩腕シッカと握る。

莊兵衛ハット打驚き、「是りやア我娘を何となされまする、年齡も行かぬものを捕へて、酌せよなど〻

其りや御無躰と申すもの、牛「無躰とは何の痴言、戸田大膳が長男、同苗牛之助が、酌人として借用す、ると云ふに、不承知と云ふのか、今一言云ふて見よ、其儘には差置ぬぞ、壮「中々以て不承知なぞ、申す譯ではござりませぬぞ、何を申すもまだ年齢も行かぬ小娘、酌人として差出しましても、萬一過失でもござりましては、折角の御遊興を妨ぐると申すもの、ジヤに依て、牛「斷はると申すのか、其りやならぬ、其りや叶はぬ、假令ひ何のやうな譯ありとも、武士たるものが、一端齒の外に出したること、其儘に引れると思ふか、アノ茲な痴漢奴が、壮「シヤと申して其れは餘り御無躰と申すもの、牛「エ、聞かぬ、聞かぬ、聞かぬ哩、各々方、其れ其女、彼の茶屋に誘れ行き下され、四人「かしこまつた、お立ちなされ、お露どの 吾々とて鬼ではござらぬ、其様に泣き騒がずとも、温順うお立ちなされ。身を震はして泣き悶び、立じとあせる娘のお露、遠慮容赦も荒くれ男が、四人がゝりに引立てんとするに、壮兵衛夫婦も腹に据ゑかね、立上るより早く、力に任せて四人の男を突のけ、娘を後にかばいながら、腰にせし一刀の柄に手をかけ、屹度五人を睨みて、壮「是りや無躰なり牛之助どの、酒興の上の戯れかは知らねど、餘りと云へば非道な所爲 町人なれども先殿大和守さまより以降、帶刀御免の蒙り、十分の扱ひを受くる備前屋壮兵衛、此上無體を働き玉はゝ、假し御家老の御子息にもせよ、其儘には、牛「云はして置けば云はふやうなき雑言過言、假令ひ帶刀御免にせよ、素町人の身を以て、分を知らぬ命の一言、聞捨てならぬ覺悟をせよと、云ひも了はらず四人い者に目くばせして、ハヤ一刀に手をかけたり、荒げたちたる此場のさまに、女小厮は泣き叫びて、物の用に立つものなく、慕の外には見物等ドヤ〳〵騒ぎ押合へども、誰一人として止めに入る者なし。

第十五回

彼方には戸田牛之助、其四天王と呼ばる四個の荒武者左右に隨へ、ハヤ鯉口切て詰寄つたり、此方には備前屋壮兵衛、及ばぬことゝ知りながら、逃れぬ所と覚悟して、腰なる一刀の柄に手をかけ、娘と妻を後にかばひて、イザと云はゝ死者狂ひと、同じく身搆へして睨み寄る、慕の中に婦女が、途方に暮れて泣き叫ぶ聲、幕の外には花見の人々が、手に汗握りてそよめくさま、日うらゝかに風あたゝかき小吉野の春景色も、茲一刹那落花狼藉。

折しも詰寄る雙方の間に、スツクと立たる一個の少年、年齢は僅かに十七八、髪つやゝかに色白く、女にして見まほしき、優美な姿に引換へて、殺氣立ちたる此場のさま、物とも思はぬ落つき具、先づ牛之助が方を打見やりて、「此暗嘩小生にお預け下され」、牛之助は頭より足下まで見下して、冷かに打笑らひ、牛「和郎何者ぞ、斯く云ふ吾れを誰れと思ふての仲裁、身不肖なれども小生は、備前屋壮兵衛が家老、戸田大膳どの〻御子息、仝苗牛之助どのと知ての仲裁具」、少年「誰れとも思はぬ松平家の御家の番頭菊次、御不足かは知らねが、此暗嘩斯く云ふ小生にお預けなされた方が、貴郎さまの御爲めかと存じまする」、牛「ソニ壮兵衛が番頭とや、番頭にせよ丁雅にせよ、和郎等が出しやばる處でない、痛

い思ひをせぬ中に、疾く疾く此場を下り居らふ、アノ茲な狂人奴が」、少年「是りや聞わけの悪い御方、不肖な身を顧みず、此の喧嘩お預け下されと申すこと、強ち主人の爲めを思ふばかりでござらぬ、貴郎さまの御爲めを思ふからのことではござらぬか」、牛「云はして置けば云はふやうなき雑言過言、何を抛者の爲めと申すか」、少年「まだお分りになりませぬか、サテモ〳〵悟りの悪い御方、去らば仔細の御話し申さむ、能く御聞きなされ、和君等が先君松平大和守様には、何とか法則し玉ひしや、假令ひ身分卑しき百姓町人たりとも、妄りに暴威を加ふるに於ては、乾度成敗申付くるものなりと、藩士の方々に告示し玉ひし御内訓を、和君は忘れ玉ひしか、ヨモや忘れはなさるまい、先君御他界ましまして、世は隠岐様の御代となり、御政治向は大概ならず變はりたれども、此の御内訓のみは今も其儘、苟めにも一藩の上坐を占むる御家老職の御子にてありながら、斯る法則のあるをも忘れて、妄りの御所行あらんには、假令ひ隠岐様に先君の御仁心受繼ぎ玉はずとも、一藩への示めし、ヨモ其儘には捨て置き玉はじ、況しや主人莊兵衛事は、尋常普通の町人と事違ひ、久君以來帶刀御免、士分の御取扱ひを蒙むる身の上、何の罪咎もないに御無躰のことなされんには、何とて其儘に捨て置き玉はむ、御爲めと申すは茲のこと、何と御合點が參りましたか」と、突込む如く滔々と、陳ぶる言葉のよどみなきに、呆きまくられて牛之助を始め四人の武士、互ひに目と目を見合はして、暫しは茫然として居たりしが、漸くにして牛之助、キット四人に目くばせして、万の鮮口くつろげながら、牛「ヤア吾長言其一言、骨

なき弟子雅斬り捨んも刀の汚れと打捨て置きしを、ありがたいとは思ひもせで、吾れのみならず御主君まで、誹議致すこと奇怪至極、思ふに汝は敵國の間者ならずば、御家に仇なす曲者の同類ならむ、最早許し難き難し、其れになをりて悟の致せ」、「這は牛ぜのゝの云はるゝ通り、必定此奴は間者曰く四天王の一人、弓矢取つては向ふに前なき松永弾助成敗せん、覺悟の致して其になをり念佛申して首打れよ」、「茲にも同じ四天王の一人本田才兵衛」、玄「同じく生駒玄蕃之允」、紹「同じく沖野繁松」、兵「斯く打擲ふ上からは」、才「假令ひ汝に鬼神の勇ありとも」、玄「一寸たりとも動さうや」、紹「及ばぬ所と觀念して」、兵「其れになをれと申すのに」、少年「買ひたくもない喧嘩ながら、左程に賣りたう思召さば、買ふて進せぬこともない、鬼の耳に念佛、分らぬ人に物云ふて、アッタラ口に風ひかしたり、ドリヤ其ならお對手の致しませう、縱からなり横からなり、五人一所にかゝつてでされと、雪を欺ぐ両手を振げ、五人の前に立塞る。

第十六回

に寸鐵を帶びざれど、ビクとも動かぬ少年の、勇氣に呑まれて五人の武士、左右なくば進み得ず、此さで茫然として眺め居たる莊兵衛は、漸くにして心づき、ツカ〳〵と前に進み、彼の少年を引退けハッタと睨み、「是りや菊次、其方氣でも違ふたか、其方なぞが出る場所でない、大事を懷く身を……、イヤナニ大事の場所に若輩な、其方等の力を借らふや、無用なことに無用な腕立て致さう

より、妻と娘を伴ふて、一先づ我家に歸て呉やれと、何やら目良で知らすれども、菊次と呼ばるゝ彼の少年は、頭を打振り、菊「御尤なる仰せではございますれど、御年寄られた貴翁さま、如何マア此場が任されませうや、及ばずながら番頭菊次、跡は確然引受けますれば、御案じなされず貴翁さまこそ、塊櫻娘櫻始めとして、一同御伴れ遊ばして、一ト先づ御歸宅遊ばしませ、」「是りや聞分けの悪い其一言素はと云へば我娘よりのこと、汝等の知つたことではない、兎や角云はずと今云ふ通り、妻と娘を伴ふて、疾く〳〵此場を立退き呉れヨ、」菊「シャと申して此儘に、」「ハテくどいと申すに。

両個互みに爭ふ折しも、隙を得たりと五人の武士、卑怯にも刀をスラリと引抜けば、菊次はたまらず悲兵衛を、進か後に推しやりて、斬り込み來る牛之助が、刀の下をかいくゞり、利腕摑むと思ふ間もなく、エイヤット聲かけて、肩にひッしよい投げつけたり、小賢な腕立て無體な奴と、四人の武士菊次中に圍繞み、前後左右より斬付くるを、菊次は事ともせず、飛鳥の如く身をかはして、隙を窺ひ兵助と名のれる奴を蹴倒して、驚く沖野船松が、刀持つ手を取るより早く、目よりも高くさしあげしが、アレヨと云ふ間もあらばこそ、力に任する人つぶて、玄蕃才兵衛両人目がけて投げつけしに、何かは以てたまる可き、両人は其處に打倒され、つぶてに取られし船松は、三間餘り彼方なる、櫻の根本に打ちつけられ、息絶々にうめきて居り、鬼神も及ばぬ菊次が精技、荘兵衛お妻露子は更なり、傍に立ちし見物の人々、アッとばかりに感嘆して、暫しは鳴りを止めざりけり。

其時菊次は徐かに進みて、逃げも得やらずうづめき居たる、牛之助を引起して、「何處も御負傷はございませぬか、思はぬ麁相を致しました」と、云へば牛之助面に朱を染め、「醉て居るから汝等如き素丁稚にも、思はぬ敗れを取たのだは、今に此仇報ひんはどに、先づ其れまでは汝が命、汝が身體に預けて置くと、云ひも了はらず、投げられし時、取落したる一刀を、取るより早く鞘にも入れず、肩に振ふて逃げ出せば、兵助玄蕃才兵衛も、同じく共に起上り、吾れ遲れじと逃げ出す、「是りや情ない朋友甲斐のない奴どもの、吾も一所に伴て行け」と、沿聲高くわめきながら、刀を杖に撞く起き、足腰撫でゝ顔顰め、痛い〳〵と云ひ續けて、働うが如く逃げ行く船松、是れこそ今日の見ものぞや、能く見て置いて一生の、笑話の種にせよと、ドット笑へる見物の聲々、逃げ行く奴等の耳の穴には、大砲の音とも聞へつべし。

取るに足らぬ奴輩なれど、若し又た無頼の徒黨を語らい、取て歸へさば面倒なりと、菊次は荘兵衛に思ふ所を告げて、アッケに取られ茫然たる、婢女小厮を勵まして、取散らされたる品々を、手早く片付け負擔はし、荘兵衛夫婦娘のお露を始め、一同打伴れ、夕日まばゆき小吉野より、我家を指して歸へりしが、兎も角も潜中隨一の權臣たる、戸田が倅の牛之助、小吉野にての恥辱を、雪ん爲めには、如何なる手段を施すやも知れず、素より自已の不覺なれば、菊次が爲めに敗れを取りしことを云ひ立て、公然ちて詮議を乞ふやうなことはあるまじけれど、外に此方の過失を見出だし、其を種にして如何なる狂言

仕組んも知れず、或るは仲間の悪漢等を語らい、不意を覘ひ推寄せ來んも計られずと、莊兵衛一方ならず心を惱まし、其後は堅く菊次に外出を止め、其上菊次が親分なる、歴の清五郎と呼ばるゝ俠客を頼みて、用心おさ〳〵忘りなかりしが、一日二日と過ぎ行きて、一月餘りも立ちたれども、莊兵衛が住家近く影を見せしことは更なり、何の音沙汰だも聞へねば、サテは菊次が伎倆に恐れて耻辱に酬はむ心も失せしと覺へたり、今は斯くまで心を用ふるにも及ぶまじと、屋入れたる清五郎が、乾子の者どもにも暇を取らせけり。

第十七回

莊兵衛が家の番頭菊次と云ふは、今年僅かに十八歳の少年にて、姿容女にしても見まはしき姿優なれども、贈太く智慧賢く、讀書算術何一ッとして拙きはなく、商賣の道にも暗からねば、年少きのみかは、亦た此家に雇れてより、三年にもならぬに、主人莊兵衛早くも見込みて、多くの丁稚の中より拔き出し、やがて番頭の中に加へしなり、去るはさに始めのほどは、數多き番頭どもの中に、菊次が年少き侮り、兎や角苦情を鳴らす者ありしかども、其拔りなき働きに喙容れん隙間なく、殊に彼の小吉野にて目覺ましき腕前見せしより、就れも舌を捲きて怯ぢ恐れ、蔭口一ッ叩く者なきに至りぬ。

小吉野にて牛之助等五人の武士を懲せし當座は、莊兵衛堅く止めたれば、菊次外出を慎み、家にのみ閉籠り居たれども、一月たつても二月たつても、牛之助を始め四人の武士、其姿だも見せぬに、サテは

能々の厭拔ぎも、復讐に來る意氣地もないと見にたりと、菊次先づ心を許せば、莊兵衛も氣をゆるして、是れよりは今までのやうに用心せず、斯くて或日、菊次は去りがたきことありて、孫て我親分と頼む、俠客の頭領歴の清五郎が方に赴きしに、折しも清五郎留守なりければ、子分の者に我詩ね來しことを傳へ呉れよと云ひ置きて、其處立出でしは、夕照の空紅う彩色る、黄昏近き頃なりけり。

清五郎が家と云ふは、城下外れの一筋町にて、城下内とは名のみの寥しき町なり、茲より莊兵衛が店までは、彼是れ一里近かき道程あるべし、其間には千本松原とて、幷木の松生茂れるものさびしき道あり、千丈藪とて、苦竹生茂れるものすごき所あり、左れば夕暮近うなりては、誰一人として通行る者なし。

左れぞ大膽不敵の菊次、殊に今まで幾度となく往來ひせし道のことゝて、物とも思はず、提灯さへ携へずして、清五郎が家を立出でしが、千本松原にさしかゝりし頃は、日全く暮れ果てゝ、往來人の跡絶えたり、殊更此夜は月影雲に隱れて暗淡く、松に通ふ風の聲、トウ〳〵としてすさまじく、流石不敵の菊次も、怯からねばにや、孫て嗜める踏曲の曾我を謠いつゝ、彼の松原の中程まで來りし頃半丁餘り向ふなる、並木の松の小蔭より、ヒラリ〳〵と躍り出でし七八人の人影あり、夜目にハキとは分らねども、就れも同じ覆面頭巾に面を隱し、同じやうなる黒裝束に身をかためたり、サテも怪しき人影、油斷ならずと菊次心中に思ひながら、後方を振顧れば、怪しや後方にも同じ裝束の人影彼是れ八九人、

闇にも閃く一刀の、鞘をはらひて此方をさして進み來るさまに、菊次はハット驚きながらも、外に恨みを受けたる覺へなければ、必定牛之助が一類ならん、彼奴が一類ならんには 伎倆は凡そ知れたり、假令ひ十人二十人、同時に及を向くるとも何程のことをかなし得んと、心中に思ひ、直ちに傍の松を小盾に取り、豫て護身の爲めに懷に收めし、守刀の目釘を緩し、鯉口切て油斷せず、八方に目をくばりて、其せんやうを窺ひ居りぬ。

菊次身構へして窺ふ間もなく、前より來し七八人も、後より來し八九人も、やがて馳せ寄り一圍となりて、菊次を中に取圍みしが、秋の野もせの篠薄、孰れも一刀振閃かし、物をも云はず、切てかゝるに、此方も兎角問答の暇なければ、僅かに「何奴なるぞ推參なり」と、辟鋭く叱りつけたるのみ、守刀の鞘を排らふて、電光の如く身を躍らし、多勢の中に切て入るに、素より尋常ならぬ無双の伎倆、多勢なれども曲者をも、鋭き及風に切りまくられ、足なみ危く見へたる折から、「見苦しや方々唯一人の素丁稚を、料理するに其さまは何事ぞ」と罵りながら現はれ出でしは、雲突くばかりの大の男。

菊次は見るより此奴こそ、正しく此黨徒の頭領ならん、此奴だに刺殺んには 後は知れたる蠅虫ども、手を下さずとも逃げ失せなんと、思ひにければ一層勇氣を振い、彼の大男を見かけて切てかゝれば、小さかしや二才奴と、云ひも了はらず拔き合せて、發矢とばかり受留たり。

夜は更けたりと云ふにあらねど、人里離れし竹林、ザワ〳〵とし物凄き、風の外には耳に入るものなき、千丈藪の中程に、蚊遣の爲めか烟立つ、焚火を中に打集へる、十五六人ばかりの荒くれ男、手ひゞく鞆めたる一個の少年を前に引据ゑ、何やらん互みに密語き語ふさまなりしが、やがて首だちたる一個の男は、彼の少年を屹度睨みて、「是りやヤイ菊次頭を上げよ、斯く云ふ吾れを誰れとか思ふ、去る三月小吉野にて、汝が爲めに恥辱を受けたる、戸田牛之助なるぞ、彼の折は酒に呑まれし身の悲しさ、汝が如き素丁稚に、思はぬ敗れを取たれど、素面の牛が計略にかけては、汝がやうな馬鹿者は申すも更なり、假令ひ孔明楠が、再び此世に生れ來るとも、搦取らんに何のてまひま、況して我智が助くるには、當藩中に於て、武藝にかけては拝らぶ者なき 山井簾馬どのを始めとして、其門弟の人々あり、拝びに發に誤つて、汝が爲めに敗れを取りたる、四天王の面々も、力を合せしことゝ知らずや、發に汝と及を合せて、やす〳〵汝を陥井に導きしは、山の井どのが坐興にひとしき一時の戯れ、一寸だめし五分だめしに、料理するのが樂しさに、唯一刀に斬らば斬らるゝ素首を、態と是れまで延ばされたのだは、兵「見忘れたか菊次とやら、斯く云ふ拙者は沖野船松、玄「同じく斯く云ふ吾れは過ぎし日に、汝が爲めに思はぬ不覺を取たる、松永兵助、船「同じく斯く云ふ拙者は木田才兵衛、兵「牛之助殿の智略に依り、山の井殿の武勇に依り、船「一寸だめし五分だめし、玄「恨み晴す今日の嬉しさ、オー天も亦計略と云ふは、兵「吾先づ人々に代りて云はんに、冥府の土産、耳の

穴カッポジッて能く承はれ、何時ぞや小吉野にて受けた恥辱、即座に雪んこと、牛之助殿を始め、吾々とても能く存じては居つたなれど、只恥辱を雪ぐばかりでは興が淡い、殊に御家のことを非議する曲者、彼の塲で成敗致さんには、詮議の手づるを失ふ道理、其處で牛殿の名案に從ひ、暫し汝に氣を安めさせんと　吾々孰れも引籠りて、油斷を見せしに案に違はず、此頃汝も莊兵衛も　頻りに外出をすると、のこと、折こそ來れと喜ぶ中に、今日汝が外出のこと、豫て聞みし人よりの知らせ、是れ屈竟と牛どの と計り、山の井殿を語らひて　汝が歸路に待伏せ致し、山の井殿の武藝の力で　首尾好く汝を陷井におびき寄せ、斯くはマンマと搦め取り、立「御家を非議する汝が素性、詮議いたした其上でなぶり料理で腹癒する、運びが漸く付いたのだは、船「恨みは獨り其方ばかりでない、莊兵衛一家も此頃の中、幾ろしにする手筈なるは、才「序に云つて聞かせて置く、莊兵衛が家に出入の醫師、竹庵と申すは、此方をもの味方と知らぬか、船「一から十まで汝等がことは、彼より通知があるのじやワイ、牛「今四人の者が申す通りの次第、何と贈がつぶれたか。

此時菊次は頭をあげ、縛めの繩も切れんばかりに、總身に力を入れ、怒りに血走る眼を見張り、屹度牛之助を睨みつけ、菊「武士とは名のみ大藪生、言葉交はすも汚はしき、畳怯未練な腰拔ども、此期に及び問答無益、贈ある丈夫の骨肉にも、汝等如き鈍武士の、鈍刀の刃が立つと思ふか、アノ玆な大武士奴が」と、云ひも了はらず牛之助が、面を臨み唾吐きかくれば、赫と怒られつ牛之助「奴號其息の音も

めて呉れん」と、腰なる一刀拔くより早く、大上段にふりかぶりぬ。

十九回

怒りに急き立つ戸田牛之助、腰なる一刀拔くより早く、大上段に振かざし、唯一打と菊次を目がけ、斬下さんとなす折しも「ヤオレ待たれよ牛之助殿と、鋭く止る人の言葉に、牛之助は見返へりて、牛「誰れかと思へば山の井氏、何故あつてお止めなさる、山の井「急れな戸田氏、貴殿の爲めに捕へた素丁稚、殺ろすとも生すとも、貴殿の御勝手とは云ふものゝ、其れでは餘り興が淡い、初めに仕組みし狂言通り、一寸だめし五分だめしの料理が、拙者は所望でござる、牛「シャと申して武士の面体に、唾吐きかけし、無禮の曲者、如何マア堪忍ができませうや、山の井「シャに依て一寸だめし五分だめしが、一層拙者の所望でござる、牛「ナ、成程、如何さま是れは拙者が短慮、去らば是れより、仰せに隨ひ、お目の前にてなぶり切り、料理の手なみ御覽に入れん」と、云ひも了はらず牛之助、振りかざしたる刄を右に持直をして、牛「先づ耳よりチョン切て」と、前に進むを山の井は、打見やりつゝ打笑みて、山「急れな牛どの、夜は長い、牛「又してもお止めなさるか、山「イヤお止めは申さぬが、最より此奴が面体を見るに、如何やら心に覺へある容貌、牛「ナニアノおちかづきと仰せらるゝか、山「知已ではござらぬが、見覺へある面躰……と、云ひかけて小首傾げしが、ヤ、ありて小膝を叩き、山「オ、それヨ、思出してござるは、牛「ナニ思ひ出しなされたとな、シテ〳〵此奴は何者でござるか、山「左ればなり、お聞なされ、

貴殿も御承知の如く、今より四五年前、先門大和守どゝの遺子菊若追捕の爲め、吾僚貴殿の叔父御刑部どのと共に、多くの組子を引きつれ、遙々山城の國に罷り下つたことがござる、牛「何如にも、山「其時彼奴が隠棲と聞へし、貞心尼が庵にて、菊若と名のつて、小腕に似合はぬ拔群の武藝に、多くの組子を惱まし、果そは庵に火をかけて、行衛を隱せし小童奴がでざるが、今此の菊次と云ふ奴の面を見るに、彼の菊若に瓜二つ、牛「ナヽ、何と仰やる、山「今此奴が腕前の、人なみはづれて優れし上に、物の云ひさま風彩態度、町人に似合はしからず、何處かに高尚き所あるより思ひ合すれば、菊次とは假名、眞實は菊若なるやも知れず、牛「アノ菊若と仰せらるゝか、山「如何にも、菊若に瓜二つ、若し菊若ならんには、御家に仇なす大事の罪四、是りや迂濶に料理はできぬすまい、牛「仰意の如く、若し菊若ならんとは、其れぞ妄りに手は下されませぬ、山「料理の手よりも吟味の手、牛「その是りや暫時拙者にお任せ下されと、云ひも了はらず立上りて、菊次が前に進み寄る。

此時まで眼を閉ぢて、默然と覺悟を定めし菊次、此時クワットと眼を見開らき、山の井が面をジット打見やりしが、再び眼を閉ぢて覺悟の体、山の井はツカ〳〵と進みて、ハッタと睨み、山「ヤアレ松平菊若、和郎斯く云ふ山の井策馬を見忘れしか、此期に及びて如何やうに陳ずるとも叶はぬこと、菊次と云ふは假名であらふ、眞直ぐに白狀せよ、菊次は、松平にせヨ、菊若にせヨ、菊次にせヨ、汝等が勝手に名を付けヨ、斯く云ふ菊次は汝等に向ひて、兎や角陳ずる口を持たぬは、打つなり斬るなり、汝等が心任せにせヨ、山「汝白狀致さぬに於ては、拷問にかけ、も山の井策馬、屹度白狀の致させ呉れる、痛い思ひをせぬ中に、疾く〳〵白狀致した方が、汝が身に取り利分であらふ、悪いことは云はぬ、サヽ、早く白狀の致せ、菊「ニヽ、汚らはしき其一言、聞く耳持たぬ、早々勝手に成敗致せ、ヽヽヽヽ、利害の分らぬ奴、望みとあらば致方なし、サラば拷問致ひて呉れんと、云ひかけて傍なる、藏の青竹引折りて、リサ〳〵と打拂りながら、後に廻はりて菊次が目前に突きつくれども、眼を閉ぢたるまゝ、菊次泰然として身動きだにもせず。

山の井今は堪へかねて、汝れ頑骨さ小童奴、目にもの見せて呉んずと、呶鳴り散らしてリサ〳〵と、青竹打振り菊次が背を、肉も碎けヨ、骨も折れヨと、云はねばかりに力に任せて打ちすれば、流石剛毅の菊次も、苦痛にや堪へざりけん、ウーンとばかりに悶絶して打ち倒れたり、折しも彼方の竹藪押開きて、韋駄天の如く走せ來れる大の男、消へかゝりたる焚火の光りに、此有様を見るより、獅子奮進の勢ひ鋭く、山井策馬に組付き、肩にひつかけ拽げんとすれど、此方も流石に松平家の藩中に、當時拔にかけても力にかけても、ならぶ者なしと聞へし山の井、身を捻りて防ぎ止め、容易くは投げられず、エイ〳〵聲して揉み合ふたり、此時牛之助は透し見て、牛「其れ邪ア者が舞い込みたり、山の井をのに万一の事あつては大變なり、各共に力を合せられよと、聲かけてがら拔き持てる、一刀の目釘湿しも敢へず進み寄る、十四五人の面々も、山の井に力を添へんと、各々一刀引拔いたり、左れぞ両勇士の角、

閃電光石火、孰れを孰れと分き難きに、手を下さむやうなく、只茫然として眺むるのみ、此さま見るより彼の大男は、エイ面倒と云はぬばかり、金剛力を出して、流石の山の井を目よりも上に差上げしが、ヤッと聲かけ力に任せて、彼の茫然として扣へたる、十四五人の武士目がけて投げつけたり。

折しもサット吹き來る嵐と共に、車軸を流がす夕立、忽ち焚火を打消せば、闇は四邊を顫して咫尺も分ず、折を得たりと彼の大男は、傍に倒れし菊次が傍に探り寄り、其儘小脇に抱きも敢へず、後をも見ずに逃げ出せば、斯くとも知らぬ牛之助等は、對手も居らぬに驚き騷ぎて、其らこそ曲者と口々に、呼ばゝりながら扳持つ刄閃かして、味方と知らぬ同士打に、果てしもあらず戰ふたり。

第二十回

茲に又た莊兵衛は、番頭菊次が親分清五郎方に用ありとて暇を乞ふて出で行けるまゝ、夜に入りても歸へり來ぬに、大概ならず心をいため、女房お妻に向ひて、「莊」「まだ菊次は歸らぬやうじやが、若しや途中で變なことでもあつたのではあるまいかと問へば、お妻も眉を顰め、「妻」「ヨモヤとは思ひますれど、餘り歸へりが遲いので、妾も先刻より案じて居ります、」「莊」「恥辱を知らぬ腰拔け武士、殊に一月二月も過ぎ去た今日が日まで、何の復讐もせず來たものが、」「妻」「今更復讐するやうな者もございますまい、」「莊」「然かし彼の牛之助と云ふ奴も、武藏こと云ふに足らぬ奴なれど、惡智惠にかけては、親大膳にも讓ぬ曲者、此方の用心殷しき間は、態と素知らぬ貌に日を過ごし、用心ゆるみ油斷の折を待て居たのやも知れぬ、」「妻」「もし其やうなことでございますれば、斯夜に入ても歸へり來ぬ菊次が身の上、心もとないことでムります、誰れか店の者を迎ひにおやりなされては何やうなものでございませう、」「莊」「吾も然は思ては居れど、日頃菊次を贔負にするを、快からず思ふてか、菊次が且那樣か、且那樣が且那樣か、何らが何らやら一向分らぬなどゝ、蔭口云ふ者もありとか云へば、今更店の者を迎ひにやるも如何なるもの、殊に最早店も仕舞ふて、孰れも寢たやうな容子なれば、呼び起して迎ひにやるも苦情の原、菊次が爲めにも能くあるまい、」「妻」「シヤと申して尋常普通の奉公人ではなし、時世とは云ひながら、菊次々々と呼び捨てにするさへ、冥加が惡るい程な立派な御身分の御方、若しもの事があつた時は賴まれた清五郎どのに云ひわけが立たぬのみか、生きて人に合はする顏もない始末、兎も角も壯健な店の若者を、お迎ひにおやりなされた方が宜いかと存じまする、」「莊」「然思ふも尤もなれど、志望を遂げ玉ふまでは、露ばかりだも人に悟られぬやう、世を忍び玉ふ大事な御身分、現在和女と吾の外には、血を分けた娘のお露にさへ、知らせぬやうに隱して居る彼の方さまの御素性、其れ程にして今日が日まで隱しおうせたのに、思はぬことより露顯の端緒ともならば、年來の心配びも水の泡、店の者とて心は許せぬ、假し又た其やうな憂ひがないにもせよ、万一牛之助等に深い企みがあつての上ならんには、店の者殘らず迎ひにやるとも、何の用にも立たぬは必定、殊更今日行かれた先は、外ならぬ清五郎どのゝ家なれば、万事に扳りなき清五郎どの、ニヤ彼の方さまの御身の上を御疑難に逢はせまつるや

うな手落ちもあるまい、話が長ふなつて、大概お泊りなされたことであらふ、能う考へて見れば、家で案ずるやうなことは必らず〳〵之れあるまじ、其れは然と娘のお露はモー寢やつたか、妻「如何やらまだ寢ませぬやうな容子でござりまする、非「ナニ未だ寢やらぬとか、妻「彼も大概菊次殿が歸られるので、寢られぬものと見へまする、非「何と云やる、妻「まだ主公には御存じはありませぬか、如何やら彼が此頃の素振、菊次殿を戀慕ふて居るやうな容子、親の目には何時までも子供のやうに見へますれど彼もモー妙齡、中々油斷はなりませぬ、非「何アノ菊次殿に思ひをかけて居るとか、ソリヤ以ての外の不所存、妻「男振なり氣量なり、世に天晴な菊次どの、娘心の一筋に、思ひつむるは無理ならねど、彼方は立派な御身分の御方、此方は卑しき町人の娘、末遂げられぬ緣なれば、非「殊更大事を懷せ玉ふ若君をそゝのかし參らせよしなき、浮名を流がすやうなことになつては、娘は兎もあれ、清五郎どのに對してわれら夫婦が言譯が立たぬ哩、妻「世に釣合ふた緣なれば、似合ふた風采の二個が仲、貰ひ受けて夫婦にせんには、我家の幸福此上なけれど、非「ソレは叶はぬ浮世の義理、妻「叶はぬ望みと露知らねば、マア彼のやうに菊次殿の身を案じて、眠る目眠むらず待て居る、娘が心根察して見れば、不憐なものでござりまする、非「ア、益にも立たぬ繰言に、大概ならず夜も更けた、此方で思ふやうではなく、菊次殿にも安穩に、清五郎どの方にお泊りなされたと見へる哩。

折しも俄かに降り出す夕立、窓打つ音もすさまじく、夫婦が話は中絶へたり。

第二十一回

莊兵衛が娘露子と云ふは、今年十七の盛りの花色白にして膚細く、目元涼しく口元愛くるしく、何とも云はれぬ美人にして、小町娘衣通娘と渾名され、殿さ城下に唯一人の美人と云ひはやさるゝほどなれば、思ひを寄する人尠からず、中にも戸田大膳が倅の牛之助、一方ならず戀い慕ひ、果ては御殿醫竹庵と云ふが、莊兵衛と心易すきを幸ひ、幷を語らひて取持頼みしこともあれど、素より深窓に人となりて、去るなまめけることは耳にだもせしことなきが上に、天質淳さたることを好まねばにや、大概ならず復立ちて、仲に立ちたる竹庵を、苦く罵り耻かしめ、其事あらはに父母にも告げ、竹庵が出入止めてよと頼みし位ゐにて、彼の小吉野にて牛之助等が、非道の所爲に及ばんとせし時なぞは、死を以て拒んと思ひ定めし程なりしに、如何にせしにや此頃より、露子が胸にあやしき思ひ浮び來て、菊次が姿容自前にちらつき、明けても暮れても忘るゝ頃なく、戀てふことを知り初めたり。

云ふはなく、世に稀れなるまで優れし氣量、如何なる屈形の公達と云ふとも、耻かしからず、其が上に眞實深くして浮きたる心路ばかりもなく、智惠才慧は如何ばかりか、足らはぬ身には測り知られぬかり、世に女の身と生れたる甲斐に、斯る殿御と一生を伴隨はんには、マア何やうに嬉しかろふ、父母はじめ手代等まで、菊次々々と呼び捨てに追ひ使へども、よしある人の素性を隱くして世を忍ぶ爲

めに、暫し我家を假の宿りと定め玉ひしとは、愚かなる我心にも疑られて、一層御いたはしう思はるゝなり、如何なる御素性の方ざまにや、及ばぬ戀かは知らねども、見れば見るほど戀しさの、八層に增さる殿御振、唯一言にても打解けたる、御言の葉かけ玉はんには、此身は此儘死ぬるとも、露ばかりの恨みなし。

實に露子は斯までに深く思ひ込みたるなり、斯までに深く思ひ込みたれども、深窓に育ちたる乙女心には、何とせん、詮すべさへも知らず、唯明暮其人のことのみ思ひ入りて、冴々しかりし面色さへ、何時しか打ふさぎ勝ちとなり、胸に隱せる物思ひの、隱くすとすれど、穗に顯はれて、目慧き母に早くも其れと、悟られしこと是非なけれ。

斯くまで深う戀ひ慕へることなれば、今日しも清五郎が許に出で行けるまゝ、夜に入りても歸へり來ぬ菊次が身の上、思ひ過ごして唯一個、己が居室なる一室の中に、眠りもやらず心待ちに、待ち明すも道理なり、店と奥とは間隔たれども、菊次に限りては何時も奥なる父母の居室近かう打臥す筈なれば歸らんには、いつものやうに父母との話聲も聞ふる筈なり、左れど初夜より今が今まで、父母の寢さ語ひ玉ふ聲のみ聞へて、菊次が聲の聞ねぬは、未だ歸らぬと思はれたり、過ぎし日妾が爲めに小吉野にて、彼の半之助づらを懲らしめたる後は、其身を狙ふ仇持つ身の上、若しや途中でヒョメなことでもありはせぬか、去らずば斯までに歸へり玉ふことの過くるゝ筈なし、吾身不甲斐なき女の身にあらす

ば、ツイ一走り行て來べきなれど、思ひやりてはしいかすがに、腸のみ斷さ、心地死ぬべう思ひ迫まる。夜はいよ〳〵更け行くほどに、表も奥も寢しづまりしと思し〳〵寂然として音絶へたり、唯聞ふるものとては、遠より降りしきれる夕立の、晴れも得やらず降りしきりて、窓打つ雨のみ物淋し、折しも露子が室居に程近き、庭の枝折戸ホト〳〵と打敲く音聞ふるに、露子は怪しさことに思ひて、一度は恐ろしさに身を震はせしが、素より姿のやさしきに似やらぬ心膽強き乙女、殊更菊次が上待ち暮せしが、しやと思ふ疑ひも起り、豫て秘藏の懷劍右に、立上らんとする折しも、メリ〳〵と音して枝折戸推破る音聞へしが、間もなく我居室の椽端にドッと音して、モシ〳〵莊兵衛どの、清五郎でざる、茲明けて下され、火急の用じゃ、火急の用じゃと、息忙しく忍聲に、音のふ男の聲聞へたり。

第廿二回

夜はハヤ更けたり、雨は益々降りしきりぬ、折しも、莊兵衛が住家の奥まりたる倉坐敷に、ひそ〳〵語らふ男女五人は、是れなん清五郎、菊次、莊兵衛夫婦と露子となり、扨も如何にして清五郎菊次が茲にあるかと云ふに、清五郎は去りがたき用ありて、此日已が住居より、程遠からぬ隣村の何某許に音づれて、用事を濟し我家に歸へりしは、初夜過ぐる頃なりしが、歸へりて聞けば夕方菊次が尋ね來て、斯く〳〵云ひ置いて唯一個、提灯も持たず立去たとの事に、清五郎は大概ならず胸騒かし、歸路には彼の松蛇木と云ひ、彼の竹藪と云ひ、物騒な所あり、況して小吉野にて、戸田の倅半之助と、其四天王とか呼

ばるゝ奴等を打懲らしたる後は、苟めにも仇敵を持つ身の上なり、今までこそ何事もなかりしとは云へ、腰拔けにせよ何にせよ、兎も角も對手は武士、ヨモアノ儘に泣寢りに、眠て仕舞ふやうなことはあるまい、いつ何時斬てかゝるやも知れぬに、彼のさびしき夜道を、唯一個にて立去るとは何事ぞ、若しもの事があつた時には何とする氣か、是りや斯やつて捨てゝは置かれぬと、赤銅造くりの一刀腰にプッ込み、後氣をつけヨと子分の奴等に云ひも敢へず、尻端折つて我家を後に、菊次が跡を尋駄天の如く走り追ふに、彼の並木の松原まで來し頃は、雲深く立ち掩ひて今にも雨降り出でん空模樣、闇に透して其處彼處見廻せども別に怪しき容子もなし、サテは茲までは無事なりしか、茲を過ぐれば千丈藪、彼處さへ無事ならんには、後は軒並續ける町筋なり、案ずることは決してあるまい、兎も角も千丈藪の端れまで跡を追はんと清五郎再び一散に走しる程に、何時しか並木の松原も通り過ぎて茲千丈藪の中はどまで來りしに、怪しや人家もあらぬ竹藪に、立昇ぼる烟焚へ立つ火光、清五郎道の傍に立寄りて、藪端近く片足踏みかけ、幾千幹となく生ひ茂げる、竹林の間より、透しながら屹度見に、明白とは見へねど十四五人の黒裝束せる怪しの曲者、縛められたる一個の男を圍繞みて呵責するさま、焚上る烟の裡におぼろげに見へたりければ、サテコソ怪しと吾知らず胴慄ひして、且儲直ちに藪押分け、忍び足に近寄り見れば、縛められたる件んの男は、間違ひもわらぬ菊次にして、今しも拷問の苦痛に堪へず、悶絶せんず有樣に、年こそ五十路に近よりたれ、武藝力量音に聞へし關の清五郎、何か

しも猶豫すべき、疾風の如く身を躍らし、矢庭に其處に走せつけて、前回に述べたる如く、曲者輩にげのけたり、折しも降り出す夕立に、焚火は何時しか消へ失せて黒白も分かぬ闇の闇、是れ幸ひと菊次を肩に、跡をも見ずして其場を逃れしが、我家の方に歸へらんには、人里遠き寥しき道なり、後追はれんには不便なり、先づ兎も角も莊兵衛方に伴ひ行かんと思ひしかば、車軸を流がす夕立に、滂る足下蹈みしめて、城下の方に岐路傳ひ、やがて莊兵衛が店近くまで逃れつきしが、店の方より立入らんには心知れぬ傭人等の目に立ちて、怪まれんも測られずと、態と裏手の方に廻はり、此時漸く息吹き返へせる、菊次を諭かに肩より下し、其身は身輕るく、塀乘越して、内より裏門の扉を開き、其儘菊次を助け入れ、元の如くに扉を鎖し、再び菊次を背にして、裏庭より枝折戸潜開き、窓漏る火影を便りに、一室の椽端に身を寄せて、莊兵衛を呼び起せしに、計らずも露子が爲めに怪まれしが、間もなく莊兵衛夫婦も起き出で來り、打驚くこと大概ならず、先づ兎も角もと、濡れそぼたれたる衣扱ぎ變へさせ、やがて此奥まりたる藏座敷に案内せしなり。

其時清五郎は、露子が持出す夜具蒲團を手早く敷延べ、打身に疲れし菊次を扶け居らしめ、言葉靜かに菊次と莊兵衛夫婦に向ひて、其身が今宵の始末を物語り、再び言葉を續け、菊次が遭難の顚末尋ね問へば、莊兵衛夫婦は更なり、傍に侍る露子も共に、菊次が面を打まもり、容子如何にと耳傾く。

扨も此菊次と云ふは、誰れあらふ松平大和守の御三男菊若にして、亦此の賤の清五郎と云ふは、是れなん松平家の忠臣桂清兵衛なり。扨も如何にして、清兵衛は、今其姿を變へ名を改め、此處にあるかと云ふに、其子細外ならず、今より五年前、彼の都嵯峨野の奥なる草庵に火をかけ、討手に向ひし戸田刑部、山井策馬等が手の者五十餘人を蹴散して身を逃れし後、清兵衛が意見にて、一つには大和守の横死の原因を極め、二つに隱岐守の行迹を探らんものと、菊若は其名を假りに菊次と改め、清兵衛は家中の人々に其面体を知られんことを恐れ、左りの目の上より頬にかけ、一面に剃青し、共に故郷大和に入り込み、菊若の菊次は清兵衛が古き友なる備前屋莊兵衛とて、町人なれども氣、金鐵より堅き醜商の家に潜み、其身は態と俠客の群に入り、城下の中を横行して、闇の清五郎と異名を取り、俠名を

鞏かせしなり。

扨も其時菊次は莊兵衛夫婦と清兵衛醜子四人の貌を見廻はし、先づ清兵衛の清五郎が方を立出でしことより、千本松原にて怪しき曲者十四五人に圍繞れたることを物語りて、更に言葉を續け、菊「高の知れたる腰拔武士、幾人ありとも何程のことかあらんと、懐劍引抜き多勢の中に、物をも云はず切て入るに、衆に遂はず色めき立ちて、一だひに後に引退く、折しも一個の大男、並木のかげより躍り出で、各々暫し息を休めよ、吾引縛つて御覽に入れんと、云ひも了はらず立出づるに、此奴畢竟へある曲者に相違なし、此奴さへ打挫んには、後は知れたる蟲虫奴等、自然に逃げ去ること疑ひなしと、多勢の奴等を打捨てゝ、彼の大男に切てかゝるに、思ふにまかせたる武藝の手練、其業決して我下にあらねば、心の中に感嘆し、打つも打たるゝも時の運、打たるゝ時はそれまでと、死を決して奮闘するに、戰ふこと十合餘り、如何にせしか彼の大男、しだい〳〵に引退くに、合點行かずと思ひながら、勢ひにまかする折のことゝて、兎角思案のいとまなく、進むはそに忽ち陷井の中に片足踏み入れ、ハット思ふ暇もなく、横ざまに倒るれば、彼の大男は刀を投棄て、力に任せて吾身を推伏せ、容易く繩以て縛上げたり、無念々々と切齒すれども、力及ばねば詮方なく、彼の大男に引立てられ、十四五人の曲者輩に圍繞れ、千丈藪に伴ひ行かれしが、思ふにたがたず彼奴等は、戸田牛之助を始めとして、四天王とか呼ばる丶奴等其徒黨を合せて十四五人、吾れを陷井に引入れ搦めとりし大男は、何時ぞや山城なる嵯峨の庵に、隱岐樣の仰せを受けて、吾身を捕へんが爲めに向ひたる、山井策馬と呼ばる丶猛者と、云ひかけて忍づき、屹度四邊を見廻はせば、莊兵衛はうや〳〵しげに、「茲は奥まりたる一室、殊更夜更けて店の者どもも寢部りてござりますれば、必らずともに御心配ひ遊ばしますな」、菊次は打點頭き、「其時山の井焚火の光りに我身を打見やりしが、如何やら吾を菊若なりと悟れるさまにて、青竹の責苦に白狀させんと計れる折しも、計らず清兵衛が爲めに救はれたるなり、左れど菊若と悟れるからには、コモあのまゝには捨て置くまじ、必らず隱岐樣に訴へ申して、表立ちたる詮議のせんこと必定なり、清「サテは彼の折貴郎樣を、責めさいなみし曲者は、彼の山の井にて候ひしか、「惡い奴めに御出逢ひ

遊ばし、トンダ事になりました、清「其れと知らんには、アノ場に於て打果し、息の根止めて呉し者を、残念なことを致しました、一假令ひ彼奴を殺せばとて、牛之助を始め、徒黨の奴輩、最早大概悟れるやうなれば、隠岐さまの御耳に入らんな必定、清「若し左あらんには一大事、嵯峨野の奥を立出でし以降、名を換へ姿を變へ、千辛万苦の思ひを積み、茲まで無事に過せしことも水の泡に相成り申さん、是りや斯やつては居られませぬ、打身の御悩み薄らぎ玉はんには、直ちに何れへか御供致さん、然かし其れまでは御世話序、莊兵衛殿御迷惑でも若君の御身、お預りなされて下されませ、莊「這は改つての御口上、恐れ入り奉ります、……何よりおやすきことなれど、若君我家に御座あることは、牛之助等も知り居ること、若し隠岐様に申上げ、上意とあつて向はんには、其れぞ這上なき一大事、清「其お氣遣ひ尤もなれど、彼の山の井と申す奴、狐疑深き質の男なれば、假しや心に若君ならんと思ふ節ひ起せしにせよ、充分に手を盡くして、正さしき証據を上げぬ中は、必らず牛之助等にも口止めして、他聞に入れぬは必定なり、況して隠岐様の御耳に入れるやうなことは茲暫らくは決してなし、茲四五日は人を以て、此方の容子を探ぐるのみにて、上意を肩に手を下す憂は万々之れあるまいと存じ申す、莊「其憂ひさへないならば、何とて異存の候べき、何日なりともお心置きなく、清「早速の承引忝けない、唯此の上に願ふ所は、内外の者に心をつけ、若君さまの御座あること、漏れざるやうに願ひまする、莊「仰せまでも御座りませぬ、吾倆夫婦と露子の外は、必らず是れなる一室の中に、入れることではございませぬ

と、云かけてソト心づき、娘露子を見返へりて、其方にはまだ話さいりしが、茲に在はす菊次様こそ、何をか隠さん先殿大和守様の御遺子、菊若様と申す御方と、子細つぶさに云ひ聞せ、御滞留の其間は、御傍にあつて御看病、屹度和女に申付くると、云はれて露子は乙女氣に、嬉しくもあり耻かしくもあり、殊更始めて聞きし戀人の身の上、豫てよしある人ならんとは、思ひながらも亦た今更のやうに思はれて、胸痛くまで打驚き、かしこまりましたも日の中、良うつむきて居たりけり、菊若も清兵衛も、現在娘の露子にまで、知らせぬやうに爲し居りし、莊兵衛が義理堅さを、始めて茲に聞き知りて、大概ならず感嘆し、思はず良を見合せたり。

人目にかゝらば一大事と、清兵衛の清五郎は、尚はかにかくと莊兵衛夫婦に菊若の上を頼み置き、夜明けぬ中に裏門より、一先づ我家に忍び歸へりしが、其翌朝、豫て秘蔵の金瘡の妙薬を懐にし、何喰はぬ良にて再び莊兵衛が家に音づれ、店の者等には都合ありて菊次が昨夜のまゝ我家に居るやうにはいのめかし、尚は彼れが爲めに都合ありて、身の暇を乞ふ爲め來りし如く欺き置き、やがて莊兵衛に對面し、共に菊若が隠れ居る、彼の藏敗に至り、打身の手當てをなしたる後ち、尚は後々の事など談合し、再び何喰はぬ良して我家に歸へりけり。

斯くて五日餘り經ちて後、清兵衛始め莊兵衛夫婦が扳りなき手當てと、露子が心尽くしの介抱に依りて、菊若が打身の傷も、大概快癒りければ、何時迄か斯くてあらんには、其中茲に忍び居ると、山の井

始め牛之助等が、旦にも入らば吾れのみならず、莊兵衛一家をも、奚鶴の淵深う陷らすると譯なりと思ひければ、或る夜菊若、清兵衛は更なり、莊兵衛夫婦を彼の一室に招き寄せ、思ふ所を告げ聞ふるに、孰れも比むべき譯にあらねば、其夜清兵衛つき添ひ、一先づ眞心尼の墓參をかねて、都嵯峨野の奥なる彼の山里に赴くことに決し、旅の準備もそこ〳〵、夜半過ぐる比彼の裏門より、莊兵衛お妻露子尊が、涙にうるむ暇乞ひの言の葉を背にして、菊若清兵衛山城さして發足ちたり。

第二十四回

六疊敷の室狹なれど、床の間あり、袋棚あり、床には土佐光信が詩幅を掛け、袋棚の下には、源氏物語、榮華物語、大和物語など入れたる白木の桐の本箱を藏め、此方丸窓の下には、唐木の机を置き、讀みさしの土佐日記は、繙けるまゝ其が上に置かれたり、母屋には廊下傳ひに行くものなるべし、水清らかなる泉水を隔て、右手なる杉の生垣を廻れば、中門越しに裏門の屋根見へにき、此一室は是れなん莊兵衛が娘の露子が居室にて、露子は過ぐる頃より、是れぞと云ふ病ひあるにあらねど、色澤いつしか衰へて、唯此の一室に引籠り、うつら〳〵と日を送るに、莊兵衛夫婦は獨娘のことゝて、愛ひ悲しむこと大概ならず、殊更母のお妻は、露子が心それと悟りて、叶はぬ思ひに思ひやつるゝこと、一層不憐に思ひやれども、今更親の目から、打つけに云はるべきことにもあらねば、慰めん言の葉もなく、獨り胸を痛むるのみ。

「お露や、お前何處も何ともないとお言ひだけど、如何も顏色が日增に惡るくなる所から見ると、何處かゝ惡いのに違ひはないヨ、過般から勸めるやうに、お醫師さまにお見せ申したが好いぞや、」露「何處も何ともないので御座いますのに、おかしなものでございますねェ、自分にさへ何處が惡いのやら分からぬ位ひでございますれば、お醫者さまにお見せ申したからと云つて、其程の効能もございますまい、其内には元のやうになりませうから、必らず御案じ下さいますな、」母「無理にお見せと云ふではなけれど、打捨て置く中大事なことになつては……、」露「ナニ阿母、何處が惡るいと云ふのでもございませねば、其やうなことになる氣遣ひはでございませぬ」、何故か彈て拒むに、無理にも勸めず、母「其やうに思やるなら、和女の心任せにしたがよい、なれど今は左程になにもせよ、よしなきことを思ひつゝけ、鬱屈勝ちに日を送らんには、いつしか眞實の病ひとなり、取返へしのつかぬやうにならふも知れず、世の諺にも云ふ通り、命あつての物種、身體さへ壯健なれば、今は叶はぬ望みでも、行末は叶ふやうになるもの、返へす〳〵もきな〳〵思ひ過でして、眞實の病ひでも引起こして下されなや」、譯ありげな母の言葉に、若しや我心に思ふこと、悟り玉ひしにはあらぬかと、露子は思はず貞赤らめしが、漸くにして、露「何もソレほど思ひ過しまするやうなことはでざりませねを……」と、云ひかけて後は口籠りさしうつむけば、母は打笑み、母「思ふことがないと云ふなら、此上もないこと、兎も角も氣を引立てゝ、さぁ〳〵しうなつたがよい……、ソレは然と和女に云ふて喜ばせることがあると、云ひかけ

て四邊見廻はし、聲うちひそめ、「母菊若様より昨宵逝う、御便りがあつた旦ノー」、露子は思はず、「ア」ノ菊若様より、アノお便りがございましたとか、母「此處をお立ち遊ばされてよりハヤ十日餘り、何の音沙汰もないので、如何遊ばされたことやら、お父さまともく、御案じ申して居つた所が、昨宵の御手紙、何の御障もなう、都鵯鵯野へお着き遊ばされたとの御事、漸く胸がおちつきました」、露子は吾れを忘れて、心底より嬉れしげに、「ソレはマア嬉れしいこと、ソシテお住居は……、何時ぞやのお話にては、過ぐる年お立のき遊ばすとき、庵は態と燦楽て玉ひしとやら……、聞けば鵯鵯野と云ふ所、都に近い所なれど、何事も思ふに任せぬ不由自な片田舎とのことなれば、御宿りとても思ふやうなお所はございますまい」母「御住居のことも詳しう認めてあつたが、其ほ摸様では、以前御母様の真心に尼様御在世の折、目をかけ玉ひし彦七とか云ふ百姓家に在すやうな御様子、其彦七と云ふ人は、夫婦とも律義一片な人々にて、御恩を忘れず、彼の庵の跡には真心尼さまの御遺骸を埋め標の塚を立て、念佛供養も貧しき中から、及ぶだけは怠なう盡くし居つたとのことにて、菊若様がお着き遊ばされたときは、夫婦とも〳〵嬉れし泣きに泣いて喜んだとのこと、其れほど眞實な人なりと云へば、御不自由は御不自由でも、世を忍び玉ふ御身に取りては、却て好い御隱棲かも知れぬ旦ノー」露「ソシテ清兵衛様にも、アノ其處に御出で遊ばすのでございまするか」母「清兵衛様にも御一所に、今では其處にお出で遊ばすとのことなれども、御思案深き菊若様の御思召にて、清兵衛をのぞかりは、近々此方に立

返へり、元の住居の其儘に、子分の者ども、もに預けあるを幸ひ、再び元の清五郎となりて、一つには御茶中の摸様を窺ひ、一つには外ながら我家を守り呉れ玉ふとの御事、是と云ふも半之助一味の奴輩が、いつ何時推寄するやも知れねば、左ありては譜代恩顧の郎黨にも優れる、莊兵衛夫婦が眞實を忘れ、仇を殘して身を安くするに似たればと、世に恐れ多いまで、有りがたき菊若様の思召に出たることゝ、清兵衛様の御手紙に記るしあつたれば、孰れ近々のうち清兵衛様だけは、此地へ立返へらるゝことであらふが、ソレにつけても菊若さまの思召、何時も變はらぬ御眞實、勿体なくて涙が出ます」、露める目元しばたゝけば、露子もいつしか涙を浮べ、「ホンに嬉れしい思召、冥加に餘て何とも申様もございませぬ、ソレにつけても清兵衛様が、此地へお出で遊ばすやうになりましては、其跡は唯御獨り、何かにつけて嘸御不自由なことでございませう」母「是れが近い所であるならば、和女なり吾なり、朝夕御用を伺ふべけれども、何を云ふにも十五里近く隔てる鵯鵯野の奥、兎角浮世はまゝならぬもの、一世が世であらば何一つとして御不自由なき若殿さま、時節とは云ひながら、片山里の賤が伏屋に、世を忍ばせ玉ふこと、實においとしうてなりませぬ」母「御いたはしきことは申すまでもなけれども、惡には惡の酬ひあり、善には善の酬ひあり、今は何のやうに苦るしき目にお逢ひ遊ばすとも、やがて御開運の折あることゝ疑ひなければ、今の果敢なさ御身の上を、昔語りに遊ばす時もあらふと」互みに顔見合せて愁然たりしが、母はやがて立上り「埒もなき御噂さに、アタラ時をつぶしました」、トレ御返

事の文なりと認めませう……、今日は幸ひ天氣も好ければ、斯乖籠めてばかり居らずと、乳母なりと供につれ、其邊氣晴しに行て來たがよいぞやと、懇ろに云ひ置きて、立去る母の後影見送りながら、

「アレ程までに此身のこと、思ぼし玉ふ母さま父さまを振捨てゝ、菊若さまの御跡慕ひ行かんこと、不孝には似たれども、思ひ切ても切ても切られぬ思ひ、殊更今の御便りを聞きては、一刻も安閑と、茲に日を消す心はせぬ、オヽ然じやと、云ひも敢へず料紙硯を取出して、窃かに四邊を覗ひながら、認むる一通の書簡。

其日も暮れて初夜過ぐる頃、母のお妻は再び露子が居室に音づるゝに、燈火の影はのくらく、露子が姿は影も見へぬに、胸騒かしながら四邊見廻はせば、机の上に一通の置手紙あり、取る手遲そしと表書を見るに、父上様母上様露子よりと認めあり、お妻見るより氣も心も半狂亂、封をも切らず其を携へて、莊兵衛が居室へと駈込みたり。

第二十五回

茲は明神森とて、大和より山城に通ふ近路、畫は往來の繁けれども、夜に入りては寂然として、田毎に叫ぶ蛙の聲のみ喧すし、折しも茲に來かるゝ一個の武士、彼方より來る一個の男と行合いしが、闇に透して、武士「其處へ行かるゝは竹庵どのではござらぬか」、彼の男は吃驚しながら振返へり、同じく透かして打見やりしが、男「誰れかと思へば貴殿は山井策馬殿、イヤハヤ驚を拔かれました」、山「ナニも其

樣に吃驚なさることもあるまい、ジテ貴老は供をも伴れず窃一個、何處へ赴かるゝ途中ぞ、竹「イヤ何處と云ふて外へ參るのではござらぬ、實は密々急に貴殿に御意得申したい用事があつて態と供をも召誘れず、唯今貴殿の御宅へ罷出づる所でござるが、愚老よりも先づ貴殿には、供をも伴れず唯單獨、何處へ御出でなさるゝのか、山「其は好い所で御出逢い申した、拙者も實は貴老に密々拜顏の得たい義がござつて、態と供をも召しつれず、只今御本宅に伺ひし所、是れなる明神村の別莊にお越しなされたとの事に、實は唯今御別莊に相伺はんと存じ、是れまで罷越した所でござる」、竹「何さまソイツは好い所で御出逢ひ申した、我別莊と申すも、實は是れより程近かい所でござれば、茲までお越し下されたお序に、お立寄りを願ひませう、イザ御案内仕らん、斯お出で下されませと、ハヤ先に立て行かんとすれば、山「アヽイヤ竹庵老、暫し御待ち下され、貴老にお目にかゝらん爲め、是れまで罷り出でた儀でござれば、御供致いても宜しけれど、實は極密にお話し申したい義でござれば、殊に歸路も急ぎ申せば、人通りなき此の街道、幸ひ涼しき夜風に吹かれながら、是れにてお話し仕りたい、竹「如何なるお話しかは存せねども、茲にては餘り端近か、殊更愚老より申上げたい事は、極密の義でござれば……」、山「の井は四邊見廻はせしが、山「ナルほど茲は兎も角往來、寡き道とは申しながら、油斷ならぬことでござる、然らばアレなる社の内にて……」、竹「如何さま彼處明神の森、密談には屈竟の場所、山「御異存なくば彼の森にて、何かのお話、竹「承はらんと、二人は同伴れ石の鳥居をくゞりて、此の街道より一町、

あまり、山手に近き森に至り、苦に朽ちたる社の椽の塵打ち拂らふて、山の井先づ腰うちかくれば、竹庵も懐中より、手拭取出し折敷きて同じく腰をかけながら、竹「シテ貴殿より密々のお話とは、如何なる義でござりまするか、山「イヤ餘の義でもござない、何時ぞや千丈藪にて取逃いたる菊次と申す曲者、如何やら先殿大和守の遺子、菊若どのに似て居るやうに思ひ、其後百方に手を廻はして行衛を搜せど、手がゝりなし、彼奴莊兵衛が家に奉公の致せし者と云へば、或は彼處に忍び居るやも知れずと思ひ、踏込んで搜索の致さんものと、幾度か思ひしかども、莊兵衛と云ふ奴、先殿以降帶刀御免の家むう、今に御上の金主ども勤むる家柄、若し菊次を庇護ひ居らんには、云ふまでもなけれど、庇護ひ居らぬ其時は、拙者の失策となりて御上の覓へ妙ならぬに至るやも知れねば、幸ひ貴老が莊兵衛と親しきを以て、牛之助殿とも相談の致いて、過般貴老に探索方、御依頼の致いた次第でござるが、其後貴老より、熟だもの壞れたとも、何の音沒汰もござないので、如何致し召されたかと、實は牛之助殿とも計りて、今宵其返事の伺はふと思ひ、斯出かけ參つた次第でござるが、未だ手がかりはつき申さぬか」、竹庵は頭を撫で「其事でござるか、其事ならば眞個に面目次第もなき儘でござれど、手をかへ品を盡せし甲斐なく、如何したものか、此井莊兵衛一家の者ども愚老を忌み嫌らふて、何事も打明けて話しの致すことなく、實は今に何の手がゝりもつき申さぬ、然かし山井氏今宵計らず、意外の獲物がとさりましたと、云ひかけて四邊見廻はし小膝を進む。

意外な獲物があつたと云ふ竹庵が言葉に、山井も亦た小膝を進め、山「ナニアノ意外な獲物がありやしたとナ、スリヤ耳寄りな話、シテ其意外の獲物とは、何やうな獲物でござるかと、扇を縱に貌差出せば竹庵少し得意になり「マアお急きなさりますな、其獲物と申すは外でもない、莊兵衛がお娘の露子がことで御座りまする」、山井は不興氣に「ナニカと思へば其意外の獲物と申すは、アノ露子がことでござるとな、サテも馬鹿な、露子がことなりや、牛之助殿なら兎も角此の山井に取ては痒くも痛くもない素品、其れを左も大切らしげに、拙者にお話しなさるとは、チト御門が違ひませう、何角につけて扱りのない、貴老の匙加減には不似合千万」竹「マア其やうに腹をお立てなさりますな、愚老が考案では、露子と云ふ素品、強ち牛之助殿の爲めばかりではない、彼の菊次が行衛を探ぐるには、屈竟の素品貴殿のお爲めにも隨分相成らふかと存じますナ、シテ其子細は……、竹「子細と申すは外でも御座らぬ、彼の莊兵衛が店の奴等の噂でも、亦た當人同士の素振から見ても、菊次と露子兩人が仲は、遠から怪いやうな容子、左らぬ菊次が行衛知らぬことはヨモあるまいと存じ、如何がな致して露子を欺し豫てお賴みの菊次が行衛、探り出だす手掛りが得たいものと、竊かに折を窺ひ居りしに、天の與へか今日夕暮、愚老別莊に赴く途中、茲より程遠からぬ街道にて計らずも露子に出逢ひました」山の井は飛に不興氣な容子に引換へ、俄かに笑貌を造りて、

「ナニアノ露子にお出逢い召されしとナ、シテ〳〵菊次が行衛お尋ねなされましたか、アノ菊次が行衛相分りましたか、流石は万事に抜りない竹庵老、先刻云ふた拙者の言葉は、此上もない失言、今更お詫の致しやうもございない、シテ露子は如何しめされたか、定めし菊次の行衛白狀の致いてござらふノ」。竹「其やうにお急なされすと、マアお聞さなされ……供者をもつれず唯一個、然かも夕暮空の淋しさ街道を、たどり行くこと、奇怪至極、若し、や此頃行衛知れぬ菊次が跡を慕ひ行くのではないか、兎も角も好き獲物、取しては一大事と、心の中に思ひながら、近寄りて聲かくれば、飛上がるほど吃驚して、我貌ジット見詰る容子、愚老は態と打笑みて、是は是れはお露さの、今時分よりお供もなしに、何處へお出でなさりますると、問ひ尋ぬれば、慌はし、俄かに用事がでけて、ツイ其處までと、何やら分らぬ答へ、テッキリ其れに違ひはないと、幸ひ愚老も此先まで行くものなれば、其れでは其邊まで御一所にと、程好くあやなし行く途中、言葉巧みに問ひかくれば、賢いやうでも流石深窓に育ちて、世間を知らぬ阿蒙娘、山「サテは貴老の言葉に乗せられ、ウッカリ白狀致いてござるか、竹「マアお聞さなされ……、半どの〳〵繼の取持致してより、滅切り愚老は嫌はれ者に相成り居ることでござれば、中々彼奴も油斷はせねど、其行先だけは、山城の嵯峨野の邊まで行くと申し、其行路を心細げに尋ました、山「ナニアノ山城の嵯峨野となム、シテ其後は何と致いた、竹「嵯峨野と云へば菊若が育ちし所、菊次が菊若に逢ひなくば、的切り其跡を追ふ者に違ひはないと思ひしに依り、前途の道は物騒な上に、斯く夜をかけて行かれんこと、中々以て氣遣はし、其れより明日の早天に、幸ひ我知己の者、都に行く筈なれば、其者と同道されんこと然かるべしと、倘はかにかくと言葉を飾りて狀る了せ、漸くのことに、我別荘に伴ひ行き、女どもはかりにては氣遣はしければ、供者等を警護に殘し、先づ兎も角も貴殿に逢ふて、委細のことをお話し、御相談の致さんと吾れのみ直ちに城下に引返へす途中、幸ひしてお目にかゝった次第でござ〳〵、何と萬皿貴殿のお爲めに、ならぬことでもござうがすまいがナ、山「然〳〵、彼の露子奴は、確かに貴殿の別荘に……、竹「如何にも留置き申してござるが、山の井氏如何致したものでござろふナア」。

時山の井策馬はット立上りしが、やがて目釘を密しも敢へず、スラリと引抜き、闇にも閃めく一刀を、竹庵が目前につきつけ、山「天晴れなり竹庵殿、御家老戸田大膳どのに代りて、拙者御褒美差上げ申さん、イザお受取りなされ。

第二十七回

闇にも閃めく一刀を、目前にズット突きつけて、褒美取らせん受けとれと、云ひも了はらず山井が、冴へたる眼に切付くれば、素より覚ることあらんとは、夢にも思はぬ竹庵、身を避くる間もあらばこそ、肩先深く切込まれ、苦に朽ちたる椽端より、コロ〳〵と轉び落ちさま、ヨロ〳〵と立上りしが、再び堂上に尻餅つき、恨みに血走る眼鋭どく、山の井策馬をハッタと睨み、竹「是りや何故あつて愚老をば、斯

く慘酷しく御成敗なされますると、醒震はしてナジリながら身を震はして土を攫み、寄らば打たんと身構へするに、山井策馬は尻目にかけ、冷かに打笑ひて、様先に腰打ちかけ、鮮血に染まる一刀を、様板にグサと突き刺し、落ちつき排ひし醒顔かに、山「竹庵老、何と肝がつぶれたか、今宵汝に極密々に逢ひたいと云ふた用事と申すは、何を隠さう此事だわ」竹「エ、エ、エ……、ソンなら今宵の用事と云ふは、アノ殿老の命を取る爲めなりしか、大膳殿にせヨ和郎にせヨ、褒美を受くる譯はありとも、恨みを受くる覺へはナイ、何咎あつて無慘にも、斯くは愚老をお切りなされた……、サ、其譯聞かふ、其譯聞かふ」山「譯と云ふは外でもない、貴老是れまでの功勞、太守を始め大膳殿、孰れも御滿足に思召され、乃ち拙者に仰せあつて、褒美の金の取らせヨと云ふ御懇の御意、君命なれば背きまつらんよしなく、斯くは此場で褒美の金、お渡し申す次第でござる、此期に及びて兎や角申さるゝとも、曼早甲斐なし、念佛申して褒美の金、イザ尋常にお受取りなされ」竹「君命とは何の痴言、假令ひ君命なればとて、御家の爲めに力を盡せしことこそあれ、殺さるべき罪科犯した覺へはない此の竹庵、是れは外に子細があらふ、サ、其子細を云へ、子細を云へ」山「左程に云はるゝを、包み隠さんな是れまでの好誼がひもない譯、去らば子細のお話し致さん、冥土の名産竹庵どの、耳の穴カッポジッテ能く聞きやれ、指折り數ふればハヤ十二三年の一昔、今の君公隠岐守様、當時此國の大守たりし、御兄君大和守様を弑しまつり、國家を押領せんとの御謀反を企て玉ひしに、其御反謀に加擔せしは、御家老吉田大膳

殿を始めとして、斯く云ふ拙者に至るまで、都合合せて五十有餘名、密かに策をめぐらして、其機の來るを待ち居りしが、吉田殿の云はるゝには、不意に職を起さんにも、亦たは刺客を用ひんにも、御油斷○○○なれば、君を弑せんと最易けれど、然なさんには、假し思ひを遂ぐるにせよ、柳營の御手前をつくろい、御家名に傷なきやう取計はんこと、容易からず、左れば御病氣にて逝去玉ふやう見せかくる爲め、其毒自然にめぐりて、其効能激しからぬ、毒藥を用ふるに如くことなしとありしに、隠岐守様を始めとして、一味徒黨の面々、誰一人として異議を唱ふる者、　時妙計とありて、右毒藥調合のことを賴まれしは、竹庵乃ち貴老でござる、斯くて或る時貴老　　〻〻通り、隠岐守様御屋敷に於て、大和守様を御饗應あり、其時御酒に混じて大和守様に差上げられしに、其効驗著明にて、御歸館後大和守様は御病氣に罹らせ玉ひ、一週間餘りにして、思ひの如く御逝去遊ばせしが、毒藥に當てられ給ひしとは、誰一人として心づく者なく、若君菊若殿、尚ほ御幼少にましますを幸ひ、柳營の御前首尾好く欺き、隠岐守様御家督御相續遊ばさるゝことゝ相成りしは、貴老も能く御存じのごとならん、左れば隠岐守様には、其御謀反に加擔せし面々を、追々御引立て遊ばされ、大膳殿を一の家老執權職の位ひに引き昇せられ、拙者は武藝の御指南番に取立てられ、貴老は乃ち御殿醫中の上席に昇せられ、其他の人々も漏れなく夫々取立てられ、孰れも竊かに舌を吐いて喜び居りしに、計らずも先君大和守様の御愛妾妙子、其腹に上げたる若君菊若を懷にして、其兄清兵衛もつとも、御家相續の重寶たる、天

國の名刀と御系圖の一卷を盗みとり逃出したり、彼の品なくては隱岐守様にも、位ひにあらぬ位ひに居らせ玉ふとの非謗を招き玉ふこと云ふに及ばず、若し彼の品々携へて、菊若どの柳營御所に訴へ出で玉はんには、君公隱岐守様には、上を欺き位ひを盗むの罪に陷り、果ては彼の事露現の端緒となるやも知れずとありて、其後菊若追索の詮議御油斷なかりしかど、絶へて其行衛知れざりしが、十年餘りを經て、都嵯峨野の奥に忍び居ること相知れ、乃ち大膳殿の御舍弟刑部どの、及び拙者の両名仰せを受けて、夥多の組子を召しつれ、嵯峨野をさして出發ちたること、貴老ヨモお忘れはあるまいと、云ひかけて立ち上りしが、心に憚る所のあればにや、闇はあやなき森陰を、透かしながら見廻はしたり、

第二十八回

策馬は四邊を見廻はすこと稍々暫時、再び元の椽端に腰打ちかけ、屹度竹庵が方を打見やりて言葉を續け、「一貴老も能く御存じの如く、拙者刑部と共に數多の組子を引きつれ、嵯峨野をさして赴きたる甲斐もなく、菊若清兵衛お妙の尼の三人、正しく彼所に世を忍びて居ることは居つたなれど、假令ひ清兵衛に鬼神の勇ありとも、殘る二人は高の知れたる女小兒、何程の事あらんと思ひ侮りしが不覺の原因、マンマと菊若清兵衛を取逃がいて、手に入つたものとては刑部どのに手負はせられたお妙の尼の黑襟ばかり、益にも立たねば打捨てゝ、空しく城下に立返へり、此のこと大守と大膳どのに、恐る〳〵言上に及びしに、汗は由々敗大事とありて、其後詮議怠りなさは、貴老も能く御存じならん、然るに彼の莊兵衛が家の丁稚菊次と云ふ曲者、容姿の似たるのみかは、小吉野の踵立てと云ひ、千本松原の働きと云ひ、菊若に相違なしと思ひたれど、万一人違ひならんには、徒らに功を貪り上を欺くやうに思はれんも口惜しきことなりと、半之助を始め一同の者に口留めして、大膳殿の耳へ、さへ入れず、莊兵衛が家の容子は貴老に賴み、其他八方に手を配れど、菊次が行衛は更なり、彼の千丈藪にて菊次を助けたる不思議な勇士の行衛さへ少しも知れず、若し此儘に捨置きて、彼の千本松原のこと千丈藪の失敗、太守を始め大膳殿の耳に入らんには、如何なる罪を蒙むるやも知れぬと思ひたれば、今日出仕の折、包み隱さず大守と大膳殿に始終のことをお話し致せしに、深くも咎め玉はねど、唯大概ならず驚かせ玉ひて、何とせんと大膳殿に御相談遊ばさるゝに、大膳殿の云はるゝには、假令ひ菊若此世にありて、彼の二種の御家寶を携へ、柳營御所に訴へ出づることありとも、布留那の辨を以て詭破ぶらんには、彼奴を以て盗賊に陷さんこと難からねども、唯だ先君毒殺の事漏れんには一大事なり、此秘事知る者は、孰れも重立ちたる者のみにて、世に漏るゝの恐れはなきに似たれど、彼の藥を調合致せし竹庵のみは、心堅固からぬかなれば油斷ならず、先づ彼奴めを押かたすけて、秘事露現の根を斷ち置き、靜かに菊若の行衛御詮議遊ばされんこと然るべう存ずると言上せしに、君にも不愍な奴ではあれど、家の大事には換へ難しとありて、乃ち拙者に貴老成敗のこと仰せつけられたるなり、拙者に於ては何一ッとして貴老に恨みはなけれど、實に餘義ない君の仰せ、腹も立たうが斷念めて、必らず

お恨み下さるなと、始終を語る長物語り、竹庵聞くことゞに齒噛みして、無念の涙に暮れ居りしが、やがて恨みに震ふ聲ふりしぼりて、竹「大膳奴は申すも更なり、大守様さへ汝さへ、云はうやうなき大悪人奴……、斯くと知らねば今日が日まで骨身を惜まず汝等が爲めに、立働らきしことの口惜しさ、人に恨みのあるものかないものか、今に思ひ知らせて呉れんと、云ひも了はらず立上がりて、ヨロ〳〵とよろめきながら、腰なる刀の柄に手をかけ、山井が方に立寄れば、山井は腰打かけたる儘、立たんともせず冷笑ひて、右の足を揚ぐる間もなく、立寄る竹庵を蹴倒し、朽ちたる様に突刺したる一刀引抜き、徐かに立上りて倒れし竹庵を踏みにぢり、山「命取らるゝ今日が日まで、忠義を盡くした功にめでゝ、長い苦痛はさせ申さぬ、今息の音を止めてやるから、シタバタせずと念佛でも唱へたが好い……、尤も貴老の骨折で、綱にかゝつた露子奴は、是れより拙者が引受けて、一ッには菊次が行衛の詮議、二ッには牛之助殿への取持、貴老に代つて首尾よくやつてのくる積りなれば、心殘さず成佛さッせヱ、ナンと合點がまいッたかと、云ひつゝ一刀取直して、重傷に息も絶々なる、竹庵を只一刺に、突き殺さんと爲す折しもあれ、社の裡よりヌット出でたる一個の男、旅裝束の身輕な姿、腰には赤銅造りの一刀ブッ込み、頭には參道笠間深に被りしが、今此のさまを見て驚ろける容子もなく、男「オイお侍士、大層味をやんなさるねヱ、誰一人として聞く者なしと思ひ居りしが、思ひもかけぬ人の言葉、山井は胸騒かして振返へり、竹庵打捨て、山「密事を聞ひた曲者、其處動くなッと云ひも致へず、彼の男を目がけて唯一打と切てかゝるに、彼の男は二度三度やりちがはして、同じく一刀抜合はせ、丁々發矢と切結ぶ暫し勝負も分ざりしが、思ふにましたる旅人の、鋭さ切先流石の山井、防ぎかねてか蹌蹌れ、果ては絶へずや息怯にも、刀を引きて後をも見ず、一目散に逃げ出せば、彼の男は冷かに打笑ひしのみ、強ても逐はず立戻りて、竹庵が方に立寄り見るに、何時しか息絶て身動きだもせず、男「ヱヽ好き詮議の手掛りと思つた甲斐なく ハヤ息絶へたか殘念なこと致した哩……、其れは然と心がゝりは露子どのゝ身の上、こりや斯やつては居られぬと、云ひも了はらず一歩三歩、街道の方に立去らんとせしが、再び立戻りて竹庵が首打落し、男「天罰思ひ知たるか、アノ茲な獄卒奴がと、息卷疏く罵りて、刀を鞘に收めながら、竹庵が屍に唾吐きかけ、其儘街道の方に立去たり。

第二十九回

松平大和守の奥家老、鬼と呼ばれし清兵衛が、世を忍ぶ爲めの仮の名とは、知る人絶へてなけれども、鱗と云ふては誰一個として知らぬ者なき俠客の中の男一貫、清五郎が表の方に頼もうと案内を乞ふ聲、子分の一人取次に立出れば、一人の武士嚴しげに「清五郎とは此家のことか、「左様でござりまする……シテ貴郎様には何處より……、「拙者は御指南番山井策馬が門人水島左伸太、主人清五郎は在宅なるか「宅でござりまるが、何か御用で……、「如何にも用事があつて參つたもの 面會が致いたい 取次頂む。

やがて案内につれて奥の一室に通れば、清五郎出で迎へて「是れは是れは水島様、能うこその御出で、イザ先づ是れエ水」イヤお搆ひ下されな、清「シテ御用と仰せらるゝは……、水」外でもさらぬ、今より二日前、師匠山井策馬が道場に於て、和郎が天晴の働き、折しも師匠を始め高弟の面々不在なりし爲め思はぬ不覺……、イヤ何足下の勇さ、師匠御歸宅の後お話しの致せしに、師匠にもはと〳〵感心の致され、町人に似合はぬ天晴の腕前、顔丹敷男、一度面會の致いて武藝の話語らいたさものとの仰せ、乃ち拙者其お使ひに參りし者、差支へもなくば今日夕刻より……、清」ナニ御用かと思ひしに、未熟な技がお耳に入り、武藝の御物語なし下されんとは、冥加に尽きて勿体なし、屹度仰せの承はりました、今日巳六頃より伺ひますれば、此段山井様に然る可く……、」早速の承引かたじけない、去らば屹度約束のつがふたぞヨ」。

清五郎は、水島左伸太が立去る跡を見送りて、やがて奥なる一室に立返へりしが、清「若君の仰せを受けて、一つには家中の容子を探らん爲め、二つには莊兵衛一家を守護せん爲め、夜をかけて此城下に立戻る途中、晝の勞れか眠さ堪らず、明神森の社の内にて、計らずトロ〳〵と假睡む中、夢か現か奇しき人聲、ツイ目を覺して窺ふとも、互みに知らぬ策馬と竹庵、大惡無道の隱岐どのを助け、大和守様毒害のことより、菊若様詮議のことまで、漏れなく語る密計密謀、吾れに取りては天の助け、彼奴等に取りては天の罰、ヤワカ其儘に置く可きかと、急る心鳴る腕を、ジット沈めて聞くとも知らず、露子どの

のを拐帶せしことまで物語り、果ては策馬の竹庵殺ろし、間を幸ひ社を立出で、おどせし言葉に肝を奪はれ、切てかゝる山井策馬を太刀風鋭く追ひまくり、竹庵が死首打落し、其れより露子どのゝ跡を尋ねて、聞けるが儘に竹庵が、別莊近く忍びし甲斐なく、時刻遲れて山井奴に先を越され、露子どのゝ影も見ず、詮方なければ其足にて、莊兵衛が家に立づれ、委細を話して相談せし末、今より二日前の日に、道場荒しと化けて行き、荒した揚句に容子を探れど、策馬は留守なり門弟どもは何事も知らぬ顔、折角探らんと思ふた露子どのゝ行衛、探り出さん手掛りなく、空しく我家に立歸へつたが、今來た水島左伸太が、言葉の奥を探つて見れば、其道場を荒されたる恨みに酬ふる其爲めに、我身を引出す山井が、卑劣な手段の案内なりとは、云はずと知れたことにして、危險なことは云ふまでもなけれど、露子どのゝ行衛を探ぐるにも、亦た好敵手なる容子を探ぐるにも、此上もない好き機會なり、彼奴等に何のやうな方略あり共、高の知れたる山井一派何程のことかあらん、是りや久振りで腕に御馳走が出來る哩と、云ひかけしが四邊見廻はし、「興が向いたので、思はぬ獨言、假令ひ子分の奴等でも、聞かれやア面白くねエ、吾にもわらずツマラヌことを云ふたもの、ぞりやそろ〳〵準備にかゝらふかい。

ハヤ時刻となりければ、夕暮の風に袂を吹かして、我家を後に立出づる、年とし五十路に近よりたれ、見と呼ばれし鬼桂、白地の縮緬に紺もて三柏を染め抜きたる單衣に、縁と白と万筋に織分けたる帶を、結び、腰には赤銅造りの一刀をブッ込みたる逞姿、天晴夜目にも羅ろく露の清五郎とは、云はずと知

られて勇しけれ。

第三十四

此四五日越し、菊若様と吾身と主從両人、世しは懐しき故郷なれど、今は白刃閃めく敵中に、兎も角も無事なる命を保ちしのみかは、敵の秘事問ひ探ぐるにも、大概ならぬ便りを得、其上ならず寒さにも、暑さにも、長の年月妙からぬ助けを受けたるは、皆な是れ莊兵衛夫婦が、心より出でし眞實の賜物なり、此の恩誼はんには、今其愛女露子が、敵に捕はれて憂き日を送るを、如何で外目に見らるべき、況んや我這度此城下に立戻りしは、莊兵衛一家を外ながら守護せよと云ふ、若君の仰せを受けての上のことなるに、如何でべん〳〵として打捨て置かるべき、假し火水の中なりとも、莊兵衛一家のことならんには命を的に躍り入り、我力の及ばん限りは、盡さにや男の一分立たぬと、思ひ込んだる清兵衛の清五郎、道場破りを怒りもせで、招く山井があやしき案内、危いとゝは思ひながら、腕に覺への あるだけに、否みもやらず大膽にも、夕暮空に我家を立出で、初夜近き頃山井が、屋敷の門前に着きたりける。

清五郎其時表玄關の方に進みて、例の高さ餓き聲にて、頻りに案内を乞ふ程に、やがて紙燭を携へたる若侍士両人立出で來りて、就れよりぞと尋ぬれば、清五郎は二度三度其面を指さし、清「御招きに寄りて、態々參上致しました、驚が參上致しました」と云ひも了はらぬに、両人の侍士は打笑みながら、清「サテハ清五郎殿でござるか、清五郎殿ならんには、先生先刻よりお待ちかねでござる、イザ御連盛なく此方へと、早や紙燭を取て案内するに、清五郎は莞爾と打笑み、清「ソンなら眞平御免なされませ」、と下駄の塵を打拂らひて、赤銅造りの一刀を左りの手に持ち、両人の侍士を前後に立て」清「御案内願ひまする」。

玄關より二室を連れば、様先より長廊下傳ひ、庭を隔てゝ此方に續ける、彼方奥まりたる離座敷には、折しも夏のことゝて、障子開け放ちたれば、三基の燈籠程好き所に置きて、主人の山井筑馬と、年少き一個の武士と、うちくつろぎて酒酌みかはし居るさま、手に取る如く見へたりける。

清兵衛の清五郎は、此さまを見て「サテも好いお庭の景色やと云ひたるのみ、悠然として、両個の背侍士を後前に、歩みを移すに、彼の長廊下の中程まで來りしころ、如何にせしにや前なる人も後なる人も、同時紙燭の火を打消せしが、「是れは迂闊なことを致しました、只今燈火を取り參れば、暫し其れにてと云ひ捨てたるまゝ、もろともにバラ〳〵と、後なる母屋の方に走せ去りぬ、清五郎は別に驚けるさまもなく、後の方を見返りて「イヤ其れには及び申さぬと、云ひたれども、此時は両個の影はハヤ見へず、音もないことゝ云ひ捨てゝ、清五郎再び歩みを移さんとする折しも、小暗き處の大立、矢聲と共に左右より、同時に突出す手練の鎗先、清五郎が身躰は両脇より、田樂刺に刺貫かれんと思ふに遑ひて、一歩身を引きて座を突せしと見る間もなく、左手に提げし一刀を口に咬へしが、忽ち鎗

の千段巻、左右の手に確と握り、力に任かせて引くが如くに見せかけ、エイヤット聲かけて突放てば、影こと鬼へね餘の主は、大力無雙の清五郎が力と、我引く吾れの力に磨し倒されて、ウンと叫べる聲聞へしのみ、後は寂然として音もなし、清五郎は左右を透し眺めしが、思はず呵々と打笑ひて、清一「馳走もあらふに、人〻田樂作らふと云ふ、山井殿も物好きな男、此の清五郎は、田樂作ることは巧手なれど、田樂に作らるゝことは下手でござると、云ひ捨てゝ、再び悠々として、奥なる一室に進まんと、三足四足歩みを移つせしに、無慙、アット云ふ暇もなく、廊下の椽板忽ち拔けて、身は陥井の穽に陥りたり。

此時各々出合ひ候へ、出合ひ候へ、獲物は罠にかゝッたりと、口々に呼び叫けぶ聞こえしが、忽ち其處彼處より現はれ出でたる十四五人の武士、吾先にと走り寄り、おりかさなッて揉合ふに、果ては見を欺むく清五郎も、働き自由ならねばにや、無念無念と切齒しながら、荒縄以て七重八重に縛められたり。

第廿一回

十四五人の武士に囲繞れ、荒縄にて縛められたるまゝ、庭前に引据ゑられし清五郎、爛々たる眼を見開らきて、乾度向へる方を見るに、椽端に紫縮子の坐蒲団敷かせ、其上に膝打かけて、燭臺の光りに我面を睨むが如く見詰るは、見まがふ可くもあらぬ山井策馬、又た坐敷の中に、同じ敷物敷きて、同じく我面見やりながら、大盃を傾け居るは、正さしく是れぞ若菊君の御話しに聞ける、大勝が倅の半之助と云ふ奴なるべしと心の中に思ひながら、平然として少しも驚ず、清一「當藩中の御指南番をも勤めらるゝ山井殿が、下郎に聞かせん爲めの武藝の御物語とは、勇者の勇に恐れて、尋常の職ひは能もなし得ず、臭怯にも陥井を設けて、其中に陥れ、然も多人數折重なつて、漸く一人を捕ふるやうな御物語りか、サテも笑止な御物語り……、町人なれども驍の清五郎、まだ此のやうに臭怯未練な武藝話、今まで嘗の一度も聞ひたことなければ、亦た嘗の一度も見たことでざらぬ……、今日態々御使者を以ての御口上、武藝話の物語らんに、暇あらば爽よとの御意は、此やうなことか、サテも〳〵思ひもかけぬ笑止な始末……、貴公さまには左程に此の素町人の清五郎奴を、恐ろしと思はるゝか、山井策馬と云ふては、近國に并びなき武藝の達人なりと聞さしに、聞くと見るとは大違ひ、人の噂さと申すもの、眞個に當てにはならぬもの……、笑止千万、清五郎今更御くやみの申上げやうもござりませぬと、云ひ了はりて呵々と打笑へば、山の井赫と急立ちて、一默れ〳〵、口が横に裂居るからと云ふて、云ひたい儘の悪口造言、今一言云ふても見ヨ、其舌の音を止めて呉れるは、清一「舌の音なり息の音なり、止まらば美事止めても見ヨ、此清五郎が六尺の身躰は、鐵と石とで出來上つた堅固な身躰、豆腐に似たる貴公さまの、お腕前では慄りながら及はぬ」山の井は此一言に腹へかねて、思はず腰なる一刀の柄に手をかけ拔かんとせしが、漸くにして堪へ忍び、山「和郎氣が狂うたと見へるのう、余を誰

とか思ふ、勿体なくも殿さまに、御手を取ての指南番、山の井策馬なるぞヨ……、先づ其れよりも和郎に向ひて、些と尋ねたいことがあると、云ひかけて吃度威儀を正し、山「和郎千本松原千丈藪とて、當城下の南に、寥しき街道あるを心得居るか」、清五郎は色をも變へず呵々と打笑ひて、清「御指南番か惣南蠻か、但しは鳴南蠻の大將かは知らぬが、去りとは馬鹿氣た御尋ね、朝夕通ふ街道を、知いで何と致さうや、」山「去らば問はん、和郎何時ぞや彼の千丈藪の林の中にて、多くの武士投げのけて　一個の若男を助けたことがあらふがナ……」、清五郎は愈々高く笑ひながら、清「憶病未練な貴公さまなら、狐に嵌されて其やうな妙なこと、御覽なされたことあるかは知らぬが、憚りながら此清五郎は、朝夕彼の街道、通りは通つても、まだ其やうナ馬鹿な目に逢ふことはでざらぬ」山の井は訝かしげに首傾けしが、再び吃度清五郎が面を見詰めて、山「然らば和郎は此城下の北に當る、山城街道は明神の森にて、此頃人殺しのあつたを見ざりしか」、清兵衛は益々高く笑ひながら、清「話は聞ひたが見には行かぬ……、何をお尋ねかと思へば、サテ埒もないことばかり、南蠻殿の御氣量は、流石に驚き入り申しと……、シテ其やうな事を聞ひて、何となさる」、山の井は愈々不審の眉を顰めて、山「然らば和郎は備前屋莊兵衛を承知致いて居るか、」清「如何にも……」　山「菊次と申す素丁稚は……、」清「サテ色々なお尋ね、彼奴を知らいで何とせう……、彼奴は二三年前、吾を俠客と思ふて身を寄せた天竺浪人、今は何處へ逃げ失せ居つたか、主人の金をチョロまかして、行衛知れずとなりおつたれを、元はと云へば恥か

しながら、此の吾が口入れをして世話した人物、其れが又た何と致した」、山の井暫し疑惑の眼を凝らして、清五郎が顏を見詰め居りしが、稍々ありて後の方を振返へり、牛之助に打向かひ、山「牛之助殿、今此奴が返答では、如何やら彼奴が一味でもない容子、つや〳〵以て合點が參らぬ、何と致したものでござらふのう、」牛「拙者とても同じこと、つや〳〵合點が參り申さぬ……、斯なされて如何でござる、彼の莊兵衛夫婦を詮議の致いて、露子の行衛……　イヤナ、彼の菊次の行衛詮議の致いて、其上にて此奴の吟味を……」、山「如何さま其れがよろしうござる、是りや清五郎、其方には些と吟味の子細あつて召捕たのじゃが、今は詮議の致さぬ……、吟味の日まで、入牢申付くるぞヨ……、其れ各々、裏なる小屋に其奴を其儘、お引立て下され、但し詮議の遂ぐるまでは大事の囚徒、殿重に縛め置き、見張り万端手落ちないやう……」、一同「かしこまつて厶りまする。

第三十二回

臭怯な奸計の罠にかゝりて、山井策馬が屋敷の裏手なる、物置小屋に繋がれたる清五郎、鬼と呼ばれし身も七重八重に縛しめられては、身動きだも叶はず、窓漏る月の影冴へて、虫の音の舟には耳に入るものなき夜半の景色、見れば思へば罪ならぬ罪に縛められし身ならずとも、なぜかは今昔の感に堪へん、況してうき世の憂を背め盡して、前途遙かに大海を懷く身の上、狹からぬ胸も千々の思ひに搔き亂されてや打嘆り、晴れ渡る大空の眺め恨めしう見らるも道理かや。

先君世に在せし折は、誰れあらふ松平家の奥家老、若徒館持供廻り幾人か從へ、乘物にて登城せし身の、今の此のざまは何事ぞ、是れにつけても御いたはしさは菊若さま、人に似て獣に同じき隠岐守様の奸計にかゝりて、先君世を捨て玉ひし後は、御身の爲めとは申しながら、金屋瑛障の窟を逃れ、蓬生深かき山里の草の庵に育ち玉ひ、まだ二十にもならせ玉はぬに唯一日とて御心安らかに過させ玉ひしことなく、憂ことの數々嘗め盡して、今も尚は猿鳴く嵯峨野の奥に世を忍びて、恨みを呑みつゝ日を過させ玉へる御心の中、察しまつれば吾骨身も碎くるが如き心地ぞする、妹貞心炎禍に死せたる後は、唯此の清兵衛が御力草、思慮淺く、才學なきに世に遲れて、益にも立たぬ此身を頼みとして、這度此大和に立返へる折も、忽体なや遙々村端れまで見送らせ玉ひ、向途は敵地、誤まりて敵の毒計に當てられな、時は不順の夏の天、誤りて時候に當てられな、天地濶く人多けれど、吾は唯汝一個が頼みぞやと云給ひし御言の葉、豫て骨肉に刻みながら、今淺ましくも敵の毒計に陥りて、明日をも知れぬ露の命、不幸にして非命に死することゝもならば、如何ばかり嘆せ玉はん、才智優れ、文武の道世に比びなき方さまなれば、吾あらずなるとも、御志堅を遂げ玉はん折あるは、必定なれど、御力落しのほど察しまつれば、老の坂上り初めし命すら、最惜しき心地こそすれ、竹庵策馬か口より漏れし、隠岐守様の毒計、豫ねて察せしに違はぬことはさらなり、露子が身の上、莊兵衛夫婦がことは、ハヤ御許に知らせまつりぬ、事に依らば再び此大和に歸らせ玉はんも知れず、若し歸らせ玉ふと、我身の果てを聞せ

玉はんには、如何ばかり嘆かせ玉はん、今より思ひやりまつるだも尚は地ゐられぬ心地ぞする、莊兵衛夫婦は何をせしか、吾れ此家に捕はれてよりハヤ三日、疎さは疾くに耳にしつらむ、若君の御許に早ず馳なと差立てゝ、驚かせまつるやうなことはあらぬか、露子は何とかせし、此屋敷に捕はれしことか、よく〳〵若君の御身を戀ひ慕まつれば、こそ、弱々しき少女の、恩恵深き両親さへ振捨てゝ遙々山城まで御跡慕ひまつらんとは思ひ立ちたるならんに、思ひやれば現にいたはしき限りなり、是れにも增して御いたはしきは、貞松院尼公、茲五年越し、同じ土地に同じ空眺めながら、敵に覺られんことを憚りて、思ひながら伺候もせず、如何に御慕し遊ばすにや、其れも是れも其原因問ひ尋ねれば、皆なを是れ人に似て人にあらぬ隠岐守さまの御心と、其を助くる大膳等が爲せる事に出でたり、ア、何れの日か此の仇敵に酬ひて、恨みを晴さんと、切齒みして絶身に力を込むれば、七重八重に纏へる縛めの荒繩も切れんばかり。

果ては思ひにつかれて、眠るともなくツイうと〳〵と、靡めば、朦朧として目前に現はるゝものは、其壯かりし時、都に旅寐して契れる女の姿、アラ珍らしやと辟かくれば、莞爾に打笑みて、貴郎俤にも何時も御變りなうと、慇しげに答ふ、如何して茲へはと問ひ返へせば、愁然として、御種を身に宿し、君に能く似し男の兒を生みながら、別れまつる折に、一生の別れぞと云玉ひし御言葉の鎖に縛ばられ、尋ねまつらんよしもなく、長の年月、今日が日までは地へ忍びしも、餘りの繼しさにと、口籠り勝ちに

答ふるさま、四十に近き女にはあらで、昔し見し儘なる十七八の、花班かしき少女姿、あやしや其人のみならで、吾すら何時しか部屋住みなりし昔しの姿に立返へりぬ。

夏なれども、窓もる夜半の冷やかなる風簾を襲ふに、不圖眼を開けば、女の姿は何時しか消へて、身荒縄に七重八重、縛められたる儘小屋の柱に繋れたり、心疲るれば思はぬことさへ夢に見るもの、ながら心耻しと　獨語ちて四邊見廻はせば、月は何時しか雲に隠くれて暗淡たり。

折しも今まで鳴き渡れる虫の音俄かに休みて、人の跫音近かく聞ゆぬ、サテは山井……、寐首切ん爲めか……、闇撃にせん爲めか……、斯夜更けに忍び來ることはあらじと、清五郎眼を見張りて、破窓の間より屹度外面を打見やりぬ。

第三十三回

あやしき人の跫音に、清五郎眼を見張りて窺ふとも、知るや知らずや戸の外より、「清五郎殿、目は覺めてか、目は覺めてかと、聲を盜みて呼ぶ聲、如何やら聞慣れた聲なりと、清五郎心の中に思ひながら、「何人でござる、目は覺めて居ります」「イヤ其れは幸福、忠藏でござると云ひながら、入口の戸前、忍び嚙ちに捻ぢ切る音。

忠藏とは此三日越し、吾爲めに三度の食を運べる、彼の年少なる下僕、悪人の家に使はるゝ者にしては、似合しからぬまで忠實なる男なり、彼の男此夜更けに、何とて吾を呼び起せしか、其上ならずいつも山井自ら下す此錠前を、捻ぢ切らんとすること、慾以て合點行かず、表面は忠實に見へても、油斷ならぬは人心、善か悪か、吾身の末は斉も如何にと、清五郎思ひ惑ひて息を呑み、其なんやうを窺ひ居る中、やがて錠捻切りて投げ捨てながら、忍びやかに戸を推し開けて入り來るは、正さしく忠藏に違ひなけれど、其姿は両刀腰に身輕く扮裝ちたる立派な武士。

忙はしく清五郎が縛めの縄解き捨て、驚き惑ふ清五郎が面打見やり、「怪しみ玉ふは道理なれど、吾は元より山井が腹心のものにあらず、子細ありて三月ばかり前より此屋敷に拳公せしも、最早一分時も此屋敷に居らん心地はせず、今此屋を立退く序に、山井が爲めに大事の囚人なる、和郎を助くるも譯あること、去れど此處にてサカ〳〵語り居らんには、時刻移りて見咎められんも計られねば、一先づ此處を立退きて、何處か人目にかゝらぬ寥しき所を選みて。御物語りの仕らん、斯く云ふ間も心が急く、疾く立ち玉へと云ひも了はらず、傍より取出す赤銅造りの一刀、「是れは和郎の腰のものなり、人目を忍びて取出したるもの、イザ受取り玉へと、殘る方なき人の眞實に、清五郎は今更夢に夢見し心地して、茫然たりしが、ハヤ疾々と急き立つる忠藏が言葉に、兎角云はん暇もなく、悲しく推藏さて、渡されたる一刀腰にプッ込み、導かゝる儘に忠藏が跡に從ひ、裏手の方より壁乗り越へて立出づる空は何時か打曇り、雲に隠るゝ月黒ろし。

定ること三町餘り、林繁き觀音堂あり、茲にて忠藏足を止めしが、部かに清五郎を見返へりて、「吾

れは、是れより一先づ都の方に立去らんと思ふが、和郎は如何せらるゝ所存か……、兎も角此邊にて袂を分たにやならぬと思へば、一と通り子細をお話し申さん、清五郎は恭しく一禮して、清「お顔を見知れるも僅かに三日、其れさへ親しく、お言葉を交せしと云ふにもあらぬに、飽くまで厚き思召、何とお禮を申して好いやら、清五郎は唯夢のやうでござりまする、忠「イヤ其樣に丁寧な御挨拶では痛み入る……、先づ兎も角もザットお話し致すべしと、清五郎を杉の切株に腰かけさせ、已れも傍の石に腰打ちかけ、忠「吾身は過刻にお話し致せし如く、元より山井が家臣にあらず、些と子細ありて彼の屋敷に奉公の致せしものなるが、始めより山井をば、好からぬ人とは思ひながら、實に彼程の惡徒とは思はざりし、何罪咎なき和郎を、卑怯にも陷井の奸計以て搦め取りし上に、彼奴尙ほ飽き足ずや、昨夕味方の惡徒どもを語らい、無法にも何の罪もなき、莊兵衛夫婦を切害し……、清「ナヽ、何と仰せられまする、ソヽ、其りや眞實のことでござりまするか、忠「何とて虛言詐りを申さうや、其れ故にこそ拙者も、今皆限りに彼の屋敷を立退く所存を定めてござる、清「エヽ、エヽ、エー、是りや斯やつては居られませぬ、眞平御免と云ひ敢へず、貞色變へて立上がれば、忠「藏忙てゝ袂を引留め、忠「血相變へて何れに行かるゝ所存なるや、清「何をお隱し申さん、莊兵衛事は吾倆が爲めに、身にかへ難き大恩人、其大恩人を彼奴等が、非道の刄に打果たされ、如何マアおめ〳〵此儘に濟まされませうや……、是れより直ぐに立返へッて、山井始め一味の奴輩、殲ろしにする所存でござる、忠「開けば御尤もなことではござれ

ど、彼方は多勢此方は無勢、清「假令ひ幾百人あらふとも、高の知れたる蟲奴等、殊更今より打入らんには、時刻は好し油斷は必定、忠「何事も御存じなければ、然考へらるゝも尤もなれど、彼方には疾くより準備が致してござる、清「ナヽ、何と仰せらるゝ、忠「陷井の奸計以て、和郎を捕へし其夜より、數多き子分の者が、打入るは必定と、警護の爲めに人を增し、其上ならず諸所方々に、陷井の設けあり、案內知らぬ身を以て、妄りに彼處に立入らんは、薪を抱ひて火に投ずるに同じこと、最も危きことならん、眞實如何でも彼の屋敷に、打入る骨殿の所存ならば、惡人ながら假令めにも、主從となつた山の井刄を以て力を添へんは、吾儕に於て忍びぬを、屋敷の內外の案內だけは、貴殿の義俠の心に愛て、吾案內の仕らん、清「殘る方なき御懇情、何と御禮の申さうやら、清五郎骨身に刻みて忘れ申さぬ、忠「兎角云ふ間に時刻移らば一大事、夜明けぬ中に……、清「サラバ御案內願ひまする、兩個打つれ立上れば、ハヤ一番鷄の鳴き聲遙かに聞へたり。

第三十四回

殘燈影暗らく、四邊寂然たる山井策馬が寢所の中、何れより忍び入りしか、スックと立ちたる大の男、地白の縮緬に、紺にて三柏を染め抜きたる單衣の裾を高く端折り、荒繩以て襷十字に綾取り、赤銅造りの一刀右手に打振りながら、靜かに熟睡せる山井が、枕頭近かく立寄りしが、やがて毛脛を揚げて枕を丁と蹴返へしながら、聲銳く、「山井策馬、イザ尋常に立上がりて、莊兵衛夫婦が爲めに仇を酬ゐ

清五郎が、恨みの一刀受けよやと、罵りながら二三歩三歩後に下りて身構へするは、疑ふ可くもあらぬ

醜の清五郎

意外の事に夢破られて、驚きながら跳起きたる山井筑馬、「推参なり下郎奴、仇呼ばゝり奇怪至極、其處動くなッと云ひも敢へず、枕刀を取るより早く、抜打に足を拂へば、清五郎は躍り上りて身を避けながら、清「何時も變らぬ臭性な奴、慈悟のせヨと切下す此方も山者身を開きて空を打たせ、隙を窺ひ横に拂へば、ナニ小癪なと鍔端にてガッキと受止め、引くをも待たぬ片手打、流石武勇の山井も、肩先深く切下げられ、たじ〳〵と後退りして、倒るゝ如く後の壁に身を寄せしが、及ばぬことゝや思ひけん、心の限り聲限り　各々出合ひい〳〵出合ひい〳〵、曲者あり曲者ありと呼び叫ぶ　左れども茲は母屋に離れし離坐敷、折しも夜更けて人皆な睡り入りたることなれば、誰一人として出合ふ者なし、唯同じ衾に臥したる山井が妻、の今方恐れ慄ひながら側い出でたるを認めしかども、清五郎は山井と、火花を散らして戰ひ居たる折からのことゝて、詮便なく見逃せしが、若し彼奴母屋の方に逃れ行きて助けを呼ばんには面倒なり、イザ此隙にと、更に勇氣を激まして、身を逃れんと心を急る山井を追ひ詰めて、唯一刀に首打落としぬ。

其時清五郎は、山の井が寢衣の片袖拔切ぎり、其生首を包みも敢へず、慌に確と結びつけ、血刀引下げ樣側より、ヒラリと庭に下り立てば、昼しや此處に女の亡骸、合點行かずと雲間漏る、月の光りに透し

見れば、さきれもあらぬ是れぞ是れ、少時前一室を逃れ出でたる、山の井が妻なるに、愈々訝かり怪しみながら、四邊靜かに見廻はす折しも、傍の庭の植込より、現はれ出でし一個の男「清五郎殿、御不審には及ばぬ、其奴は拙者が刺留めてござる、清「ヤ、貴殿は忠藏殿、忠「如何にも忠藏でござる、最に屋敷の案内致せし後、獨り裏手に退さしが　何となく心掛りに堪ゑられねば、其儘再び取て歸へし、茲まで忍び返へれる折しも、一室を覗いでる女の姿、此奴助けを呼ばんには、御身の上の一大事と　物をも云はず拔打ちに、首打ち落し能く見れば　策馬が妻の毒婦なり、功太刀せまじと思ひしことも、今は空……、清「遺る方なき和君の助力、清五郎身に染みてありがたく存じまする、忠「イヤお禮には及びませぬ……、最早仇敵の頭領たる、山井奴をお打ちなされし以上は、蟲同然の門下の奴輩、お殺しなさるも無益の殺生、此儘か立退きなされる方よろしからんと存じまする、清「如何にも御意の如くでございますれど、些當屋敷に尋ねたきものもでされば……、忠「何と仰せられまするな、清「餘の義でもございませぬ、莊兵衛が娘に醫子と申す女　確かに此屋敷に捕はれ居る筈　吾身が茲へ踏込みて、甲斐なく陷井の奸計に陷りしと云ふも、元はと云へば其娘取返へさん爲めでござれば……、忠「其娘御のことでござれば　拙能能く存じ居りまする、清「ナニアノ其娘のこと御存じとナ、シテ何處に押込められ居りまするか、忠「其娘御ならんには、當屋敷には居られませぬ……、實は今より四五日前、半之助とか申す若侍士相見へたる折の山井の話に、其孫と申すは、彼の竹庵とか云ふ御殿醫が、其別莊に欺き伴ひ

たる甲斐なく、警護の奴等の目を盜み、何處ともなく逃亡せしとの事にて、山の井が其別莊に尋ね行きたる折は、足跡も分らざりしとの事、左すれば當屋敷に居らるゝ筈なく、又た是れまで拙者左樣な年齢の女、其影だも當屋敷に於て見しことなければ、山井奴が話、ヨモ詐りにはでざりますまい……お尋ねわるども甲斐なからん」、清五郎は始めて疑ひの眉を開きて、「サテは左樣にでざりまするかトモ知らずして今が今まで、當屋敷に居ることゝのみ思ひ居りしは、返へすゞも殘念千万、去らば御意に從ふて、一と先づ此場は此儘に落のび申さんと、語らふ折しも母屋の方に、俄かに聞ゆる太刀打ちの音、呼び叫ぶ聲、清五郎忠藏は意外の事に、思はず躍り揚つて屹度其方を見詰めたり。

第三十五回

母屋の方にあやしき物音聞へしかば、清五郎忠藏の兩人は、心の中に怪しみながら、何者なるかは知らねども、兎も角も茲にありて、見咎められんは面白からずと、互みに微音さ語らいて、庭なる植込みの中に身を避け、容子如何にと窺ひ居る中、其物音は愈々激げしく、打合い打合い入り亂れて相戰ふが如く聞へしかば、清五郎忠藏は、益々怪しみ訝りて、思はず互みに眉打顰め、今點行かずと微語さ合ひ、尙ほも容子を窺ひ居るこゝ稍々暫し、忽ち其騒ぎは止みて、忽ちあとは寂々寥々。

折しも母屋の方なる雨戸蹴破り、現はれ出でたる十四五人の人々、見れば怪しや眞先に突立ちたるは前髪立ちの若侍士にて、後に續くは孰れも華奢なる樣を拔きたる、白地の單衣を身に纏ひ細帶十

字に綾取り、手に手に一刀を拔き持ちたり。畢竟山井奴は奥の一室、イザ踏込んで首打たんと、口々に罵りながら、此方を指して來る容子。

此時清五郎は殘月の光りに透し見て、「ヤ、若侍士の前に平伏して、勇める聲も嬉しげに、「若君さま、菊若さま、如何して是れへはお越し遊ばされましたか」、菊「ヤ、和郎清兵衛ではないか、嬉しや無事で居やつたか」、一同「ヤ、親分、オ、親分、サテは御無事でござつたか……」、菊「トモ知らざれば今が今まで、和郎は山の井奴が毒刃の下に斃れしことゝのみ思ひ居つたが、嬉しや無事であつたヨナア、シテ如何してマア無事に其身を逃れしか」、一同「嬉しきにつけ其子細吾儕一同も聞きたうでざる、清「其御不審な御尤も、然らば吾身より先づ其子細語り申さんと、彼の植込に忍び居る忠藏を招きて、其助けに據り身を逃れたること、又た山井を刺殺したること、子細詳に物語れば、菊若は喜びに堪へず、忠藏に向ひて厚く禮をば述べたる後、菊「然らば吾れも物語らんと、靜かに口を開らきたり。

「扨も菊若が今茲に、清五郎が子分の者ども引率れて、此屋敷に亂入せし子細を尋ぬるに、過ぐる日清兵衛の清五郎より、飛脚を以て松平隱岐守が、菊若の父なる大和守を毒殺したる証據、竹庵が言葉に依りて明白になりたること、山井奴が竹庵を切害せしこと、醫子竹庵に拐帶されたること、更に山井に拐帶されたることなど、事細かに申送りしに、菊若其書簡讀みも了はらず、或は喜び或は悲しみ、

或は驚き或は憂い、果ては思ひに堪へかねて、嵯峨野なる彦七が家を立出で、獄かに清五郎が家に忍び歸へりしに、思ひきや清五郎は、山井が屋敷に捕はれの身となり、其上ならず莊兵衛夫婦は何者に殺害され、其家財は無慘にも、國守の舘より沒收されたりとの噂さを聞き、大概ならず悲みしも、素より高づ思慮深き菊若、斯く女々しう嘆き居るとも、捕はれたる人の歸へるにあらず、死したる人の蘇生るにあらず、寧山井が屋敷に切入り、清五郎を救ひ出さんものと思ひ定めたる折しも、清五郎が手分の面々も、或は探りを入れて山井が屋敷の容子を探り、或は人を走せて街衢の風聞を聞き糺すなどして、同じく清五郎を救ひ出ださんと、策畧を廻らし居たることなりしかば、誰れかは猶豫すべき、皆な菊若の意見に同意し、孫て探りを入れて、陷井のこと、醫護のことなど聞き置きたるを幸ひ、此夜深更に打揃ふて、斯くは此屋敷に忍び入り、寢惚眼に立騒ぐ醫護の武士等を切殺ろし、今しも山井が寢所を目がけて、踏入さんとはなしたるなり。

菊若口を開きて仔細詳さに語るはそに、清兵衛は云ふも更なり、傍聞する忠藏も、思はず感涙に咽び、暫しは言葉もなかりけり。

第三十六回

其時菊若は再び口を開きて清五郎に打向ひ、曰「莊兵衛夫婦が横死は悲むに餘りあることながら、最早當の仇敵の山井叔は、和郎の手に打果して、彼が惡を助けたる惡漢等さへ大概は切捨てたれば、恨

みは爰に曙るに傷たれど、只心掛りは露子が身の上、莊兵衛夫婦が輕からぬ恩誼を思はんには、心の限り手を盡くして、其行衛を尋ね捜さねば相濟まぬことなるが、何と致したものであらふな、」清「仰せの通り、此儘に打捨て置かんは、莊兵衛夫婦に對して相濟まぬ次第でござりますれば、如何やうに致しても、露子が行衛相尋ねゝばなりませぬが、爰に忠藏殿の話に依りて愚考仕るに、彼の夜露子は惡人輩の手を逃れて君の御跡を慕ひ、山城さして赴きしに相違なきことゝ存じますれば、幸ひ途中に難なくば、嵯峨野なる彦七が許に若きし筈、左れど君彼處に御座ある日は申すも更なり、這度此地に御越しの途中に於ても、其影だも認め玉はぬこと是れ不審の一ッ、かよわき女の一人旅、最愛東なき儀でござりますれど、兎も角も子分の者を、唯今是れより嵯峨野に向けて出發せ、容子を探らせまするでムりませう、」「如何にも其儀よろしからん、好きやうに取計らい呉れ……、去るにても吾儕の進退、何と致したものであらふ……、兎も角も一藩の指南番たる山井が屋敷に亂入し、斯く殺生を致せし上は、其詮議の嚴しさは必定なり、左ればと云ふて遠く此地を離れんは、万づにつけて便り惡しゝ、何と致したものか、且つ其詮議は吾儕のみならず、此處に居る和郎が子分の者どもの身の上にもかゝること……、」清「如何にも仰せ御尤でござりますれど、斯く多人數にて詮議嚴しき此近傍に世を忍ばんことは、容易の業ではでざりませぬ……と、流石思慮に長けたる清五郎も、腕こまぬき思案に暮るゝに、傍聞きせし忠藏は、躙かに身を進めて、「其事ならば好き場所あり、此城下より五里

ほど北の山中に、青松寺と云ふ山寺あり、其處の住持は瑞測と申す老僧にて、元都の去る寺に居りし人にて、拙者幼少の節、手習ひの師匠と御ざし人なり、此城下に出でらるゝには、万づ便悪しけれども道程は僅かに五里、且つ寺は山中に似合はぬ大寺なれば、二十三十の人を容るは容易のことなり　御障りもなくば拙者御案内の仕らん」、菊若清五郎は滿面に喜びを湛へて、菊「扨は實に風竟の場所なり、御迷惑でも忠藏殿に御案内を願ふて、暫し其寺頼まんは如何に……」　清「仰せの通り、扨は實に風竟の場所と、云ひかけて忠藏が方に打向ひ、清「何から何まで御世話に相成ること、返へす返へすいたみ入た次第では厶りますれど、御障りもなくば、御案内の願ひまするでござりませう、其れにつけても斯くまで厚き貴殿の信義、何時さでか拙者主從の本名を隱すべき、是れに在す若殿はと、云はんとするを忠藏傍かに押止め、忠「其御心配ひ御無用なり、兎も角も茲は敵地、其中に夜明けんには一大事なり、御詞しは一先づ彼處に落ち着きたる上にて、もるゝ、承はり申さん……と云ふに、清兵衛は更なり菊若も、思はず感嘆の聲を發して、菊「然らば御案内の願ふて、其れなる青松寺どやらに、一と先づ落ち行き、其上にて更に談合の致すべし、其れにしても和郎が子分の面々は何とする心か、能く問ひ尋ねて行かんと思ふ者は伴ひ行かんと云ひ玉ふに、清兵衛心得て一同に向ひ問ひ尋ぬるに、皆なもろともに、相叫ふ義に候はゝ、御伴仕りたしゝ答へたり　去らばとて菊若立上り玉へば、清兵衛忠藏子分の者ども、皆な其後に附隨ひ、忠藏が案内するまゝに、山井が屋敷を立出で、城下外れより

山路さしかゝれる頃、夜はいつしかに明け離れて、東の空に旭日昇りぬ。

第三十七回

老松古柏生ひ茂れる山峽に、青松寺と呼ぶ大伽藍あり、茲の住職瑞圓と呼ぶ老法師の情に依りて、此程より奥の一室に逗留するは、菊若清兵衛主從と、彼の忠藏にて、同じく伴い來し清兵衛が子分の壯丁十四人の中、心利きたる二人の壯丁は、彼の醫子が行衛を搜す為め、都鹿峨野の奥なる山里の、彦七が許を目的に出發せ、尙ほ又た八人の壯丁は、夫々姿を變へさせて、城下の中に入込ませ、城中の容子を探らせければ、爰れるは四個の壯丁、這は城下と茲との間を往來して、八人の者どもの探り出せることを、知らする爲めの用をたすめり、左れば人里遠き山寺なばら、菊若清兵衛等は、城下のことは日に日に手に取る如く聞くを得たり。

或る時清兵衛は、彼の忠藏に打向ひて、清「是れまでは用繁くして、拙者主從の本名、打明けて御詞しの致す暇なかりしかども、今は何をかお隱し申さん、是れに御坐ある若殿は、當國の先殿、大和守様の御嫡男にて、亦た拙者は、身不肖なれども奥家老の職を勤めし、桂清兵衛宗信と申す者と、先づ其名を名のり更に言葉をつゞけ大和守毒害せられ玉ひしことを始めとして、貞心尼がこと、薩峨野のこと、壯兵衛夫婦のこと、醫子がこと、千本松原の事、千丈藪の事、明神森のことまで、漏れなく物語りて、更に屹度形を改め、右の次第なれば、當國今の大守、松平隱岐守さまと申すは、若殿の爲めには正しく叔

千代姫
桜草菊若
此画は本文に

雨路子

父御に當らせ玉へゞ、又た正しく俱不戴天の父君の御仇なり、吾儕主從膽を嘗め薪に臥し、幾層々苦勞も厭はずして、竊かに城中の容子を探るも、全く一には此仇を酬ひ、二には御家系正しき若殿の御治世になさんことを願へばなり、今城中を見廻はすに、先殿の御恩を忘れぬ忠義の武士なきにはあらねゞ、先殿逝去り玉ひしは、隱岐守の陰謀に出でたりと云ふことを、知る者一人もなければ、隱岐守を捨てゝ若君の爲めに御力を添へんと云ふ者、亦た一人もなし、去ればとて眞實を告げて語らはん便りもなければ、今は此の忠義の志望に厚き武士等も、吾儕主從を疎々しうや思ふらん、御家の重寶、御系圖の一卷も、同御重代の寶たる、天國の一刀も、若殿御所持在ませば、其を携へて柳營御所に訴へ出で、んには、或るは勝利となるやも知れねゞ、利にのみ走る當世の人心、奸智に長けたる隱岐守殿主從黄白を御として有司の心を釣り、思ひもかけぬ所より、若殿を非に陷さんには、其れゞ若殿の御身の一大事なり、夫れ是れ思ふにつけ、柳營に訴へ出づる心も失せ、今は唯機會を以て、隱岐守殿を刺さんと思ふのみなり、武藝力量尋常ならぬ、和君の如き英雄を味方に得んには、若殿の御喜び如何ばかりならん、其れにつけても何ひ度きは貴殿の御素性、素孰れの御藩にして、如何なる仔細ありて、此國へは來玉ひしかと、小膝を進めて問ひかけたり。

時忠藏容を改め、「サテハ思ふに違はず松平大和守樣の御嫡男、菊若公と音に聞く、鬼桂の清兵衛どのにて在はせしか、拙者山の井が家に下郎たりし時、驛の清五郎と云ふ奴は、其面に見覺れぬ無

こそあれ、如何やら峨嵯野にて影を隱せし、鬼桂に似たり、又た莊兵衛が家の丁稚菊次と云ふ奴は、同じく嵯峨野にて取逃したる、菊若丸に違ひなしと、山井が物語れるを聞きしことあり、故由ある方々なりとは思ひながら、確と承はりしは今日が始めて、今は何をかお隱し申さん、拙者事も其原因を尋ぬれば、御家には多少の緣ある者……、菊若清兵衛は驚きながら貞見合はせしが、清兵衛は言葉に力を入れて、「ナ、何と仰せらるゝ……、御家に御緣ありとや……、扨は眞實にて候か……、そゝ其は眞實にて候か、」「ナニ詐はりを申すべき、事長くとも一と通り、其子細お聞き下され、拙者が母と申すは、素都祇園に名しき舞妓なりしに、一年松平大和守樣御上洛の折、其御近習の若侍士にて本名は何と云ふやら打明け申はざりしとの事なれども、月と呼ぶ人と怪しき契りを結び、もくりなく其人の種を身に宿せしに、生れ落ちぬ前に其人は、大和守樣御歸國の御伴して、歸へらるゝことゝなり、別離の夜に短刀一振と、黄金許多與へて、行末遂げぬ契り、今までのことは無き世の夢と斷念めよとすげなくも引留むる袂振拂ひて、出立れしが、一生の別離にて、其後月滿ちて生れしは乃ち拙者なり、十歲になれる時、月と呼び玉ひし我父の事を聞き、始めて我身の素性、下郎の種ならぬことを知りし時の驚れしさ何にか譬へん、其れより手習ひ學問に、志を立て、傍ら武藝に勵み居る中、拙者十七歲になれる時、母は世を去玉ひぬ、斯く申せば何とやらんおかしけれど、我母と云は、名しき勤めの人なりしに似ずやらで、心男々しく、品行正しく拙者生れし月より、舞妓の業を廢て、我父なる人より與へ玉

ひし黄金と、年來積み玉ひたるものを資本として、商賣を始め、其利に依りて拙者を育て玉ひしことなれば、世を去り給ひし時も、尚ほ多くの黄金を遺し玉ひぬ 拙者其後都にあること三年、夫れより近くの國々を巡歷りて、此大和に來しは今年の春のことにて、其本名さへ明し玉はぬ父上、其御在家尋ねまつらんやうもなけれど 万に一つ見參の折もあらふかと、果敢なきことを頼みとして、松平家の瀧中と聞くもゆかしく、其人の善惡さへ問ひ定めず、彼の山の井が屋敷に奉公の致せし次第でござると、語る始終の物語りに、菊若清兵衛 深く其孝義に感じ入りしが、中にも清兵衛は甚く驚ろけるもの丶如く、吾れを忘れて忠藏が面を見詰め、 清「シテ和郎の母御の名は何と云はれまするかと聲震はして尋ぬれば、忠藏も清兵衛が面を見詰めて、 忠「舞子の頃は榮鶴と呼びしも、後は峰子……、 清「ナニ、何と云はるゝ、アノ榮鶴とや サテは和郎は我兒なりしか、嬉しや和郎は我兒なりしか」、万夫不當の鬼桂も、思はず眼に涙を浮べ、つく〳〵と忠藏が面を見詰め、暫しは續く言の葉もなし。

第三十八回

サテは我兒と云ひたる儘、後に續く言葉なく、茫然として忠藏が、面を見詰る清兵衛も、亦た餘りのことに胸を打たれて、驚きながら清兵衛が、面を見詰る忠藏も、見る目と見る目は是れ彼れ均しく、何時しかうるみて憐れなり、傍聞させし菊若も、只管驚き呆るゝのみにて、同じく暫しは默然たりしが、潮くにして清兵衛に打向ひ、 菊「思ひもかけぬ和郎の言葉、汗も此の忠藏殿と我兒と云ふは如何なる子細か、今まで和郎に兒あ丶とは、母上世に在せし折は云ふも更なり、嵯峨野を立出で丶以降唯の一度も聞きしことなきに、今日が日になりて去ることを聞くは、つや〳〵以て合點行かず、如何なる子細か物語りて、疾く我疑ひ晴せよがしと、言葉靜かに尋ね玉へば、清兵衛俄かに心づきて、 清「這は吾れながらオゾマシや、餘り不思議の對面に、思ひ迫まりて子細も云はず、我兒々々と云ひしこと、君は紫より和郎にも、左こそ不思議に思ひつらん、今は何をかお隱くし申さん、面なけれども其子細、お話し申せば斯くの通りと、語るを聞けば世はさまぐ、鬼と呼ばれし清兵衛にも、斯る事のあるぞおかしきと。

指折り數ふれば ハヤ二十年餘の二昔、清兵衛まだ清之助と呼びて、若殿大和守殿の御小性たりし頃のことなりけり、大和守殿都見物の折から其御供して、半年餘り京都に旅寐せしことあり、其頃はまだ心定らぬ少年の習ひとて、惡しき友に誘はれて、一二度島原の廓に通ひしことありしに、如何なる緣にやありけん、某樓の舞姫に、榮鶴となん聞へし美女と深しき交情となり、此方よりも慕へば、彼方よりも慕はれ、離れかねたる鴛鴦の、短き夜の鐘の音に、四ッの袂を絞ぼりしことも幾度か、去れど清之助は其年こそ若けれ、かねて思慮ある生れとて、斯くまで深う契りながら、其主君の名を汚さんことを恐れて、唯生國は大和、名は月と云ひたるのみにて、明白に告げ聞へず、榮鶴も亦た何か思ふ所やありけん 尋ね問はんともせず、唯月さま月さまと呼びて、桂にもかり淺からぬ、月は桂の隱語なり

と覺れるさまにも見へざりけり、日數立つはをに、榮鶴は見るものを思ふと、驚きながら或る夜清之助に告げ聞へけるに、清之助も大概ならず打驚きしが、他に詮便もなければ、唯好い程に慰め置く中、月日の走るは矢よりも早く、大和守殿京都滯在の日限も、ハヤ今日明日と迫り來りぬ、清之助は心も心ならねども、素より家の法の殿しさ上に、況して若殿の御供しての都上りに、斯ることありしと知れては、一大事と思ひければ、都出發もハヤ明朝と定まりし日の夕暮、窃かに榮鶴が許へ忍び行きて、泣き悲しむ女をすかし慰め、一振の短刀と、許多の黄金を後の形見に取らせ、尚は我再たび都に上るまでは、必らず我跡なを慕ふて、大和邊に尋ね來ることを相叶はずと、殿しく戒しめて袂を分ちしが、大和に歸へりて後、直ぐ音差汰せんと思ひし身も、間もなく父なる人世を去りて、其身は其跡目を相續することゝなり、思ひながら三年餘り音差汰なしに過ぎ去り、三年目の暮に僅かの折を得て、京都に上ぼり、島原なる榮鶴が許を尋ねしに、其人は行衛知れずとなりて、唯殘れるは二年ばかり前に、何人の種にや男の子を儲けしが、其後間もなく此廓を去りて、何方へか赴きしと云ふ噂さのみ、清之助の清兵衛は、一方ならず心を痛め、其行衛力の及ぶん限り尋ね搜せしが、絶へて其在家の知れぬに、今はとて思ひあきらめ、大和に歸へりしが、是れより公務の爲めに身を驅られて、忘れたりとにはあらざれど、再びは尋ねんともせず日を送る中に、大和守殿の御病死、御家の騒亂、若君の御供して城中を逃れ出でたる後は、再び思ひも出ださず今日が日まで過ぎ來しなり。

兒の日にも涙と云ひけん、万夫不當の清兵衛も、思ひかけず世に立優れたる我兒に、邂逅いたる嬉しさ物に譬へんやうなく、子細語り了はりて打泣けば、忠藏も唯夢の如く嬉しさに泣きぬ、両人の心察しやりては、菊若さへ同じ涙に咽ぶも道理、主人とこそ云へ血につながる人なるものを。

第三十九回

遠は吉野に續く山峽、巖石峨々と聳へ、聞くものとては峰上の松風、谷間の水音、見るものとては四面屏風の如き山影のみ、茲に土屏高く取廻らしたる屋敷あり、高閣に上ぼりて遥かに臨めば、松平家の天主臺、山間より見もれども、近傍には立ち上る煙だも見へず、這は是れ故大和守殿の奥方、貞松院尼公の憂世の憂に住み飽きて思ひにやつれし身の行末を、讀經の功德にたより玉ふ、扇山の山莊なりけり。

夕日の影に一層紅ゐの色添ふ楓の根元に、腰打ちかけし前髪立ちの容貌美はしき一個の少年、四邊見廻はしながら醉打ちひそめて、傍に餘念なく落葉を掃ふ、二十一二の若者に打向ひて、

菊　忠藏　今日はまだ清兵衛よりのたよりはないか。

忠　今日はまだ何のたよりもムりませぬ。

菊　サテは城下にも、何事も告げ知らせる程のことないと見へる。其れにつけても、爰へ來てから最早彼是れ二月餘り、彼の青松寺にありし頃、噂さに聞ひたとは打て變はりて、別に怪しき容子もなきは、如何なる譯にやあらん、無事平穏は嬉しけれど、邪智に長けたる隠岐守殿、奥に奥ゐる例もの方略、考へて見れば無事

平穩であるだけに、一層油斷がならぬ哩、忠「仰せの通り、好曲邪智の隱岐守樣、今は何事もございませぬと、中々油斷は相成りませぬと、云ひかけしがつく〳〵少年の姿を見て、忠「世が世であらば、天晴一城の御主人ともあるべき御身にてありながら、計畧とは申するものゝ朝夕馴れぬ御仕業かいたわしうございまする、菊「イヤ我身は幼きより山中に育ちしもの、別に苦るしいとは思はねども、和郎こそ吾れと劣ひて都に生立ちたる身の上、左こそ物凄く思ふならん、忠「這は勿体なき其仰せ、父清兵衛御傍にあらんには萬づ心づきて御不自由もさせまいすまいに、及ばぬ勝ちの身の不肖、嘸御面倒なことでございませう、菊「ナニそのやうな事があらふや、吾身はサテ置き、貞松院尼樣、父十御存世にておしまさば、斯る憂目は夢にだも見玉ふまじきに、召使ひの者さへ足らぬ今の御有樣、思へば思ふほど御いたわしい儀じやナア、忠「現在御子の貴郎さまが、茲に斯して尼公の御身の上を、守護し居玉ふよし聞かせ玉はんには、如何ばかりか嬉れしう思ひ玉ふべきに、其等のことは云ふに云はれぬ今の有樣、實に遺憾き儀でございまするとて、語ら、ふ折しも彼方の庭に人の跫音聞かふるに、両人は俄かに立上りて、右と左りに立別れて、素知らぬ貞に落葉を掃ふ。

是れなん菊若と忠藏にて、過ぎし日に忠藏清兵衛と、親子の對面なしたる後、忠藏は改めて菊若と主從の約束をなし、朝夕直實に仕へて、月日を送り居けるに、豫て城下に遣はし置きたる、清兵衛が子分の者どもよりの通知に、隱岐守殿を始め彼の大膳等、貞松院尼公を此世に活し置いては、万一菊若清兵衛の重代の家寶を携へ、柳營御所に訴へ出づることあらん折、何かの妨げなるべしとありて、密々に獄し奉らんとの内議あるよし告げ越せしに、汗は由々敷一大事なりと、三人頭を集めて相談を凝らし、乃ち貞松院尼公守護の爲め、菊若は名を菊平と改め、忠藏は名を忠平と改め、姿を變へ傳を求め、此の山莊に住み込みて奴となり、又た清兵衛は其面を見知られぬ爲めに、文身みしたる目の上の腫が、山井一家を斬りたる後に、却て仇となり、人目を避くるに便り惡しさより、獨り青松寺に殘り止まり、子分の者どもを指揮して、城下のことを探りては、日々山莊なる菊若が許に告げ知らせけるなり。

菊「是りや忠藏、誰れやらん跫音が聞へるやうじや、茲は吾身が掃除すれば、和郎は表を掃除せよ、何事も人目につかぬやう、心をつくるが今は肝要、忠「如何さま左樣でございまする、左樣ございさば若君さま……、イヤナニ菊平殿、菊「オ、忠平、忠「後刻寛々、両人「逢ふ哩」。

第四十回

忠藏の忠平が立去る跡を見送り、箒手にして菊若の菊平、庭の落葉を掃き掃ふ折しも、右の手に枝拔好き紅葉を携へ、左の手に鋏刀を持ちて、庭下駄の運びたはやかに、庭石傳ひに出で來る美女、年齢は十七八、匂ひこぼるゝばかりの愛敬は、月にも花にも譬へん方なし、かに菊平が方を打見やりて、

女「是れソコな奴どの、氣の毒なれど彼處に見ゆる紅葉を、一枝折て下されと、云はれて菊平吃驚し

ながら、振向く途端互みに見交はす眼と眼、菊「ヤ、和女は露子さの、露「オ、貴郎は菊若様、菊「是れ露高し露高し、實に思ひもかけぬ不思議の對面、露「おなつかしうございました、菊「先づ何より話さうやら、見れば如何やら此山莊に、露「ハヽ、アノ二月ばかり前より、御奉公致して居ります、其れよりもマア貴郎様には、如何して茲へ……、其れもマア卑しい今の其姿容は……、菊「是れには段々深かい行細のあることなれど、其れより先づ聞きたいは和女の身の上、何時ぞや出城へ來る途中、竹庵奴が爲めに欺むかれ、其別莊とやらへ誘はれしも、やがて隙を見て逃出したとのことであつたが、其れより後は行衛知れず、實は吾身は更なり清兵衛も、大概ならず心を傷め、今日が日まで油斷なく、和女の行衛を捜し居つた所でござる」、露子は恥づかしげにさしうつむきしが、漸くにして頭を上げ、紅らむ目元に菊若を打見やりて、露「何をお隱し申しませう、嵯峨野なる山奥に、貴郎様御不自由勝ちに御暮し遊ばすとの事承はり、御いたわしさの餘り、お傍に居て御介抱が申上げたく、我家を後に山城さして忍び行く途中、訪らず竹庵に出逢ひしに、夜道を行くは最危し、明日好き同伴者もあればと、好い加減に欺かれ、一度びは其別莊まで誘はれましたなれど、何となく怪しげなる竹庵が容子に、俄かに恐氣だち、油斷を見すまし其別莊を忍び出でしに、不知案内の處と云ひ、殊更夜道のことゝて、何時しか道を踏み迷ひ、夜もすがら彷徨ふ中に、其夜も明けて朝日東に上る頃、訪らず此の山莊の門前まで參りましたが、茲く心を痛めし爲めと、踏みなれぬ山路をさまよひし爲めにや、茲まで參りました折は、

胸心痛み一歩も歩もみがたく、涙ながら御門前の傍の石に腰打ちかけ、痛みを押へて居ります内、計らず此處なる女中衆の目に止まり、其れより尼公様のお耳に入りて、勿体なくも直ちに御屋敷に招き入れ玉ひ、それは〳〵言葉にも筆にも盡されぬほどな御親切な御介抱を蒙むりましたが、其れが御縁となりまして、尼公様の御許に召使はれまするやうになりました……と、云ひかけていつしかうるみし目元を袂にて拭ひ、再び言葉をつぎて、露「嵯峨野なる貴郎様の御許にも參りたく、又た此の山莊に居りますこと、父母の許にも知らせやりたいとは思ひますれど、大館隱岐守よりの御法度とやらにて、此山莊にては、人の出入は更なり、手紙のやりとりまで、詳しく隱岐守さまよりの附人に聞へ上げたる上ならでは叶はぬとの事に、毛を吹き傷を求むるやうなことになつては、貴郎様は申すも更なり、父母にも相濟みませぬと思ひましたもの、思ひながら今日が日まで、普沙汰もせず、涙に月日を送くつて居りました」、菊若は始終の話を聞き、愁然として目をシバタ、キ、菊「思ふにましたる和女の苦勞、素はと云へば此身もの、一層氣の毒なことに思ひまする、露「ナニを仰せられますことやら、茲親子が爲めには、貴郎さまは大事な御主君、何卒其やうなことおつしやつて下りますな……、シテ貴郎さまの此山莊にお出遊ばす其の子細は……、菊「左ればなり、其子細と云ふは餘の義にあらずと、四邊見廻はしながら物語らんとする折しも露子どの、尼公様のお召しでござりますと、綺けさまに呼ぶ女の聲、露子はハット胸騒かしながら、身を起して耻かしげに、菊平が傍に進みて、何や

ちん耳、うちし、後の方を幾度となく、殘り惜しげに見返へりて　呼ばるゝ方へと立去りたり。

第四十一回

松平隱岐守の姫君千代姫と申すは、御年今年十八歳、花の顏柳の姿、世にも稀れなる美人にして、書讀む道物書く業は申すも愚か、糸竹の調べさへ尋常の及ぶ處にあらず、其上ならず父君の奸曲たる質に引變へ、其天性温和にして、曲れるを憎み、直くなるを好み玉へば、日頃より父君の行はせ玉ふ所につきて、其道に違へることを嘆せ玉ふこと、夙からねを、年齢行かぬ女の身にて、兎角云はんは憚り多しと、何事も云はで日を過し玉ふ、隱岐守をのにもかけ換へなき一個子のことゝて、愛しみ玉ふこと大概ならず、殊に奥方此世を去り玉ひし後ちは、一層憐れなるものに思ぼして、愛しみ玉ひ、此頃の中に權家より、然る可き婿がねを貰ちひ受け、行末の繁昌を樂しまんものと、おさ〳〵心がけ玉ふばかりなれど、何事につけても義理堅き姫君の御心を憚りて、未だ打ちつけには語り玉はず。

心奸けし隱岐守に憚られ、玉ふはをの御心ばゑなれば、姫君は憂て其伯母君に當らせ玉ふ貞松院尼公の山莊にのみ引籠りて、日を送らせ玉ふことを世に悲しきことの限りに思し玉ひ、四季折々、彼の山莊に赴かせ玉ひ、六夜七夜滯留して、其憂を慰め玉ふことゝありけり、分て御逗留中の寢物語りに、菊若の上さへ事細かに貞松院より御物語りあり、世が世であらば和女の婿がねとして、大和二郡の大守として、時めき玉ふ筈なるに、其事今はいすかのはしと齟齬ひて、何處に世を忍び玉ふにや、其行衛さへ

定かならずと、憐れげに御物語りありしを聞き玉ひしことさへありければ、サテは親人の許させ玉へる我兎人は、去る方ざまなりしか、御なつかしや慕はしやと、思し玉ふ御心さへ起りて、尙は奥の奥まで、底の底まで、菊若の上を聞きたいやうな氣になり、貞松院の山莊を音づるゝことを、此上なう樂しきことに思し玉ひ、貞松院亦た千代姫の、姿容のすぐれたるのみか、心ばゑの優に氣高きを、世にいとおしきものと思し玉ひければ、何時も御物語り合ひて、姫君の音づれ玉ふを、此上無う樂しきことに思し玉ひぬ。

秋も仲ばを過きて、山々の楓霜に色づき、岩間の滑水錦を織りて、鳴く鹿の聲も、隣れに人の腸を斷つ頃、久し振りにて伯母君の安否を問ひ參らせ、傍ら山莊の秋景を尋ねばやと、侍女供廻りの者數許多作ひ、いつもの如く六夜七夜逗留の積りにて、館を出立ち玉ふに、山莊にても豫て姫君御越しの知らせありければ、貞松院尼公にも此上のう嬉れしきことに思し玉ひ、山莊の內外清らかに掃き清めて、其日は朝まだきより待たせ玉ふ。

山莊なる內玄關の此方の一室には、姫君を待ち參らす間の徒然に、侍女ども打集ひて、よもやまの物語り、「露子さんお前はまだお目にかゝつたことはなからふが、今日お出で遊ばす館のお姫さまは、それは〳〵中々お美しい方で、お前に比べて云ふて見れば、お姫さまは櫻の花で、お前さまは梅の花、櫻の飽くまで優しい所は、お姫さまが勝で、梅の凛とした姿は、お前が勝、幷べて見れば梅櫻、孰れに

貧げ勝ちのない一劉の花を花、今日は見ものじゃと思ふて樂しんで居ります、「是れはマア」「なんでもない、妾のやうな醜しい者と、其やうな美しいお方とか比べなされては、詐でも嬉しう過ぎて勿体無うございます、」「何のマア詐と云ふことがございませう　おにさんの物美しいことは、近處と云ふても一寸近くではないが、山一ツ向ふの村まで大評判で、此の山莊に出入の八百屋の芋七さまでが、ドライお美しい侍女衆が見へましたなと、來る度ごとに云ふて居る位ゐ、」「是れはマア何と致しませう、貴女さまがそのやうにかなぶり遊ばしては、妾は眞底お答へに困りかねる、」「何でなぶつて好いものぞ、妾の考へでは、お姫さまとお前と、此頃奥庭の掃除方を承はつて居るアノ菊平どのとを幷べて見れば、三幅對じやと思ひます、」「是れは〳〵お丙どんとしたことが、露子どのは兎も角も、何程美しいからと云ふて、アノ奴の菊平どのと、勿躰ない館のお姫さまと比べると云ふがあるものぞいなア、」「是れはお甲さんのお言葉とも思へぬ、あやしいとか何とか云ふではなし、唯容貌の善惡に就て評するのに、位ゐの上下を攜ふことが入るものかいなア。

何やらむ互み代りに言ひ爭ふ折しも、表門の方に數多の人聲聞へて、やがて千代樣の御入と呼ぶ聲遙かに門外に聞へければ、侍女どもは俄かに口をつぐみて、孰れも粉裝をつくろいながら、御出迎ひとして大玄關の方へと立出づる。

第四十二回

露子が美はしき姿は、端なくも千代姫の眼目に止まり、露子が紙竹の道に堪能なるよしは、計らずも千代姫の御耳に入りぬ　況して擧止動作の卑しからぬ、物云ひぶりの優美なる、万づにつけて抜りなければ千代姫の御心に叶ふとおうかたなっす、此山莊に來ましてより僅か三日を立たぬ間に、八しきなじみの如く慣れ睦み玉ひ　明けても暮れても露ヨ露ヨと呼ばせ玉ふて、御膝下を放ち玉はぬに、露子も姫の優美にして、然も浮さたるさま少しも在はしまさぬを、得難き方ざまと思ひ居ける折から　なりければ、姫の親しみ玉ふを亦た此上なう嬉しきことに思ひて、或る時はもろともに手を携へて、庭なる楓の枝を手折りては　花瓶に向ふて挿を戯はし、又た或る時は貞松院尼公の御前にありて、琴三味線の合奏をなし　又た或る時は古き物語りなど繙きて、才女が筆の跡を源氏枕の草紙なんどに玩味して、互みに所見を語り合ひなどするに　其親み一層優りて、今は姉妹の如くなりけるに　姫は館に歸らせ玉ふことも忘れて、一日一日と過ぎ玉ふ中、いつしか十日餘り過ぎ行きけるに、貞松院尼公も此頃になき樂しきことに思し玉ひて、姫を館に歸へしまゐらせんともし玉はず、姫がかしづきの女たちも、館の中のさびしきよう、山莊の寛かなるを嬉しきことに思ひて、館のことは何時しか忘れ果て、笑ひさゞめきて日を送り居けるほどに、或る日大守隱岐守殿、鷹野の歸へるさなりとて　奥家老の戸田刑部を始め、侍臣供廻はりの者幾人か從へて不意に此山莊に音づれ玉ひぬ。

山莊の奥御殿、貞松院尼公の御居室には、何やらん密かに語らい申す義あれば、暫し次の室に遠慮せ

よとて、侍女どもを遠ざけ玉ひ、太守隠岐守殿と貞松院尼公、問一問あまり隔てゝ御對坐に坐し玉ふ、其時隠岐守どのには靜かに尼公の御面を打見やり玉ひ、「隠」久しう打絶へて御無沙汰の申上げしに、何時も御健勝に渡らせられ、隠岐守身に取り、大慶至極に存じまする、殊に此頃中は、姫が長らくの逗留、御迷惑のほどお察し申す、「尼」何のマア迷惑と云ふことがありませうや、千代姫どのゝ御逗留にて、いつもさびしき山莊も、何となう春めき、お蔭にて秋の物悲しさも忘れられまする、「隠」兄君世を去り玉ふてより、最早彼是十八九年、菊若彼の不景見なく、お妙清兵衛等に伴はれすば、天晴今は此後千代姫に婚せて世を譲んに、其れさへ叶はぬ今日の場合、實に殘念な義でござりまする、「尼」仰せの通り何處に如何して居らるゝやら、今更案ぜられてなりませぬ、「隠」聞けば如何やら此近年菊若は更なり、清兵衛さへ、我領分に入込み居るとの噂さ、「尼」アノ何と仰せられまする、此領分中に忍び居られまするとや、其りやアノ眞實のことでござりまするか、「隠」眞實で無くて何と致さう、如何やら此山莊の近邊に、まとつき居るとの噂さでござる、「尼」エーアノ何と仰せられます、此の山莊の近邊に居られまするとや、其りやマア眞實のことでござりまするか、「隠」岐守は此時乾度形を正して貞松院尼公の面を見詰め居りしが、俄かに呵々と打笑ひて、「隠」マア菊若がことは其れとして置いて、些と貴女にお願ひがござりまするが、何とお聞入れ下されませぬか、「尼」コハ改つての御口上、何やうなことかは存ぜませぬど、身に叶ふことならば、何なりとも、「隠」早速の御承引かたじけなし、左らば申さん、アゝ、然り、是れより元俗して、抽者と夫婦になつて下され」、貞松院尼公はキリ〳〵と柳眉を逆立て玉ひ、「しが、「尼」隠岐守どの、殿公は氣ばしお狂いなされましたか、嫂の此の姿に、何と思ふて今の戯言……」、「隠」岐守は再び四邊見廻はしながら膝を進めて、逃げんとし玉ふ貞松院の下裾を踏まへ、「隠」氣も狂はねば何ともない、先づ心を沈めて抽者が云ふこと、一と通りお聞き下されと、云ひも了はらず貞松院尼公の面をジット見詰めたり。

第四十三回

隠岐守は再び言葉をつゞけ、「武」武臣の身を以て禁裡のことに暗ふるは、最憚り多きことなれども、二代の后と云ふと和漢ともに其例尠からず、一天万乘の君すら然るに、況してや武臣の身を以て、兄御亡せ玉ひし後の嫂を貴ひ受くればとて、誰れかは非とするものあらん、貴女にもこの承知の如く、我妻世を去りてより、ハヤ四年餘り、まだ五十路の坂にも間遠き身を以て、四年以降無妻暮らし、淋びしき閨の獨寢に、鴛鴦の鳴音を恨みしも幾度か、下世話にも云ふ通り、明いたものに何とやら、抽者が心根少しは不愍と思召し、我妻となりて、返へり咲きの美はしき花の香り、再び城内に薫らせ玉へ、姫も貴女をば母の如く思ひ慕ふて居ること幸ひなれと、貞に似合はず女々しげに掻き口説くに、貞松院は腹立しさも通り過ぎて、餘りのことに驚き呆れ、茫然として隠岐守の面を見詰め居玉ひしが、漸くにして、「尼」氣も心も狂はずして、如何してマア其のやうなことが云はれまする、マア能う心を沈め

せお聞き遊ばせ、聖賢の教へにも、嫂水に溺るゝとも何とやら云ふことがござりまする通り、一弟にして兄亡き後の嫂を娶ること、下さまにても好きことゝは申しませぬ、況して一城の主人ともある位身を以て、此不倫のことを行はんと思召し立ち玉ふこと、以ての外の心得違ひと云ふものでござりまする、臣としては二君に仕へず、妻としては二夫に見へず、是れ人の道と申すもの、其道に背けること を行ふて、何の貞さげて人に面を逢はさるべき、好し去る理道ないにもせよ　貞松院は命召さるゝとも、肌身を汚す所存はござりませぬ　アナ汚らはし汚らはし、最早再び其のうなること云ふて下されまする、隱岐守はおめたる色なく、「其やうな堅くるしき理窟は、今時坊主でも儒者でも云ふ者はござらぬ、其れは色の諸譯を解ぬ野暮の申すこと、マア其のやうな野暮なこと云はずと、拙者が云ふことお聞きなされ、左すれば此世に三ッの功德を殘す幸ひあり、一には戀ひ焦るゝ拙者が心を、苦しみより助くること、二には盛りこそ過ぎたれ、色香深き花櫻を、深山の奥に埋めて、人を思ひ死に殺ろす の罪切を免かれ玉ふこと、三には母親なき姫の身に母となりて、惠みの露に憐れなる姫が心を、愛ひの外に潤し玉ふこと、此の三つの功德殘し玉はんには、埒もなき經文讀みて、此樂しき世を悲しく果て玉はんよりは、如何ばかりか優れる、慧き貴女の御心に、是れしきのことが分りませぬかと、世に淺ましきこと得意げに、たゝみかけて問ひ尋ねながら、小膝を進めてアワヤ貞松院の手を取らんとするに、貞松院尼公は、今更恐ろしく股立たしく悲しく、「尼に無禮なり」隱岐守殿、女と偽り非道の所業に

及ばれんには、國守なりとて手は見せまじさぬと、聲震はして罵りながら、ット身を起して彼方に、身を逃れんとし玉へば、隱岐守忙てながら貞松院の袂を捕らへ、「這は聞譯惡るき方ざまや、一端武士が齒の外に出せし言葉、後に引かるゝものと思し玉ふや、斯くなる上は假令ひ手込めに致しても、我此思ひ晴らさずには置かぬと、力に任せて引寄せんとなす折しも、「父上さま何處に在はす、何處に在はすと、聲高らかに隱岐守どのを尋ね搜し玉ふ、千代姫の御聲彼方の一室に聞かふるに、流石非道の隱岐守も、面目なくや思ひけん、俄かに捉へし手を放ちて、素知らぬ貞に坐にもどりて、今のはソの出來心、必らずお氣に障へられなと、言葉を濁す面憎くさ、貞松院は物をも云はず、其儘塵障りも 跪々しく、奥の方へと立入り玉ひぬ。

第四十四回

山莊の奥書院には、隱岐守殿、今しも招き玉ひたる、奥家老の戸田刑部を、御膝下近く呼び寄せながら、四邊見廻はし聲をひそめ、「是りや刑部 汝も豫て承知の如く、菊若淵兵衛の両人、若し家の重寶たる、天國の名刀と系圖の一卷とを携へて、柳營御所に訴へ出で、家督爭ひを致すに於ては、大膳豫ての智辨を振ひ、說き伏せんは必定なれども、唯心掛りは茲の主人の貞松院、平生よりして菊若奴を 鼠 貧になし居る人なれば、若し其事を聞かんには、先代大和守の後室と云ふを肩に着て、如何なる陰謀をなすやも知れず、女なれども油斷ならぬは此人なりと、大膳が心づけ、現に尤もの事なりと、今日應

野の蹄路に、世に亡き者にせんものと、此山莊に立寄りて、あたりの人を退けながら、彼の毒藥を無理無躰に飲ませんものと思ひながら、刑「サテは豫ての御計畧通り、彼の毒藥を尼公に首尾好く、おすゝめ遊ばしましてござりまするか。隱「サア飲ませんものと思ひながら、不圖貞松院の面を見るに、年こそ四十の上に出でたれ、昔し近國切て一等の美人と云はれし丈けありて、今も尚ほ艶いはその美くしさ、ムザ〳〵毒害するは、惜しきものと思ひながら見とるゝ中、計らず思ひつきし一計、刑「何と遊ばされましたか、隱「吾れ四年以前妻を亡い、今も後妻を貰はぬこそ幸ひ、元俗させて我妻となさんには、一ッには家の爲めに、仇を變じて味方となすの便利あり、二ッには我身の幸ひと思ひたれば、毒害のことを思ひ止まりて、利害を說ひて色仕掛に、口說き寄つた……、刑「所は毒害よりも遙かに優つた奇策妙計、殿の平生の御拔例、定めし貞松院樣にも、即座に御承引遊ばしましたでムりませうな、隱「所が中々然甘くは參らぬ、利害に疎き頑愚な女奴、見事我身を刎ね居つた哩、刑「其奴甚だ不屆き至極、シテ其後は何と遊ばしやしたか、隱「手籠めにしても我思ひを、遂げんとなせし甲斐もなく、折惡るく姫が呼ぶ聲に妨げられ、殘念至極と思ひながら、空しく其儘見逃がした哩、刑「扨は實以ていまゝしき話、ヨモ此儘には濟ませまい、何と遊ばす御所存なるや、隱「素より此儘には濟ませぬ、と云ふて、今茲にて事荒立てんには、後々の爲めにも妙ならねば、余は此儘に城中に立返へり、御苦勞ながら此山莊の取締りとして、汝をば茲に殘し置く所存なるは、刑「取締りとばかりにては、何と

やらん事足らず、何とか致しまする義でござりまするか、隱「勿論のことじや、機會を見て貞松院を打果し、外より忍び入りたる曲者の所爲の如く見せかくる爲め、雨戸を外づし、近きあたりの衣類調度など盜み取ること肝要なるべし、其邊の事は世事に疎き余よりも、汝こそ委しう知りつちん刑部は頭ん掻きなべら、刑「イヤ恐れ入り奉りまする、道樂者の拙者なれど、まだ盜賊の所爲までは存じ申さぬ……、イヤ何は然れ、仰せに從ひ此儘今宵より、此山莊に止まりて、機會を待て貞松院を打果し、万事然るべう取計らひまするでござりませう、隱「計畧は密なるが好し、申すまでもなけれど、洩られぬやう扱りなく取計らへヨ、刑「かしこまりました。

折しも此方の衝立の蔭に、忍び隱れて始終の話を、立聞きしたる一個の侍女、甚く驚ろき呆れしさまなりしが、其儘立ちて忍びやかに、何處ともなく立去りたれど、隱岐守と戸田刑部は、話に心を奪はれたる折のことゝて、少しも是れを知らざりけり。

夕日影庭の紅葉に錦を彩る頃、隱岐守殿には、山莊取締りの爲めなりとて、戸田刑部を殘し置き、其他の近習供廻はりの者、數あまた從へ、悠然として立出づれば、千代姫始め侍女ども、刑部は更なり山莊の役人輩、孰れも門外まで見送りたり。

隱岐守殿の立去りし跡を見送り果てゝ、再び彼の奥の殿書院に立返へりたる戸田刑部、四邊見廻し獨言、刑「此山莊の侍女ども、孰れを見ても南瓜に目鼻、取所のない者のみなるに、蹄子とやら云ふ一個

の侍女、是れまで見なれぬ女ながら、評判高き千代姫さまへ、傍にも寄られぬ古今の美形、如何して茲へは流れ寄たか、サテもゆかしい奴ではある哩、取締りとして此山莊に、殘されたこそ幸ひなれ、ヨ〳〵今宵忍び寄り、役目を肩にオヽ然じや……

第四十五回

更け行く夜半の闇を幸ひ、庭先より露子が居室に、忍び入りたる一個の青年、「露子どのと、忍びやかに聲かくれば、程にはやさしき女の聲にて、「菊若さまか、菊「如何にも……、只今參つてる差支へはござりませぬか……、露「ハヤ人々も寢しづまりましてござりますれば……と、云ひながら露子は立、ちて、靜かに菊若が手を取りて、我居室に導き入れ、間の障子をソト閉めたり、中には漏るゝ忍びやかに語らふ兩人が聲。

露「今日隱岐守さま不意の御出で、嘸御驚ろき遊ばしましたことでござりませう、菊「恨み重なる隱岐守假令ひ血を分けし叔父なりとも、忠臧さへ止めずば、唯一打に切て捨てたるものを……、よじなき忠臧が止めだて……、無念を堪へて耐忍び、現在父の仇敵を、其儘見逃す口惜しさ……、露子どのお察し下され、露「御尤もでござりまする……、なれど、急いては大事を仕損ずるが習ひと、昔しから下世話にも申しますれば……、菊「拙者も唯其一點を思ふも爲、漸く今日は吾れと我、急る心を堪へ忍びて、其儘忠臧が言葉に隨ひました……、如何やら聞けば今宵より、彼の奸妄の戸田刑部奴、此山莊の

取締りとして、逗留することになつたとやら、是れには何か深しい子細のあることか、聞込みしことを御座らぬか」、露子は菊若が膝近く摺寄りて、露「イヱ、其れにつけては一大事がござりまする菊「ナニアノ一大事がありとや、一大事とは扨も如何なることか、露「斯云ふ子細でムりまする。

扨も菊若と露子は、過ぎし日に奥庭なる、楓の林の中にて、計らずも出で逢ひながら、人目の闘を憚りて、其場は其儘立ち分れしが、其夜露子より、人知れず云ひ越せしを幸ひ、菊若夜更けに露子が居室に忍び行き、別れし後のことゝ互みに事細かに語らひたる末、菊若思ひ切て、莊兵衛一家横死の顛末を物語り、尚ほ淵兵衛が力にて、其仇山井策馬を打果したることまで物語りけるに、露子驚ろき悲しむこと大概ならず、袖喰絞りて咽せ返へり、暫しは世も人も我身さへ、なきばかりに打泣きしも、菊若が慰さめながら勵ます言葉に、漸くにして思ひ返へし、尚後々のことなど問ひ詢る中に、日頃命も入らじとまで戀ひ慕へる心の眞實は、自づとはにあらはれて憐れなるに、木石ならぬ菊若も、心動きて其夜を初めての新枕、末の松山末かけて契りぬ　是れより機會を見ては人知れず忍び逢ひけるほに、今宵も露子より密かに知らせありければ、斯くは忍びて逢ひけるなり。

閑話休題、其時露子は一層聲を忍ばして、菊若に打向ひ、露「一大事とは餘の儀でもござりませぬ、過刻奥の書院にて、密かに語らふ男の聲、罪なでゝは思ひながら、容子ありげな言葉の節々、衝立の蔭に身を忍ばして、聞くとも知らぬ隱岐守どのと戸田刑部、恐ろしや貞松院さまを殺害せんとの姦計

と、立腹さしたる事柄を詳に語れば、菊若は打驚ろき、「現に开は容易ならぬことなり、是りや斯やつて居る場合でない、是れより直ちに忠臓と相謀して、外ながら貞松院さまの御身の上を護らすては、卑しき奴に姦を變へて、此の山莊に入込みたる甲斐もなし、尚は彼奴等が陰謀に就て、漏れ聞くこのあらんには、直ちに我身に知らせ玉へと、云ひも了はらず帶結め直し、立上らんとなす折しも、不義者見つけた其處動くなと、大音聲に呼ばはりて、手燭片手に躍り入つたる大の男、見れば南無散戸田刑部、朱鞘の刀に血を打たせて突立ちたり。

露子は更なり流石の菊若も、身に過失のあることゝて、云ひ解く便もあらねばにや、默然として其儘其處にうづくまり玉へば、刑部は得たりと近よりて、傍に落散る露子が細帶、取るより早く両人とも、厳しく其場に縛めたり。

第四十六回

朝霜冴へたる庭前に、縛めのまゝ引据ゑられたる両個の男女、男は菊若の菊平にて、女は侍女露子なり、一段高き椽端に、肩衣の肩怒らし、朱鞘の一刀、鍔端ムッと摑み、眼怒らし鼻ふくらして、厳めしげに座れるは、彼の奥家老は戸田刑部なり。

刑「ヤア過刻より、舌の根が爛れるほど責め尋ねても、一言半句の答へだに致さぬは、拷問にかゝりたいのか、但しは又た、不義密通の言譯なさに、默つて居るのか、就れに致せ取締りの爲めに、速々我

君より此山莊に殘されたる拙者、況して現在其御據をあげて引縛りながら、白狀させることができぬとありては、我君に對して此刑部、役目が立たぬ、假令ひ火責め水責めの拷問にかけても、屹度白狀致させ見せる、是りや菊平、是りや露子、汝等拷問の責苦を受けても、白狀致さぬ所存なるか、サテ〳〵馬鹿な奴等なり、拷問の責苦に逢ふて、血の涙流して白狀の致さうより、其やうな愛目に逢はぬ中、白狀致した方が當世であらふものを、去りとは返へす〳〵も馬鹿な奴等ではあゝ哩……、是りや菊平、汝の面は如何にもお平の長芋、ノッペりとは致し居れど、仲間風情の分在にて、此の美くしい、此のツチャりした、此の可愛らしい、露子が初物をせしめるとは、スリヤ胴慾と申すものじや……、おのれアノ茲な不屈不埒奴目が、情ないことして呉れ居つた哩、露子も亦た露子じや、如何に人形喰が天性なればとて、仲間風情と密通するとは何事ぞ、エー思へば腹が立つ、腹が立つ、口惜しい哩……、イヤ是れは思はず口が滑つた……、サア如何じや、斯くまで利害を說き聞かせても、汝達は白狀の致さぬ積りか、ヨシ〳〵、去らば、吾れ一寸だめしに責めさいなみても、屹度白狀致させ見せると、云ひも了はらず突立ち上り、袴の腰立ち高々と取上げ、右手の肩衣後にはねのけ、一刀スラリと引拔さて、庭下駄踏み鳴らし、庭石傍ひに両個が傍に近寄りて、彼の白刃眼前に突きつけ、「サア是れでも白狀の致さぬかと、問ひ詰めれども身を恥ぢてにや、或は他に譯ありてにや、両人は前の如く一言半句も吶言はず、頭を垂れて默然たるにぞ、刑部は愈々急き立ちて　汝白狀致さぬに於ては、斯して呉

ると云ひながら、一刀斜に舳寄る折しも「ヤレ待て刑部、其成敗は無用ぞやと、靜かに止むる女の聲、何奴なるかと、心中に、訝りながら頭を回らし、後の方を振向けば、書院の障子左右に開かせ、侍女をも、を隨へて、悠然として立出で玉ふは、まぎれもあらぬ千代姫なりに、刑部は俄かに刀を鞘に收め、忙てながら一禮せしが、やがて眈度見上げまつり、「刑」不義密通の致せし両人成敗の仕るに、何故ありてお止め遊ばしまするか、「姫」不義密通とは、何誰が不義密通の致せしか、「刑」是れは又たお目の悪いこと、現在茲に縛しめ置く両人の者ども、お目に止まりは致しませぬか、「姫」ナニアノ其れなる侍女露子と、其れなる仲間の若者と、不義密通の致せしとや、這は合點の行ぬことを云はるゝものかな、奥表、出入り殿しき此の山莊、殊更男禁斷の侍女部屋に、人もあらふに如何してマア、仲間風情の臭しきものが、忍び入らふ筈あらふや、這ば埒もなき戯れ、疾く両人の縛め解き捨てよがし、「刑」這は何と仰せ遊ばす、現在昨宵夜更けに、此れなる露子が居室にて、両人密かに忍び逢ふ所を、斯く云ふ拙者確かに見現はしたればこそ、斯くは縛しめ置きたるなるに、其れにても、尚ほ成敗無用と仰せ遊ばしまするか、其れにても尚ほ縛めの繩解き捨てよと言ひ玉ふか、其れにても、尚ほ埒もなき戯れなりと仰せ遊ばしまするかと、愚みがけて進べ立つれば、千代姫は乾度容儀を正し、「姫」確と左様か、「刑」ナニ詳りの申すべき、確かに拙者見現はしまして厶りまする、」千代姫は莞爾と片頬に打笑み玉ひ、「姫」奥は更なり侍女部屋が、男禁斷の場所なることは、汝も能く承知であらふな、「刑」這は改まつての其御尋ね、此の

山莊の取締りにと、態々殿のお目がねを以て、殘し玉へる拙者、其れしきの御禁制、辨へずに何と致しませうや、若し此禁制犯すものは、斬首の刑罰に處せらるゝ法則でございまする、「姫」去らば問はん戸田刑部、汝はアレなる両人の者、不義密通の致せしを、何處に於て見現はせしや、「刑」這ば物慌へへの悪い方ざま、遥刻にも申上げたる如く、是れなる露子が居室にて確かに見現はし、其場を去らせず両人とも、捕縛つたる義でございまする、「姫」シテ汝は誰が許しを受けて、男禁制の場所なる露子が居室の邊りへ去る夜更に立入りしや、ヨモアレなる両人密通のこと、間遠さ汝が居室まで、聞へる筈はあるまいがナと、要害を推もる姫の言葉に、流石の刑部も行迫まりて、顔の色を赤くし青くし、茫然として答ふる所を知らず、姫は冷かに打笑み玉ひ、「姫」ナント刑部、其れでもまだ其方はアレなる両人の者、不義密通の致せしと云ひ張るや……、是れは全く汝が夢であらふ、夢であらふ、夢ならば疾く目を覺ましして、身に覺へなき濡衣着せられたる、其れなる両人の縛め、疾く解き捨て得させよと、言葉靜かに説き諭し玉ふに、刑部も今は詮便なく、心中には齒しながら、「刑」如何にも是れは拙者が不調法、眞平御免下されませと、云ひも了はらずかめ〳〵と、両人が繩を解き捨て、御免々々と云ひながら、頻ふくらして其儘に、表の方に立て行く、後姿の見苦るしさ、侍女をもは顔見合せ、思はずドッと笑ひけり。

貞松院尼公は此方の一室にありて、始終の様子を聞居玉ひしが、權威に誇る刑部奴が小面憎くさ物云ひぶり、憎くき奴めと思し玉ふにつけ、千代姫の才辨とも比弁びなき審判、天晴男と云ふとも耻かしからずと、一層心の中に感じ玉ひながら、不圖障子の隙より、菊平の面を見やり玉ふに、心の迷ひか亡夫大和守の面貌其儘なるに、是れはマア如何したことゝ、吾れを忘れて見詰め玉ふ中、不圖思ひ出し玉ふ菊若のこと。若しや其れかと思し玉ふては、矢も楯もたまらず、やがて我居室に歸へらせ玉ひ、態と四邊の人を遠ざけて、露子を膝下近く招かせ玉ひ、陚宵より今朝までのことは、露ばかりだも知らぬさまに裝ひながら、其れとなくほのめかして、菊若のことを尋ね問ひ玉ふに、豫てより尼公は、生母より菊若を愛しみ玉へるよし、菊若の話に聞き、折あらば斯々然々の譯にて、尼公の御身を守護せん爲め、此山莊に入込み在すよし、告げまいらせんと思ひながら、城中よりの附人の耳に漏れんことを恐れ、且つは却へつて尼公の御疑ひを引起す種ともならんにはと、其を憚りて態と大事を取り居たる折からのことなりければ、今斯く尋ね玉ふ運びとなりては、何とて躊躇ふべき、御膝元近かく進み寄りて、其身が聞きたることゝも、嵯峨野にて育ち玉ふしてとより、今茲に菊平と名を改めて、外ながら尼公の御身上を守護し玉ふことまで、何となう耻かしげに、貞紅らめながら聞へ上げゝるに、サテハ我思ひしに違はず、夫の菊平とか呼ぶ仲間、我身を守護せん爲めに菊若の、名を變へ姿を變へて此山莊に入込みたるにてありしか、トモ知らざれば今が今まで心も付かず、打過ぎしことのおどましゝ

よと、貞松院尼公大概ならず驚かせ玉ひ、又た大概ならず喜ばせ玉ひ、今は一刻も早う相見んと思し玉ふ心のみ胸に迫り來るに、果ては堪へかねゝ、何やらん露子に耳語して、やがて其身は庭下駄軽ろく召し玉ひ、庭石傳ひに奥庭なる、山邊の離れの亭に入らせ玉ひぬ。

問もなう菊平の菊若は、奴姿の身輕な扮装、面はもげに歩みを移す露子が後に付隨ひ、離れの亭の前まで來しが、屹度見やり玉ふ貞松院の御姿に、思はず知らず其儘其所に、ハット計りに平伏すれば、貞松院はハヤ何時しか眼に一杯の涙を浮べ玉ひ、菊若の手を取りて、つく〳〵其面を見やりながら「尼オ、愛しや我兒、能うマア無事で在やつたのう　明暮和君のことは更なり、お妙がこと清兵衛がこと、忘るゝ間はなかりしも、名のみは立派な山莊の主人、眞實は果敢なき籠の鳥、思ひながらも思ふこと、思ふに任せぬ憂身の末、何所に如何して在やるかと、案ずるのみにて甲斐もなく、空に月日を送つて居たに、嬉しや計らず今日の對面、心さ我夫に逢ひまいらせし心地がする、能うマア無事でおいやつたのう」、菊若も思はず知らず咽びながら、涙含む目に貞松院尼公の面を打まもりて、「御いたはしや父上世を去り玉ひし後は、叔父とは名のみ、仇に同じき隱岐守殿の、圏ひの中に圏まれて、世に憚りあることながら、四人にひとしき御境遇、年來の御心勞如何ばかりか、菊若御察し申上げまする、元づ何より御話し申上げんか、ハヤ大概は其れなる露子より御聞き遊ばせしことゝ存じますれど、一ト通り御物語り仕らんと、貞心存生の頃聞きたる、城中退轉のことより、嵯峨野のこと、貞心探期のこと

清兵衛が事、莊兵衛夫婦がこと、小吉野のこと、千丈藪のこと、山井がこと、竹庵が言葉に依りて、太和守の新去は、隱岐守の毒害に出でしを知りぬたる事、山井打取りの事、莊兵衛夫婦最期の事、忠藏が事、青松寺の事、嘗山莊に入込みたる事まで　涙ながら漏れなく告げ聞へまつれば、貞松院は云ふも更なり、傍聞きする露子さへ、又た今更のやうに思はれ、只涙にのみかきくれて、何と云はん言の葉もなく暫しは咽びて泣き居たり。

第四十八回

貞松院尼公は、漸くにして涙を拂はせ玉ひ、「尼大概のことは露子より聞きたれども、左までならんとは思はざりし、和郎は更なり清兵衛がこと、莊兵衛夫婦がこと、忠藏とやら云ふ若者のことさへ、聞けば涙の種ならぬはなけれど、取分けて痛はしきは貞松尼が上なり、世に不幸なるもの多かれど、是れほどまで憐れなる最期の遂げたるもの、又た両人世にあらふや、思へば非道な隱岐守どの、思へば憎くき戸田刑部、猶現在生の母なる人の仇敵を、前に見ながら、大事の前の小事ぞと、遺恨を堪へて見逃す苦るしさ、母上様御察し下されませ、尼今聞けば隱岐守殿には、後の憂ひを絶んが爲めに、人知れず我身を亡き者にせんと、陰謀をたくみ居らるゝより、和郎と忠藏の両人、此の山莊に入り込みて、外ながら妻を守護し奥れらるゝことになつたやうなれど、ソレにしては合點の行かぬ隱岐守の昨日の仕打と、彼の山莊の奥の室にて、獨りがましき戯れ云ひかけられたること、漏れなく語り玉へ

は、菊若は昨宵露子より聞きたる隱岐守殿の陰謀漏れなく告げ聞へて、再び言葉を繼ぎ、「飽くまで邪智にたけたる隱岐守、殊更奸策に妙を得し戸田大膳、傍を離れず助くれば、此の末如何なることをなすやも知れず、刑部如きは如何やうなことなすとも、憂ひとするに足らねども、大膳が智略は侮りがたし、此末ともに御油斷は相成りませぬと、云ひかけしが聲をひそめて、「實を申せば此程より、清兵衛忠藏とも計りて、密かに清兵衛を城中に遣はし、忠義と知れる面々を語らはせしに、思ひの外に斯く云ふ菊若に、心を寄する者尠からず、今暫ばし機會を待ちて、不意に内外より襲はんには隱岐守殿は申すも更なり、大膳始め一味の奴輩、手捕りにせんな必定なれども、叔父と思へば菊若が、無念にはやる太刀筋も、いつしか鈍る心地して、今更前途が思はれまする……、なれど叔父は叔父、仇は仇、血縁ありとて現在に、父上様の仇敵、見逃す譯はムリなせねば、やがて奸黨一味の奴輩、切り盡し刈り拂ひ、國を治め家を起し、目出度城中に、御迎へ申上ぐる折あらんな必定、何卒其れまでは、御身をおいとひ遊ばしてと、語る言葉の勇ましさに、貞松院は露子も共に、いつしか愁ひの眉開け、莞爾しながら見かはす貞、行く末々のうれしさ哀は、自づと心に抽かるめり。

貞松院は再び菊若に向ひて、「尼和君の言葉は心に徹へて、嬉しう思ひまする、左れど此身は生甲斐もなき世捨人、必らず〳〵心にかけて、大事を過ち玉ふなやと、云ひかけて傾むく日影を見やり、「尼「這は長物語りに大概ならず時を移しぬ、若し刑部一味の人々に覺られんには、其れぞ此上なき大

事なり、菊「現に這は恐付かぬことでござりやした、若し疑られんには眞個に這上なき一大事、母君様も露子も共に……、貞松院は身を起して、居一去らばでござる菊若どの……、菊「母上様……、シット見かはす貞と貞、又たもや涙の雨催ひ、晴間を待たず貞松院尼公、露子を跡に從へて、見かへり勝ちに庭石傳ひ、御居室の方へと立去り玉ひぬ。

後見送りて菊若は、潤める目元を拭ひながら、菊「思はず今日は母上さまに名のり合ひ、久振りにて生みの母なる、亡き貞心に逢ふたやうな心地がした……、ドリヤ人の目にかゝらぬ中、部屋に戻つて忠藏にも、子細を語り清兵衛にも、音づれぜんと云ひながら、四邊見廻はし悠々と、彼方の方に行かんとする、折しも後に聲ありて、「我良人さま、菊若さま、暫し待たせ玉ひてヨと、愁ひに沈む忍音に、呼止むる人ありけり。

第四十九回

思ひもかけぬ人の聲に、流石の菊若肝を挫がれ、思はず知らず身震ひしながら、屹度後を見返へれば、アラ訝かしや千代姫君、目を泣き腫して小亭の裏手の方より立出で玉ふ、餘りのことに菊若、何と云ふ可き言葉もなく、暫しは姫を見詰め居りしが、漸くにして腰を屈め、菊「お呼びなされましたは下郎奴がことでござりまするか」、千代姫は耻かしげに振袖にて面を掩ひ、姫「サレばいナヲ、松平大和守様の御嫡男、菊若さまと申す御方、貴郎さまの外に、又たと兩人ありませうや」、菊若は愈々胸を

しながら、菊「這は思ひもよらぬ其仰せ、御覽なされ拙者ことは、今朝はど貴女さまの御審判により、又たとなき命拾ふた此山莊の仲間菊平、ソレにマア菊若とかキクラゲとか、思ひも依らぬ名を云ふて、呼び留め玉ふは如何なることぞ、下郎奴一向合點が參りかねぬ」、千代姫は堪へねばかりに袂を噛へて咽びながら、姫「妾は和君の爲めには、親の許るさせ玉へる妻には侍らずや、今更隱くさせ玉ふは恨みなり、親なる隱岐守には、如何なる恨み在すやは知なねど、露ばかりだも係ばりなき妾が身まで、問ひ奸曲し、心とばし思し玉ふか」、菊若は愈々思ひ惑ひながら菊「這は聞分け惡るき其仰せ、物にはし狂はせ玉ふか、拙者ことは生れながらの卑しき者、此山莊の仲間菊平、菊若とやら云ふ者には候はず、況して和女さまの婿さまなどゝは、思ひも依らぬ儀でムる、姫「如何程仰せ遊ばすとも、妾は正しく貴郎の妻、若し是れは又た御無躾千万、姫「貴郎こそ餘りに情なし、伯母さまと貴郎さまの御物語りは、殘らずアレなる立木の蔭にて、承まはりました」、菊若は身を震はして、吃度千代姫の面を見詰め、菊「ナニアノ其れでは始終の容子を……、姫「ハイ殘らず聞て居りました」、菊若はツカ〳〵と姫の傍に進み寄り、菊「聞れしとあらば詮方なし、今は何をか隱み蔽さん、拙者ことは眞實松平大和守が嫡男、同苗菊若、和女の爲めには、大事な父御、松平隱岐守殿を讐と覘ふ者なり、斯く名乘る上からは、和女の爲めにも正しく敵なり、捕縛りなり、刺殺ろしなり、和女の心任せにして、父御の爲めに仇を拂ひ玉へ」、千代姫は愈々涙に咽びながら姫「親の思は深けれども、親子は一世夫婦は二世、如何に我父隱

を覗ひ玉ふ方なりとも、現在良人の貴郎に向ひ、如何でア其やうなことが出来ませうや、況して貴郎様の清潔なる御心に比べんには、雪と墨なる父が奸曲……と、云ひかけて亦たさめ〴〵と泣き玉ふ、

（菊）吾れは菊若に逢ひなければ、其菊若を良夫と云給ふ和女の言葉、つや〳〵以て合點が行かぬ、（姫）這はお言葉とも覺へず、貴郎さまはまだ幼なくして、城中に在せし頃父なる隱岐守より、行末は貴郎と妻とを夫婦として、其跡目を相續させんぞ、家中一般に告示玉ひしよし、伯母さまの御話に承はり侍りぬ、貴郎さまとてヨモ御存じ遊ばされぬことはござりますまい、（菊）去ることのありしよしは、眞個に吾も清兵衛に聞きたることあり、左れど汗は隱岐守ぞのに其心ありて、告示玉ひしにはあらずして、民の心を繋ん爲めに、一時の權謀に出でたること云ふまでもなし、其を以て吾れを良人と思し玉ふは、大なる非事なり、況して隱岐守ぞのと吾身とは万劫松代、解くに解かれぬ仇敵、何やうに仰せらるゝとも仇敵の娘のお前さまと、夫婦にならりやう筈はござらぬ、（姫）其お言葉は無理ならねぞ、一度親の許せる良人、假し親々に見放されても、良人につくが女の道、貴郎の仇は妾が爲めにも亦た仇敵、斯くまで思ふ妾が心、離れと思し玉はちは、唯一言我妻と、云ふて玉はれ菊若様と、云ひもあらず泣き伏し玉ふ。

菊若吃度思案して、（菊）人木石にあらず、左はそまでに云給ふものを、菊若なりとてナド嬉しう思はざらむや、其を聞れぬは浮世の義理……と、云ひかけしが目をしばたゝきて、（菊）なれど我身頼みまいらすこと御承引あらんには、（姫）アノ何と仰やります、貴郎のお頼み聞さまつらんとは……、（菊）其時こそは正しく我妻、（姫）嬉しやソンなら妾が願ひを……、（菊）如何にも確に聞き入れ申さん、（姫）シテ其お頼みとは、（菊）隱岐守の白髮首、我目前にお見せ下されっ

第五十回

月は何時しか雲間に隱れて、山々の姿も霧に鎖され、夜を籠めて憐れに鳴く鹿の聲のみ、譯繁き小夫が下の閨を破ぶりて聞へぬ、うき世のうきを身一つに引受けて悲みの淵深う沈める千代姫、短檠下に端坐し玉ふ御姿、涙に潤ふ目元の美はしさ、雪を欺むく御面に、二筋三筋亂毛のちらつくなさし過きて凄きばかり。

伯母君なる貞松院尼公の、御寢物語りに告げ聞へ玉へる後は、千代姫見ぬ中より、菊若の琴影目前にちらつきて、見ぬ戀にあくがれ玉へる甲斐もなう、うたてき哉、逢ふての後に能う聞けば、行末かけて契らむと思ひし其人は、父君隱岐守殿を、俱不戴天の仇敵と付覗ひ玉ふ敵同志、我妻たらん心あらば、隱岐守が白髮首、我目前に携へヨと、無情にも云ひ切り玉へること、一度は餘りに慘き御言の葉と恨みもし悲しみもし、ひたれ、深く思ひ廻らせば、斯無理なこと仰せらるゝも、末遂げられぬ夫婦仲、なまじいに優しきこと云ふて、思ひを增させんよりも、叶はぬ頼み云ひ聞へて、思ひ切らせんとおぼし玉ふ菊若の眞情に出でたりとは、戀さ心に姫ソレぞと、其物に於て覺り玉ひながら、見れば見るほど

思ひしより遥かに優る殿御振り、其上ならず文墨武藝、何一ツとして暗きことなく、智恵才覺も世に立勝れて在ずこと、知り玉ひしより、賢けれども小女氣の、一層思ひますかゝみ、曇りなき身も曇りある、親の犯せる罪惡に、解合ふこともなきさ淵ぐ、わまの小舟の能絶へて、よるべもわらぬ身の不幸、打ちかこちつゝ夜もすがら、眠みもせで過ぐさせ玉ふ、御心中ぞ憐れなる。

親なる隱岐守殿の御心に從がはんには、今日豐の間に立聞きしたる、菊若の計畧は云ふも更なり、其他清兵衛がこと、忠藏がこと、貞松院尼公の御心のほどさへ、漏れなう告げ聞へて、菊若追捕のことを外ながら助けまつらねば孝道立たず、又た良人と思ふ菊若の御心に從がはんには、父なる隱岐守を討たれても、恨みがましう思ふこと叶はぬは更なり、菊若一味の人々に力を添へて、城中に引入れ、隱岐守征討の計畧を助けねば、妻たるものゝ貞操に叶はず、良人を助けて親を擊するも五逆の罪なり、去らばとて身をうき世の外に遁れて、親夫の修羅の爭ひを外に見んは、見る目なく、聞く耳なく、心失せんには知らず、左なくてはナ、心の外に死にまさる其苦みを打消さるべき、思へば世に生れたる身こそ今は恨みなれ。

親は五逆の罪を犯し玉へる罪人なり、親人菊若君の餌さ及に擊れ玉はんも、吾身は罪人の子とうたはれん、菊若親人の爲めに擊れ玉はんも、吾身は罪人の子とうたはれん、生きて甲斐なき命生きながらへて罪人の子とうたはれんよりも、身を捨てゝ一つには父を贖ひ、世を菊若君に讓りて遁世し玉はんことを勸め、又た二ツには菊若君に願ふて、父なる隱岐守の爲めに、恨みを捨てゝ罪より許させ玉はんことを望みまつらんこそ、なかなかに優れることなれ、嗚呼死すべき妻が甲斐なき命の、捨場は茲。

離れやな千代姫は、夜もすがら思ひ惑ふて、漸くに思ひ定め玉ひしは、惜しさ盛りの春をも待たで、吾れから散らん櫻花、いかしさ香りは何處を傳ふて、誰が袖ぬらす涙とやならん。

夜は千代姫が涙の中に明けはなれて、朝日うらゝかに東の山に昇りけるはやに、姫は俄かに御歸館のこと仰せ出させ玉ひ、何日もになう打ちしはれて、貞松院尼公の御前に至り、御暇乞ひ申出させ玉ふに、尼君にも何となう別れ難しう思召し、強て止めさせ玉へども姫君たゞて御暇申上げられ、日頃陸じう交はり玉へる露子には、其身に召し玉へる御袿を、其儘脱ぎて與へ玉ふ、是れぞ後々までの御遺物となりて、露子が生涯の涙の種とならんとは、後にぞ思ひ合はされける、大玄關より御乘物に召し玉ふとき、姫君計らず遁か彼方に平伏して、御見送り申上ぐる菊平の貌見合せ、思はずハット面紅らめ玉ひしが、其儘乘物の戸を鎖し、御振袖にて面を掩ひ、涙を呑みて御歸館遊ばさる、嗚呼是れぞ一生の御別れ、御いたはしくも亦た憐れなり。

第五十一回

茲に又た、獨り青松寺に殘れる桂清兵衛は、菊若君の仰せを受け、密かに隱岐守殿の城中に忍び入り、

故大和守殿の恩義を忘れぬ、恵義の志厚き面々を語らひけるに、誰れ一人として異存を抱く者なく、皆な隠岐守殿の隠悪を憎みて、菊若に心を通じけるにて、清兵衛も今は其折の來るを待つばかり、去るほどに、十月の十日は隠岐守殿、兄君大和守殿の跡目相續の御許しを受けられたる當日のことゝて、例年此日は城中に大祝宴を開かれ、尚は此日に限りて城下の者どもに御廓内拝觀を許さるゝの例なりしかば、清兵衛は豫て此折こそ策略を以て城中に忍び入り、日頃の本望を遂げんと思ひ居ける折からの事とて、其日より二日の後に迫れる十月八日の夕暮、密かに彼の貞松院尼公の山莊に忍び行き、仲間部屋にて菊若忠藏一人に面會し、思ふ所一十始終菊若に告げ明へけるに、菊若喜ばせ玉ふこと大概ならず、所に周竟の機會なり、吾儕三人は云ふも更なり、其他汝が子分の者ども、孰れも変を變へて廓内拝觀の爲めに、城中に入込む群衆の中に立混じり、城内深く忍び入り、尚は吾に志を寄する、恵義の者どもとも密に計策をしめしあはせ置き、内外より切入らんには、隠岐守殿の御首を得んこと、袋の内を探ぐるより易すしと勇み立ち玉ふに、清兵衛忠藏も同じく共に勇みたち、尚は其日のこといも、何くれとなく手筈を談合したり。

談合果てゝ後菊若は、昨日奥庭にて貞松院尼公に拝謁して、是れまでありしことゝいも詳に物語れること、千代姫の爲めに立聞きせられたる事まで、洩れなく清兵衛に語り玉ひ、尚は言葉を繼ぎて、「千代姫吾を親隠殿守が心より許せる良人なりと思ひ諛ひ、唯一心に慕ひ居ること幸ひ、不愍な者と思ひながら、程よくあやなし置きたれば、ヨモ吾儕主從が、此の山莊に忍び居ること、隠岐守の耳に入れるやうなことはあるまじけれど、今日俄かに城内に立歸へれるより推量れば、何とやら油斷ならぬ心地がする、汝が考へでは如何なものもや」清兵衛は頭を振りて、「其御心遣ひなら御無用なり、千代姫君は御心はあれ父君隠岐守殿とは全く反對にて、義理にかしこく人情に富ませ玉へば、假し如何やうなことありとも、現在良人と思ひ入り玉ふ、尊公さまの御身の上に就て、秘密を洩し玉ふやうなことは万あるまいと思ひまする……と、云ひかけて小首傾むけしが、再び言葉を繼ぎ、「然し御傷はしきことには、彼の君には御自害遊ばさんは必定……」「其は亦た如何なる子細ありてか」「左れば候、良人と思ひ玉ふ尊公さまに從はせ玉はんには、孝道立たず、親御なる隠岐守様に從はせ玉はんには、貞操が立たず、身を板挟みの苦しき淵に沈ませて、思ひ惑ひ玉ふ果ては、義理にかしこく渡らせ玉ふたけ、其身を捨てゝ御自害遊ばされんな必定と、云ひかけて目をしばたゝけば、菊若ハタと膝を叩き玉ひしが同じく眼に涙を浮べて「若し左あらんには世に憐れむべき限り、何と致しても のであらふか……、殊更吾儕打入りのことも、最早僅かに二日の後に迫る今日が日、何とせん詮便もなし、」「如何にも御傷ましき限りには候へども、御家の大事には換へられず、無残ながら御見殺しになすの外はでざりませぬ、」「假し手段を以て一度びは其死を止むるとも、吾れ隠岐守と刄を交へん日に及ばゝ、乃ち姫が自殺は必定、」「御傷はしきことながら、」「眞個に致し方もない儀じやナア」、

互みに良を見合はせて、嘆き玉へば、傍聞きする忠藏も、思はず何時しか涙ぐみ、暫しは共に言葉なく、默然として居たりけり。

第五十二回

其夜も更けて山寺の鐘聲、鐘々として丑滿告ぐる頃、黑羽二重の綿入、尻高々と端折り、赤鞘の大小落しざしにブッ込み、黑頭巾眉深に被りたる大の男、奥庭の方よりノソ〳〵と出で來り　貞松院尼公の御寢殿の前まで來て　四邊見廻はせしが、一刀スラリと引拔き、踏石に片足踏みかけ　屹度殿の方を窺ふさま、折しも寢殿の樣下より、躍り出でたる一個の若者、驚く曲者の利腕攫んで、肩にかくると思ふ間もなく、エイヤッと聲かけて、間遠からぬ植込みの中に投げ込めば、茲にも一個の少年ありて　投げ込れたる曲者の、腰取るより早く、手鞠の如く彼方なる、竹垣目がけて投げつくるに、何かは堪らん、流石の曲者ウーンとばかりにへたり伏す　アラ怪しむべし、茲にも一個の人ありて、矢庭に竹垣の後方より躍り出で、彼の曲者を輕々と肩に引かけ、兩人の若者指招きて、裏手の方に走り行くに、兩個の若者點頭き合ひ、同じく跡に從ふて、裏手の方へと走り去りぬ。

茲に貞松院尼公の山莊の裏手なる、扇山の中腹　山神廟の庭前　襲に曲者を肩に引かけたる男、彼の曲者を肩よりおろして、後に廻り　腰に手練の活を入るゝに、悶絶したる曲者は、忽ち息吹きかへして目を見開き、折しも雲間を漏れ出づる月の光に　四邊を見廻せしが、今しも茲へ舞ひ來し、兩人の若者に

屹度目をつけ、「ヤ、汝等は山莊に召使はるゝ、菊、忠平の兩人ならずや」、此時襲に樣子より躍り出で、曲者を投げたる若者も　亦た彼の租込みの中より現はれ出で、手鞠の如く曲者を投げたる少年も、共に言葉を揃へて、「如何にも仲間の菊平忠平、コリヤやい戸田刑部、何と膽がつぶれたか」、彼の曲者はハッタと兩個の若者を睨めつけ、刑「アノ茲な無體者奴が　吾れを誰れとか思ふ、松平家の奥家老戸田刑部、菊「戸田刑部とは名のるまでもない、能く吾輩知つて居る哩、忠「無禮とは何の癖者、夜更に拔刀を携へて、主家の後室の御寢所を窺がふ者と　孰れか無禮なるぞ……、況しや是れに御座わす御方はと　菊平が方を指しながら、忠「汝が爲めにも主筋なる故、松平大和守樣の御嫡男、松平菊若樣と知らずや、アノ茲な呆氣漢奴が」、此時刑部を茲で負ひ來りし彼の男は、冷かに刑部を打見やり、「見忘れしか戸田大九郎、吾れを誰れとか思ふ　汝が爲めに妹貞心を嵯峨野に擊れたる、桂清兵衛宗清なるは、又た其れなるは我兒忠藏……」、聞きも了はらず戸田刑部、膽を挫れ吾れを忘れて逃げ出でんとすれば、清兵衛スカサズ蹴倒して、骨も碎けよと背を踏みにじり、清「今更逃げんとすればとて、何とて逃がさん……、汝も武士のハシクレならずや　尋常に立上りて、若君始め吾輩親子が、貞心が爲めに酬る恨みの刀受けヨやと、云ひも了はらず蹴返へせば、コロ〳〵〳〵轉りて、菊若君の足下近くへたぶり伏すに　菊若同じく踏みにおり、菊「汝れ茲な大惡生、亡き浮貞心が爲めに、恨みを酬る菊若が　刀を受けよと云ひも敢へず、腰なる一刀拔手も見せず、扇先深く切りつけて、蹴る所を蹴返

へし玉へば、清兵衛忠藏もろともに、一刀引拔き、ヤッとかけたる聲の下、刑部が首は落ちにけり。

三人は互ひに顏見合はせ、快げに打笑みしが、「菊「好き軍陣の血祭り、小氣味よし小氣味よし」「清「明後日の御進のはぢも、太吉遊に相違なし、忠「現に心地よき、兩人「儀でムりまする、「清「唯其れまでは此紋が遺骸、人に見られては面白からず、「如何にも仰せ御尤も、先づ其れまでは何れへか、此奴が遺骸隱し置き、行衛知れずになつたるやう、取計らはんな肝要なりと、云ひつゝ四邊見廻はせしが、やがて此藏もろともに、彼の遺骸に石を結びて、谷底深く投げ入るれば、其間に菊若は懷中より、眞心尼の靈位取出し、刑部が首級を供へて亡魂を祭つり玉ふに、清兵衛忠藏も立返へりて、同じく菊若の後に額つき、共に念佛申しける。祭り果て、後、首級も同じく石を結ぶ、谷底に投げ入れしめ其れにて好しと菊若は、恭しく靈位を懷中に收め、やがて清兵衛忠藏を、後に隨へ悠々と山道傳ひ元來し路を、山註へと降る玉ひしが、知る者絶へてなかりける。

第五十三回

今日は十月の十日、大守松平隱岐守殿、跡目相續仰せ付けられたる祝日、年毎の例に依り、今年も亦た城下の者どもに、域內御廓內の拜覽を許さるゝとのことなりければ、豫ねて待ちかねたる城下の人々、殊更小春日和の、日暖かに風輕き上天氣なりけるにぞ、朝未明より御濠近く詰めかけ、御城門の開くを待つ者、幾千と云ふ數知れぬばかり、やがて一番太鼓鳴り、二番太鼓鳴り、三番太鼓鳴りて、御城

門開かるゝや、待ちに待ちたる人々、大浪の打寄するが如く、吾れ先にと進ひはぢに、警護の役人の制止も聞かばこそ、其人態を取調ぶる暇もなく、ハヤ城中深く立入りて、築內の役人の築內をも待たず、吾先にと奥深く立入るも多かりけり。

茲に又、此群衆の中に立混りて、城中へ忍び入りたる、菊若清兵衛忠藏三人の者どもは、同じく群衆の中に混入りて忍び入りたる、清兵衛が子分の者どもに、狼煙を揚げて合圖をするまでは、深く心を戒めて覺れぬやう心をつけよと云ひ置て、清兵衛を先に立て、三人とも〳〵人目を盜み、築內知つたる細道より、奥庭の方にと忍び入るほどに、警護の役人輩は云ふも更なり、城中の人々さへ多くは群衆の騷動に心を奪はれて心づく者なく、稀には心づく者なきにはあらねど、仲間風に姿を變し三人のさま、城內の者とより外見へぬに、誰一個として疑ふ人なく、ハヤ竹の馬場と唱ふる、兩側竹藪生ひ茂る馬場先まで來りぬ、折しも彼方に見もる五人の人影、菊「早〳〵も心づき、菊「アレに見もるは正しく戸田大膳が長男の牛之助と、其四天王とか呼ばるゝ、松永兵助木田才兵衛生駒玄蕃沖野船松なんどゝ云ふ奴なり、彼奴等に出遇はんには見咎められんな必定、切て捨てんは易けれど、大事の前の小事、暫し就れへか姿を隱し、やり過さんは如何に」、清兵衛は頭を振りて、「清「仰せ御尤もでムりますれど、今ま似かに姿を隱くさんには、却て彼奴等が疑ひを率かん、幸い此の馬場は人通り稀れなる所でムりますれば、擧ぞ出遇はがしらに、不意に切て捨てん方宜しからんと存じまする、殊に彼奴等も仇敵

の餘類、切て捨つるも惜しからぬ奴等で御座御座りますれば……」菊若は打うなづき、「左らば汝が意見通りに致さん、忠藏も心をつけヨ、」「かしこまりました。」

やがて間近くなりける程に、菊若足早に走せ寄り、油斷を見すまし拔手も見せず、前に立たる牛之助が首打ち落し玉ひ、遁へす刀に驚き果る人、淵野邊松が肩より、乳の下かけて真二ツに切り下げ玉ふ腕は冴えたる眞蔭流、刀は名に合ふ天國の名刀、水瓜を切るに異ならず、續いて走せ來し清兵衛忠藏、身を躍して殘る三個に切てかゝり、忠藏才兵衛を切り倒す間に、清兵衛は八ヤ玄蕃兵助を切て拾てたり、刀も拔かせず五人の者を、瞬間に切り殺したる三個の早技、鬼神も及ばぬ腕前なりと、後に人々感じ合へりとかや。

却て說く太守隱岐守殿には、此日早天より、正廳に於て、多くの家臣の壽き祝ふ言の葉を受け玉ひ、其れより歸れへも御酒肴を賜ばり、尙は大膳始め重なる家臣の面々には、奥御殿に於て御盃を賜はり、午少し前、微醉を帶て御居室に入らひ玉ひしが、不圖千代姫のことを思し出させ玉ひ、毎年今日は早天第一番に我居室に來りて、喜詞述ぶる姫が、今日に限り朝まだきより、唯の一度も姿を見せぬは如何なる譯ぞ、心地にても惡しきにはあらぬかなと思ひやりて、姫の御居室に音づれ玉ばんとなし玉ふ折しも、忙たゞしく入り來る姫の御乳人、金蒔繪の狀箱隱岐守殿の御前に置くと其儘、御前なるをも憚らず、ワット計りに泣き伏したり、合點行かずと隱岐守殿、「コリヤ姫が何とか致せしか、何とか

致せしかと、言葉忙はしく問ひながら、疾く胸强て沈め、狀箱の蓋取るより早く、中なる文を取出して表書を見玉ふに、南無散、御父上樣千代子よりと認めたる脇に、筆太く書置の事と記るされたり。

第五十四回

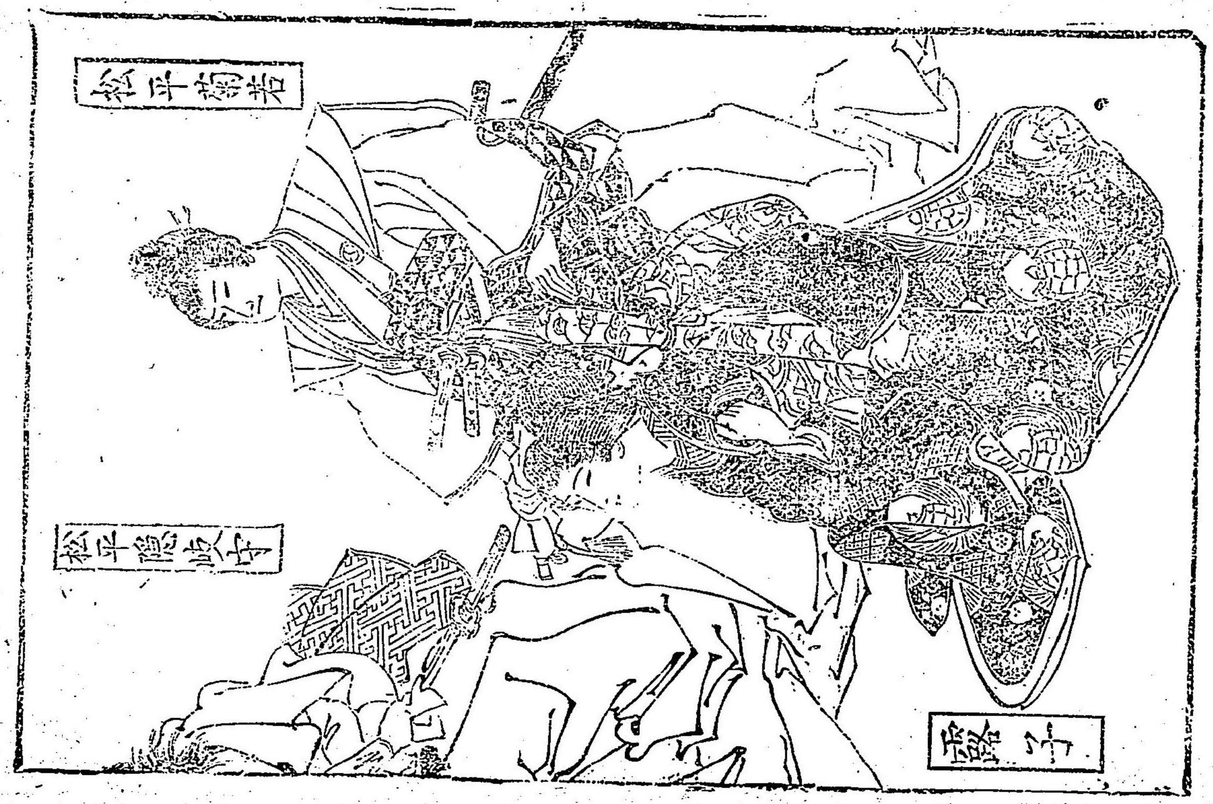
隱岐守は氣も狂亂、打震ふ手に封推開ひて讀下し玉ふに、先づ隱岐守が大和守を毒殺して、其國を奪ひ玉ひしことより、罪を數へて其非を責め、今にして其志望を改め玉はずんば、後世の罪障償ふに道なきよし、理義明かに書き認め、尙は其御心の底は知らねど、假染にも親の御口より、將來は斯々せんと告示玉ひしからには、其身と菊若どのとは、契りこそなけれ、夫婦たること云ふまでもなし、然るに今菊若どのは尊大人を仇と覩ひ、尊大人はまた菊若どのを打滅さんと計り玉ひ、互みに敵對し玉ふことなれば、妾今尊大人の御心に從はんには、孝道は立つに似れども、是れ孝に似て眞實の孝にあらず、況して其人に反對つく不貞の罪は免るべうも侍べらず、亦今菊若の御心に從はんには、婦道には叶ふに似たれども、是れ婦道に叶ふに似て眞實の婦道に叶ふにあらず、親に弓引く不孝の罪は免るべくも侍らず、生きて不孝の子となり、將た不貞の婦となるよりは、死するに如かず、現にや妾が身にて、今孝貞兩つの道を全ふせんとするには、唯一の死あるのみ、死の外には婦道を全ふするの道なく、父た皆しみを免るゝの道なし、先立ちまゐらす不孝の罪は、免るべくも侍らねども、其は草葉の蔭より御許申上ぐべく、唯何事も前世より約束事と諦めさらめ下されいやう願上げい、何卒妾が心懈れ、

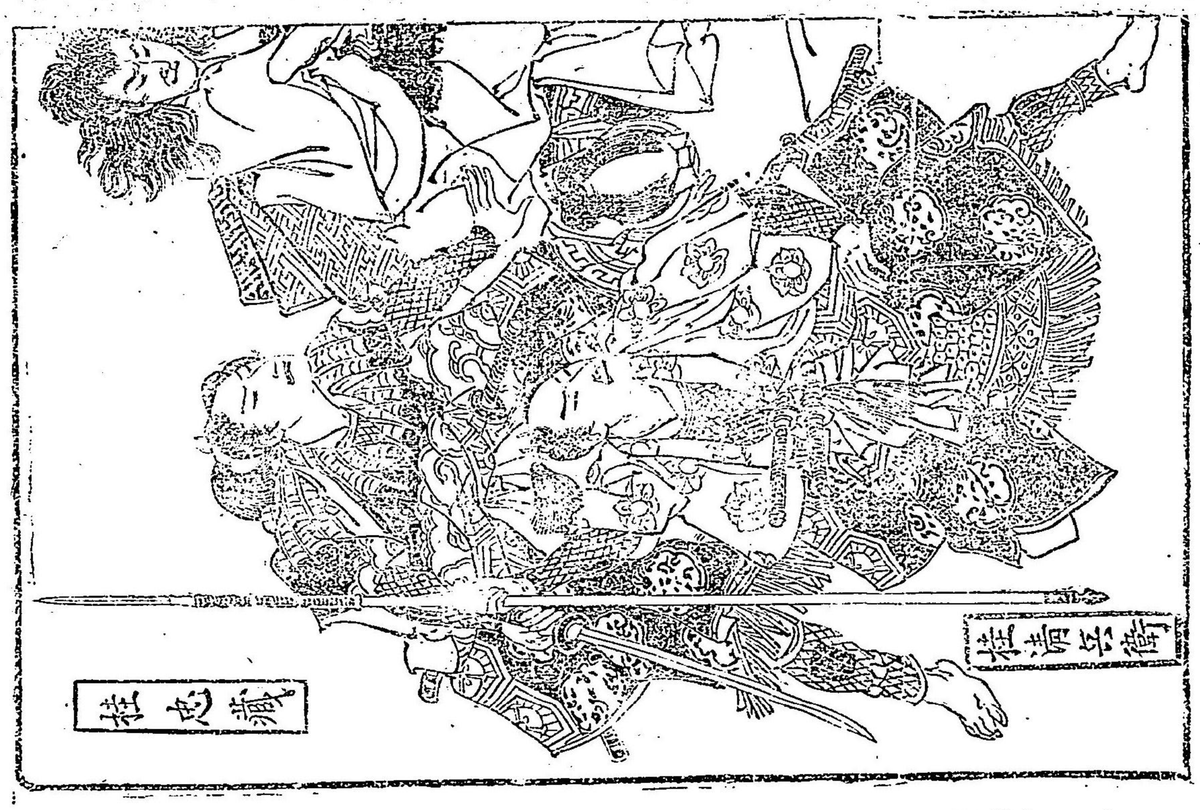
汝が身憐れと思召さば、是れより佛門に歸依して、今迄犯し玉へる罪を、大慈大悲の御惠みの露に洗はせ玉ひ、押傾し玉ひし家國は、其眞實の主なる菊若どのに返し玉へ、御命乞ひのはゞは、千代が身に換へて、菊若に願みまつり候まゝ、ヨモヤ異存はなれあるまじくと存じ上げ參らせ候と、御はこまゝ〳〵と認めあり、一字一句として涙ならぬはなき、姫が遺物の一通、隱岐守讀みも了はらず、其御文手に握れるまゝ、奥殿なる千代姫の御居室へと走せ出し、御障子推開け見廻はし玉ふに、御傷はしきかな姫君には、御屏風の中に、懷劍を以て咽を貫き、朱に染りて打伏し居玉ひぬ、隱岐守の爲めには、天にも地にも唯一人の姫君、斯くならせ玉ふを見ては、如何でか心亂れさらん、流石惡逆無道の心にも、今更胸のみ塞りて、兎角云はん言葉もなく、茫然として涙に暮れて居玉ひたり。

折しも天に響く一發の砲聲、俄かに起る鯨波、合點行かずと隱岐守、忙てゝ廻廊の方に立出で玉ひ、屹度大空を見やり玉ふに、烽火の烟空に棚引き、四邊に聞ふる容易ならぬ人聲、合點行かずと疑ひの眦を決して、再び打見廻はし玉ふ折から、彼方表の長廊下より、足元シドロに忙てふためき、此方をさして走せ來る大膳、隱岐守の御傍に走せ寄りて、大「我君其れに在せしヨナ、隱誰れかと思へば汝戸田大膳ならずや、忙たゝしき其さまは、何事なるぞ、殊に今打上げたるアノ烽火と云ひ、將たアノ人聲と云ひ、合點の行かぬことばかり、何ぞ異變の起りしか、大「仰せの通り、大變が起りました、隱「ナニアノ大變とは、大「左ればでござりまする、彼の菊若と彼の清兵衛を始めとして、一味徒黨の面々幾十人と數知れず、廓内拜觀の群衆の中に立混じりて、城内深く忍び入り、倅牛之助を始め、多くの人々を手にかけ、我君樣は申すも更なり、拙者が行衛尋ね探す容子、ソレに賴み甲斐なき味方の人々、多くは菊若に降參したれば、今は中々以て御油斷相成りませぬ、隱何と申す、アノ菊若清兵衛等が、城内深く亂入せしとか、大「如何にも左樣でムりまする、今だも茲に寄せ來んには、其れぞ這上なき一大事、隱「シテ城中の者どもゝ、多くは菊若に降參せしかと、大「如何にも左樣でムりまする、一ト先づ茲を徹退去さ遊ばすが、肝要でムりまする」、隱岐守は暫し思案に沈み玉ひしが、忽ち眦クワッと見開らき、御佩刀の柄に手をかけ玉ひしよと見る間もなく、物をも云はず唯一刀に、大膳が首打落し玉ひ、返へす刀に腹にヅブと突立て、キリ〳〵と引廻はさんとなし玉ふ折しも、姫君の御居室の方に聲あり、「ヤレ待たれヨ隱岐守どの、松平菊若改めて見參仕らん」と云ひもあへず、菊若君、後に從ふ桂清兵衛、伊東忠藏、隱岐守は思はず知らず、シタ〳〵と後退ざりし玉ひしが、乾度三個を見詰めたる儘、暫しは言葉なかりけり。

第五十五回

其時菊若は一禮して、徐かに隱岐守に打向ひ、菊「御見忠遊ばせしや隱岐守殿、絶へて久しき今日の對面、菊若身に取り大慶至極に存じまする……、今は何をかお隱し申さん、俱不戴天の父の仇、日頃の恨みを晴らすも今日と、城内深く忍び入り、御傍近う勇み進める甲斐もなく、唯今アレナル一室にて思


桂鬼清兵衛
桂鬼清兵衛
桂鬼清兵衛


桂鬼清兵衛
桂鬼清兵衛

ひも依らぬ千代姫どの〻御自害、殊更殘れる一通の遺書、勇み切たる菊若が、勇氣も何時しか鈍り來て、仇とは思へど今更に、和君に及向ふ力も亡せたり……と、云ひかけて目をしばたゝき、菊「今少し早からんには、千代姫どの〻赤心に對し、恨みを捨て〻御切腹、お止めの申せしるのを、實に殘念な義でムりまする、」隱「愚かや菊若、卑怯にも兄御を毒害して、其家國を押領せし五逆の罪人、非を悔ひ心を改めでは、何とて一日たりとも生きながらふ面目わらん、禽獸にも劣れる隱岐守が、五十年の榮花一夢も、姫が身を殺ろしての諫言にて、跡なく茲に覺め果てたり……、今我惡事を助けて、大惡をなさしめとる戸田大膳を切て捨てしも、一度び奪ひし家國を、和郎に返へす覺斗がはり、」清「サテは全く御慘悟の遊ばしましたか、」忠「惡に強きは善にも強しと、世の比喩にも漏れ玉はぬ、天晴見上げし御一言、」菊「菊若殆んど感服の仕ります、」隱「ハヤ首打て〻松平菊若」、菊「御心のはど承はらぬ中なら知らず、今となりては叔父君に、向る及はムりませぬ、」隱「這は云ひ甲斐なき其一言、汝の爲めにはまされもなき親の仇、家の爲めには國を奪ひし逆臣、何たゞらふことのあらふや、疾く首打てヨ松平菊若」菊「假令如何はど仰せ遊ばすとも、今となりては此菊若、及向ふ刃はムりませぬ、」隱「這は云ひ甲斐なし、云ひ甲斐なし、去らば汝の力は借らぬと、云ひも敢へず隱岐守、突立てし及をキリ〳〵と引廻はせしが、苦痛に堪へぬ戰慄はして、」隱「女々しきものと笑はん人は笑へ、菊若吾汝に最後の頼みあり、惡人の種ながらも、惡に染まぬ姫が心根、憐れと思ひ玉はんには、既此世にはなき者なれど〻、苦し氣なる息の下より搔き口說く、言の葉の了るも待たず、早くも察せし菊若は涙を拂ひて、菊「仰せまでもなく、千代姫は未來永劫此の菊若が妻……、左れば姫が眞操に對し菊若生涯外に妻をば娶らぬ所存、」隱「ソレ聞ひて安心せり、嘸や草葉の蔭にて姫が喜ぶことであらふと、云ひも了はらず隱岐守、去ば〳〵と云ひながら、其儘息は絶へにけり、折しも茲へ走せつけし人々、驚て菊若に心を通せし班は更なり、一家中の面々殘りなく庭に居ならぶはどに、清兵衛は乾度見廻はし、菊若に一禮して、廻廊の欄干に片足踏みかけ、大和守御病死の根原より、今日までのこと殘りなう告げ聞へしが、俄かに言葉を改めて、態と高らかに聲張りわげ、清「一度計らずも隱岐守殿御病沒なされしに依り、御遺言に基き、故大和守様の御遺子、菊若公を迎へて、此城の主人に立てまつらんとす、諸士に於てもヨモヤ御異存は已之れあるまいなと云ふに、誰れかは異存を唱ふべき、皆な一齊に「何條異存の候べき」と答へぬ。

去るはどに清兵衛は、菊若君は更なり、忠臣とも談合の上、隱岐守どの病沒のよしを以て、家督相續、故大和守の嫡男菊若に仰付けられたき旨、手落ちなく願出でけるはどに、柳營御所にても格別の詮議もなく、直ちに其願ひを聞屆け玉ひ、其上ならず、更に禁中に奏して、大和守に任せられけるにぞ、一同の喜び譬へんかたなく、菊若やがて其名を改め、松平大和守、源の殿正と云けり、斯くて隱岐守は柴より、千代姫の葬儀盛んに執行ひ、貞松院尼公を彼の山莊より城中に迎へ參らせ、露子は側室となな

し、清兵衛を家老とし、忠藏を奥家老となし、又た彼の清兵衛が子分にして、大概ならず立働きし壯者は更なり、彼の嬉戯野なる彦七爺夫婦の者さへ城中に招きて、就れも士分に取立てられ、又た家中にても、忠義を忘れざりし面々には、夫々加増し玉ひ、隱岐守一味の者さへ、大赦の心を以て別に咎め玉はざりけるにぞ、就れも其寛潤にして、仁心深きに感じ、愈々忠勤を勵み仕へける、菊若は又た千代姫の心根を深く憐れに思し玉ひ、唯蹄子を側室とし玉ひしのみにて、牛涯妻を娶り玉はざりければ、亦誰一個として其義理堅きに感ぜぬはなかりしとかや。

斯くて菊若愁々仁政を敷き玉ひしほどに、國治まり民喜び、千代の松風幾千代かけて、其家榮へけるとなん、めでたし〳〵。

第三十七回末段、忠藏が物語の中、抛者が毋と申すは、崇都祇園に臭しき舞妓なりしにとある祇園は、島原と記るすべきを筆者のあやまれるなり、其他尚は誤字脱字算ふるに暇なきばかりっかれど、煩はしきまゝ一々訂正を加へず、偏へに看官の諒察を願ふになむ、松華庵主附記す

鬼桂清兵衛 終

明治廿八年五月十日印刷
仝　年六月壹日發行
定價金八錢

大阪市東區淡路町二丁目九十三番邸
編輯兼發行者　藤谷暢吾

大阪市西區阿波堀通二丁目六番邸
印刷者　山口恒七

大阪市東區北久太郎町四丁目百廿八番邸
發賣所　岡本仙助

大阪市南區塩町四丁目二百十一番邸
仝　岡本宇野

大阪市西區阿波堀通二丁目六番邸
印刷所　文新堂活版所

版權所有